

異文化へのあこがれ

—国際海洋都市 平戸とマカオを舞台に
—在外資料が変える日本研究—

Yearning for Foreign Cultures

An International Symposium in Hirado and A Panel in Macau
New Aspects of Japanese Studies based on Overseas Documents

稲賀繁美 編

Ed. by INAGA Shigemi

Head of the Project Coordination Meeting—Suishinkaigi

With the assistance of NEGAWA Sachio

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト
「日本関連在外資料調査研究・活用事業」
プロジェクト間連携による研究成果活用
推進会議・2019年度事業報告論集

Coordination between Projects to Make Effective Use of Research Results
Network-based Projects: Japan-related Documents and Artifacts held Overseas
NIHU National Institute for Humanities

異文化へのあこがれ

—国際海洋都市 平戸とマカオを舞台に
—在外資料が変える日本研究—

Yearning for Foreign Cultures
An International Symposium in Hirado and A Panel in Macau
New Aspects of Japanese Studies based on Overseas Documents

稲賀繁美 編

Ed. by INAGA Shigemi
Head of the Project Coordination Meeting—Suishinkaigi
With the assistance of NEGAWA Sachio

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト
「日本関連在外資料調査研究・活用事業」
プロジェクト間連携による研究成果活用
推進会議・2019年度事業報告論集

Coordination between Projects to Make Effective Use of Research Results
Network-based Projects: Japan-related Documents and Artifacts held Overseas
NIHU National Institute for Humanities

序文	稲賀繁美	v
第 I 部：平戸国際シンポジウム編		
趣旨説明	稲賀繁美	1
松浦静山と平戸商館時代	松田 清	3
The VOC archives as a valuable source for the history of early modern Japan	Frederik CRYNS & Cynthia VIALLE	19
平戸に伝存する日蘭関係史料について—史料紹介—	前田秀人	31
日本人による海外への移動に関する歴史記述を精緻化させる —日系関係在外資料を活用して—	朝日祥之	37
平戸から新世界へ—山縣勇三郎のブラジル雄飛	根川幸男	49
レポート：国際シンポジウム国際海洋都市平戸と異文化へのあこがれ —在外資料が変える日本研究—	光平有希	63
平戸国際シンポジウム・プログラム		65
平戸国際シンポジウムの様子（写真）		66
第 II 部：ICLA 編：Panel: Marine Vessel and Road as a Socializing Vehicle: Enroute Experiences, Transnational Encounters and Exchanges		
Introduction	HASHIMOTO Yorimitsu	75
On the Marine Road: Anglo-Japanese Encounters and Exchanges in Modern Maritime Culture	HASHIMOTO Yorimitsu	79
Under the Shadow of Apartheid: Maritime Paths of Transnational Communication	INAGA Shigemi	95
Crossing “Manchukuo” and Brazil: Migrant Vessels as Contact Zones	NEGAWA Sachio	109
Navigating Between the West and the Rest: East Asia’s modern Experience in the Works of Enrique Gomez Carrillo (1904-1907)	Facundo GARASINO	115
ICLA 発表の様子（写真）		123
次世代の国際共同日本研究・研究協力への模索	稲賀繁美	129
Exploring International Team Research and Collaboration for Next-generation Scholars in Japanese Studies Overseas	INAGA Shigemi	130
執筆者紹介		132

序 文

Preface

本報告書は、人間文化研究機構で第3期中期計画期間に推進されている「ネットワーク型基幹研究プロジェクト」を構成する17におよぶ研究企画のうち、「日本関連在外資料調査研究・活用事業」に属する「プロジェクト間連携による研究成果活用」に関連する業績を、2019年度終了時点での、前半期3年の成果報告の一環としてまとめた論集であり、これは2019年度の事業報告の一部をなす。

前半の第1部は、2019年2月9日に、平戸市の平戸オランダ商館で、平戸市、(公財)松浦史料博物館、平戸オランダ商館の共催のもとに組織した「国際海洋都市平戸と異文化へのあこがれ—在外資料が変える日本研究—」での講演および発表論文を中心に構成する。

後半の第2部は、2019年7月31日にマカオで開催された国際比較文学会 ICLA: International Comparative Literature Association の世界大会において、提案のうえ採用されたワークショップ Marine Vessel and Road as a Socializing Vehicle: Enroute Experiences, Transnational Encounters and Exchanges での英文発表を再録した。

これらとともに、標記のプロジェクトの成果の社会還元・国際的な成果発信および一般市民を含む社会との学術交流の一環をなす。またその遂行にあたっては、人間文化研究機構の特別経費の支給を受けた。最後に、本報告書に関連する企画にご賛同・ご協力を得た各方面の機関にあらためて御礼の言葉を申し添える。

推進会議・総括責任者 稲賀 繁美

第Ⅰ部：平戸国際シンポジウム編

国際シンポジウム

国際海洋都市 平戸と異文化へのあこがれ
—在外資料が変える日本研究—

2019年2月9日

The International Symposium
The International Port City of Hirado
and its Interest in Foreign Cultures

趣旨説明

稲賀 繁美

(国際日本文化研究センター教授)

人間文化研究機構では、欧米に点在する日本関連資料のうち、学術的・社会的に重要であるにもかかわらず、総合的な調査が十分でない資料を研究対象として取り上げ、それらの資料を保存する国内外の研究機関、大学などと連携して調査研究を行うことを目的とし、以下4つのプロジェクトを実施しています。

1. ハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書調査研究・活用（国際日本文化研究センター）¹
2. ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築（国立歴史民俗博物館）
3. パチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用（国文学研究資料館）
4. 北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—（国立国語研究所）
5. プロジェクト間連携による研究成果活用（国際日本文化研究センター）

「日本関連在外資料調査研究・活用事業」と名付けられた事業であり、いずれも人間文化研究機構における第3期中期計画に属するプロジェクトとして、2018年度はその3年目の折り返し地点を迎えます。

これらの事業統括を担当するプロジェクト間連携による研究成果活用班（国際日本文化研究センター）は、他のプロジェクトと連携するとともに、歴史的・地理的な軸によって各プロジェクトを縦断・横断する視野を確立し、個別の学術成果をより効果的に活用するとともに、広く国内外の社会一般への普及につとめています。そして、これを通じて、海外の若手研究者の問題意識に点火すること、日本に関する情報の国際的流通のありさまを歴史的・地理的に復元するとともに、日本国外になお埋もれている未発見の資料、未研究の文書などの将来の発見に向

¹ 「ハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書調査研究・活用」は、2018年度まで。

けて、研究者の関心を高め、合わせて複数の国家や言語、文化圏に跨る研究者集団の構築を目指しています。

今回、平戸市及び（公財）松浦史料博物館、平戸オランダ商館の全面的なご協力をいただき、同プロジェクトの中間的な成果を、研究者や社会一般、とりわけハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書調査研究・活用プロジェクトと関連する歴史的な場所である、平戸の皆様にご披露する機会を得ました。

本シンポジウムでは、プログラムのよう、平戸オランダ商館文書をふくめ、この時期の日欧交流研究の泰斗、京都大学名誉教授、松田清先生をお呼びしてご講演をいただきました。

また、オランダ・ハーグ文書館に保存されてきた、平戸関係文書の解説をすすめてこられた、フレデリック・クレインス先生、ライデン大学のシンティア・フィアレ先生からの詳しいご報告も含まれております。その他、大分でのキリシタン弾圧や宗門人別改め関連文書の収集であるマレガ文書については、京都外国語大学のシルヴィオ・ヴィータ先生からの報告、一昨年、全国を巡回したシーボルトの遺品復元の展覧会に関連する国立歴史民俗博物館の福岡万里子准教授の報告、国立国語研究所の朝日祥之准教授より北米移民関係の報告、そして国際日本文化研究センターの根川幸男機関研究員による平戸の風雲児・山縣勇三郎のブラジル雄飛についての報告など、充実した日程を組むことができました。

この国際シンポジウム開催に際しましては、平戸市及び（公財）松浦史料博物館、平戸オランダ商館のご協力を仰ぎました。ここに関係者および、平戸市の皆様に厚く御礼を申し上げるとともに、多くの方々の御来席に、あらためて感謝の気持ちをお伝えする次第です。

なお、本報告書には、当日の講演・発表のうち、原稿を頂戴できたものだけに限り掲載しております。年度末予算処理の時間的制約ほか、諸般の事情により、すべての報告を掲載できませんでしたことを、一言お断り申し上げます。

松浦静山と平戸商館時代

松田 清

(神田外語大学客員教授)

1. 好学大名松浦静山の修史観^(注1)

平戸松浦家 34 代、平戸藩 9 代藩主、松浦清 (1760～1841) は安永 4 年 (1775) に 16 歳で家督を継ぎ、安永 8 年 (1779) 20 歳で「楽歳堂」文庫と藩校維新館を建て、自ら『大学』を講ずるなど、文教に力を注いだ。天明 3 年 (1783) 10 月 17 日、参勤の途上、大坂で京都の儒者皆川淇園に会い、師の礼をとった。時に静山 23 歳、淇園 50 歳。同月 20 日近臣の長村内蔵助 (鑑、靖斎) 17 歳を入門させ、寛政 3 年 (1791) 11 月 15 日には自ら 32 歳で淇園に贅を納めた。文化 2 年 (1805) 3 月には嗣子熙^{ひなむ}を 15 歳で入門させ、翌年 47 歳で家督を熙に譲り、静山と号して隠居した。

好学の静山は隠居後も学問を続け、文政 4 年 (1821) から執筆を始めた記録集『甲子夜話』全 278 巻と、生涯を掛けて和漢洋の文物を集めた「楽歳堂」文庫は静山の文化的二大遺産となっている。静山は後世に伝えるという明確な目的をもって、耳目に触れたあらゆる事物を記録し、内外の文物を収集した。

静山は天明 4 年 (1784) 修史館「緝熙斎」を設置し、自ら総裁として家史編纂を主導した。「緝熙」には光輝ある事蹟を編輯するという意味が込められている。平戸藩初代鎮信 (法印) から 4 代鎮信 (天祥) に至る平戸商館時代 (1609～1641) は国際貿易港として栄えた平戸の黄金時代であり、静山はこの時代の家史に力をそそぎ、歴史的証言を外国資料にまで求めた。

天明期は薩摩藩主島津重豪や福知山藩主朽木昌綱など、いわゆる蘭癖大名^(注2)が海外の文物を収集し、蘭学者を庇護していた。静山も参勤のたびに長崎に滞在

¹ 本稿は 2019 年 2 月 9 日に行った本シンポジウムの基調講演「松浦静山と平戸商館時代」の概要をまとめたものである。本稿に引用する一次資料は特に所蔵先を示す場合を除いて、すべて松浦史料博物館所蔵である。

² 他に、佐伯藩主毛利高標^{たかすえ}、桑名藩主松平忠和^{ただとも} (もと紀州家徳川頼徳^{よりやす}) がいる。



図1 「西藩之鎮」印（図2部分）



図2 P. Schenck, *Atlas contractus*. Amsterdam. c. 1700.
松浦史料博物館蔵

するとともに、本木良永や吉雄幸左衛門など、先祖が平戸藩に仕えた長崎の有力な阿蘭陀通詞を家臣のように遇し、彼らを通して貴重な蘭書を数多く入手し、海外情報を集めた。入手した貴重蘭書には「楽歳堂図書記」の印のほかに、「西藩之鎮」（図1）や「子孫永宝」の印を捺した。「西藩之鎮」は日本の西の守りを固める平戸藩を意味する。

静山にとって修史は儒教的な「孝」の実践、すなわち、先祖の輝かしい事跡を明らかにし、子孫に伝えることに他ならなかった。その考えは静山が編纂し、その遺志を継いだ熙が校訂した家史の書名『敬孝述事』^(注3)にも表れている。「敬孝述事」とは先祖を敬い、先祖に仕えて、その事蹟を述べる、という意味である。そのような静山の儒教的修史観は、長村鑑が「静山公行実」（文化10年成）で引用する天明2年の静山の言葉によく表れている。

天明二年壬寅公曰く、古の君子、其の先祖の徳善功烈有るを論議し、^{これ}諸を天下に列し、諸を後世に伝へ、以て其の美を顕揚するは、孝を崇ぶ所以なり。善あるも知らず、^{みず}知るも伝へざるは、不孝焉より大なるは莫し、と。乃ち修史の志を興し、親から祖服〔先祖の事蹟—引用者注〕を纂し、始めて稿を起

³ 全49巻。静山の遺志を継いで松浦熙が校訂し、安政4年3月17日に総目録（巻49）を作成した。

す。其の法は先ず統系を作り、繋ぐに其の事蹟を以てし、斷簡欠牘の文を歴々^レ捫し、散漏逸脱の事を搜索す。行余は必ず焉に従事す。夜半に至り、乃ち輟む。(原漢文)^(注4)。

儒教的修史観は、静山の師事した皆川淇園や親交のあった昌平黻の林述斎も共有していたであろうが、静山の場合は特に、生涯座右に掲げ、拳々服膺した祖母久昌夫人の遺訓十条が決定的だったようだ。第一条に「神仏常に御信心御志の御事」、第二条に「御先祖御大事に御心懸之御事」、第三条に「物毎御堪忍第一之御事」とある。

2. 天明期収集の平戸商館時代資料

静山は修史のため、阿蘭陀通詞や商館長ティチング、蘭癖大名朽木昌綱などから、平戸商館時代と見なす資料を熱心に収集した。

この収集においてティチングが果たした役割は大きい。静山はまず、日本を追われた異邦在住者が制作したらしい南蛮鉄の刀鏢（伝存せず）を、江戸滞在中のティチングから贈られた。また、天明2年1月17日（1782年2月28日）に平戸の川内浦^{かわうちうら}からヨーロッパ製の鉄の大錨が引き上げられると、さっそくそれを城内に取り寄せて絵師に『蛮錨図』（松浦史料博物館蔵）を描かせ、平戸商館時代のオランダ船の錨であることをティチングに証明させた。さらに英国王ジェームズ1世の銅版肖像図（松浦家蔵）を入手し、阿蘭陀通詞本木良永にそのラテン語題字の翻訳を命じた。本木良永のために題字のオランダ語訳を教えたのはティチングだった。

本木良永はまた、静山が入手したコメリン編『オランダ東インド会社の起原と発展』（アムステルダム、1645）の図版8葉（松浦史料博物館蔵）の解題を命ぜられ、おそらくこれもティチングの協力を得て行うことが出来た。静山はおそらく天明期にヨハネス・デ・ラム刊行の長大な銅版『バタヴィア景観図』（国立科学博物館蔵）も入手した。

天明6年11月には、長崎で阿蘭陀通詞吉雄幸作（幸左衛門）から西洋船旗集『異

4 原文「天明二年壬寅公曰、古之君子論譏其先祖之有德善功烈、列諸天下、伝諸後世、以顯揚其美、所以崇孝也、有善而弗知、知而弗伝、不孝莫大焉、乃興修史之志、親纂祖服、始起稿、其法先作統系、繋以其事蹟、歴捫斷簡欠牘之文、搜索散漏逸脱之事、行余必從事焉、至夜半、乃輟」

国旗標』(国立科学博物館蔵)を購入し、翌天明7年6月には参勤の途上、京都で松浦家の御用達商人猪飼太右衛門から「遊女之図」屏風(所謂『松浦屏風』、国宝、大和文華館蔵)を贈られ、平戸商館時代の日本の古風俗に強い関心を寄せた^(注5)。

天明7年末、静山はアベ・プレヴォー編訳『旅行記集成』(パリ版)のオランダ語版(ハーグ・アムステルダム版、1747-1767刊、21巻)をいち早く入手した朽木昌綱から、そのなかに平戸商館時代の英船平戸入津記事のあることを知らされ、早速その翻訳を昌綱に依頼した。第2巻(ハーグ、1747)には平戸商館時代の記録であるジョン・セーリス『日本渡航記』およびリチャード・コックス『イギリス商館長日記』のオランダ語抄訳が収録されていたのである。

天明8年春には静山も長崎から、『旅行記集成』オランダ語版(阿蘭陀通詞植林重兵衛旧蔵19冊本、うち16冊が松浦史料博物館蔵)を入手した。昌綱は静山の依頼を受けて、所蔵本第2巻の平戸商館関係記事の抄訳を進め、翌年(寛政元年)までに『蘭書和解』を静山に送ったらしい^(注6)。

静山が天明期に収集した以上の平戸商館時代資料のうち、南蛮鉄の刀鏢、蛮鉤図、コメリン『オランダ東インド会社の起原と発展』の銅版図、英国王ジェームズ1世肖像図、バタヴィア景観図、異国旗標を以下に、資料写真とともに、個別に考察しよう。

3. 南蛮鉄の刀鏢

松浦静山は『甲子夜話』三篇巻十五(松浦史料博物館蔵写本)で「予ガ佩料ノ刀ノ鏢ハ大小トモ世ニ南蛮鉄ト謂フモノナリ、迺チ図ノ如シ」として大刀、小刀それぞれの鏢図(図3)を掲げ、「大ノ方」は「径二寸五歩強／厚二歩／重三十六匁一分」、「小ノ方」は「径同上／厚同上／重三十八匁八分」と計量を示す。

この刀鏢は静山が「壮年に及ばん」とする頃、参府した商館長ティチングが火

5 松田清「国宝『松浦屏風』の由来—松浦静山収蔵の経緯について—」(『平戸紀要8号』平戸市編、2020年3月)参照。

6 松浦静山は朽木昌綱から『蘭書和解』を受け取ったあと、第2巻所収の同じ平戸商館関係記事の新訳をおそらく文化初年までに作らせ、『敬孝述事』に編入した。この新訳の訳者は蘭学者志筑忠雄と推定される。詳しくは、松田清「セーリス平戸入津記事翻訳考—朽木昌綱訳『蘭書和解』から『敬孝述事』へ—」(『平戸紀要8号』平戸市編、2020年3月)参照。



図3 南蛮鉄の刀鏢 甲子夜話 松浦史料博物館蔵写

災で浅草寺に避難したところを、夜間お忍びで訪ねた際に、ティチングから贈られたものという。ティチングは「禁制品と知りながら日本に携行した、オランダ人の『渡船旧恩の国』平戸の藩主である貴方に差し上げる」と打ち明けたという。商館長ティチングの江戸滞在は1780年3月26日～4月14日（安永9年2月21日～3月10日）および1782年4月7日～4月22日（天明2年2月15日～3月10日）の2回であったが、いずれも静山の在国時期にあたり、江戸不在であった^(注7)ので、謎が残る。いずれにしても静山は後に、なじみの博識な仏教学者荻野梅塙から、異邦在住の日本人による制作であるとの証言を得て、『甲子夜話』に書き入れた。

先年参府の阿蘭陀人、其頃寄宅の坊焼亡^{まち}の患ありて、蘭人浅草寺の境内に寓す。余其頃は壮年に及ばんときにて、夜中潜行してその旅舎に往見る。加比丹名を「テツチング」と称す。この人今に世の識る者なり。遇ち通詞に憑て、客は予なることを聞き、敬礼の状甚至れり。予も亦愛語を交ること数刻、「テツチング」立退き行李と覚しき物あるを啓き、其内底中に有るものを搜、持て予が前に進み日ふ、この品は表向きに云ふ可からざる物にして、某密に持渡れり。惟君侯は吾が蛮渡船旧恩の国なれば、其古を忘れざるを示す。この巧作の出る所は貴国に於て嫌疑あり、因て竊に携来るを、今君公を見て奉る

7 「静山公実録 上」（松浦史料博物館蔵）による。

と。

又或人曰ふ（梅塢）此「テツチンギ」が上りし錨は正しく吾国人の末、異邦に在る者の造りし物なり。この異邦に在る者の制せること、世に知る者有り
と。

4. 蛮錨図

天明2年1月17日（1782年2月28日）、平戸商館時代に貿易港として栄えた平戸の川内浦（当時の表記は河内浦）の湾内から、西洋製の大錨が引き揚げられるや、静山は城内に運ばせ、同月25日に実見した。このとき作成された「天明二寅正月十七日河内浦より揚碇之絵図」（原寸大、図4）を計測すると、錨環内径42.5cm、錨幹400cm、錨爪の両先端間239.3cmである。

本木良永は静山の命を受けて、絵師に全体の彩色縮小図をオランダ製洋紙に描かせ、錨発見の経緯を書き入れた自筆の「Aan den Wel Eedelen Groot Agtbaaren Heer, Prins van Firando, in het Kijserrijk van Japan」（日本国平戸侯尊大敬君あて）オランダ語証明書を作成し、ティチングへ証明書に署名するよう求めて書簡を送った。1782年12月18日付けのその書簡は次のような文面だった。

学士イサーク・ティチング殿

平戸侯尊大敬君のご命令により、オランダ甲比丹イサーク・ティチング殿のために、オランダ錨の図を載せた書冊から数条の内容を、私こと小通詞本木栄之進が翻訳いたしました。この錨はオランダ暦1782年日本の第1月すなわち正月に平戸国の河内浦湾の海底から引き揚げられました。しばらく前の出来事ですが、他国の船が大勢の人々を乗せて河内浦へ入港し投錨したも

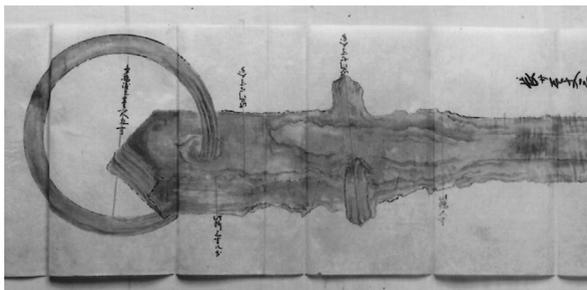


図4 河内浦より揚碇之絵図 部分 松浦史料博物館蔵



図5 ティチング署名蘭文証明書
松浦史料博物館蔵



図6 蛮猫図収納の木箱
松浦史料博物館蔵

の、錨を再び挙げるができなくなりました。そのため潜水夫とともに湾の海底を探索しましたところ、和製の錨と一緒に、ここに描いたオランダの錨が海中から引き揚げられました。これは、その図の形態からオランダの錨と確かに本当に一致しております。こういうわけですので、閣下、もちろん閣下のお気持ち次第ではありますが、オランダの錨であることを証明していただくご署名を賜り、朱のご封蝋を捺して下さいますよう、署名者よりお願い申し上げます。

頓首再拝 閣下の卑僕なる

1782年12月18日

本木栄之進

ティチングが署名し、赤ラックの落款を押した証明書（図5）は前後に漢文の由来書と寸法書を配した冊子に装丁され、『蛮錨図』と題されている。この冊子は蘭文の積文、漢文のオランダ語訳とともに、蓋に『蛮猫図』（図6）と墨筆大書した木箱に納められている。

5. 銅版図8枚

静山が入手した銅版図8枚はイサーク・コメリン（1598～1676）が編集した旅行記集『オランダ東インド会社の起原と発展 第2巻』（Isaac Commelin, *Tweede deel van het begin ende voortgangh der Vereenighde Nederlantsche Geocroyeerde Oost-Indische Compagnie*. Amsterdam, Jan Jansz., 1645/1646.）所収の旅行記3種から抜き取られたもので、静山はこれに甲乙丙丁戊己庚辛の記号を配

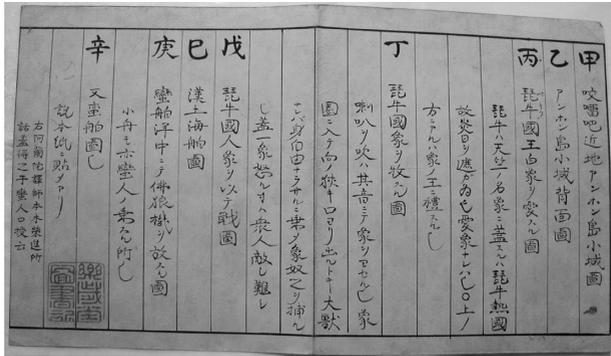
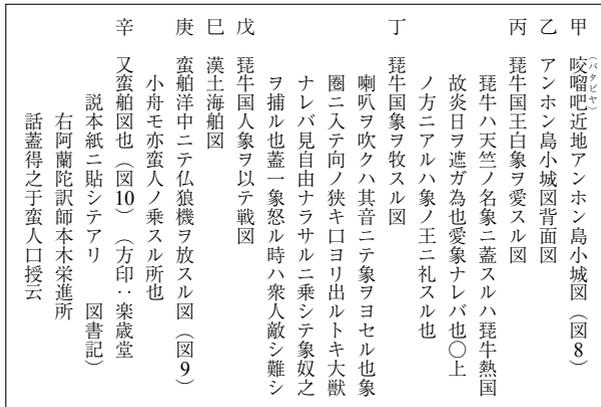


図7 松浦静山筆銅版図目録



(図7の釈文)

し、自筆の目録(図7)を作成して愛蔵した。おそらく舶載されたコメリンの原書の行方は不明である。

静山は目録の末尾で、題は阿蘭陀通詞本木榮進(榮之進)すなわち良永の話によると記し、おそらく良永は「蛮人」の「口授」から解題を得ただろうと推測している。しかし、図の典拠となった旅行記の原文と照合した結果、良永は単独で原文を参照し、難解な部分は推測も交えて解題したと考えられる。典拠となった旅行記と各図の原文キャプションの和訳を静山の付けた記号とともに掲げよう。

1. スターフェン・ファンデル・ハーヘン (Steven van der Hagen) 提督の第2回東インド航海記 [1604~1607]
 「No.6. ベグー (Pegu) 国王の壮麗な宮廷およびその巨大な白象の図」(丙)



図8 アンボン島城図(甲)

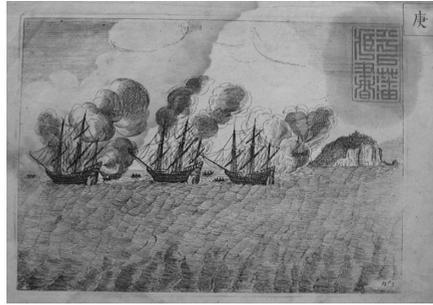


図9 炎上するポルトガルのガリオン船(辛)

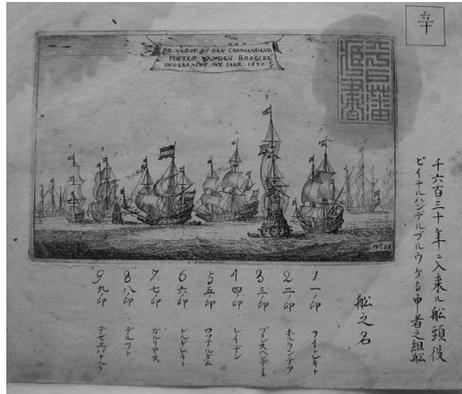


図10
 ピーテル・ファン・デル・ブルツケ
 隊のテッセル島帰着図

- 「No.7. ペゲー国王とアワ (Aua) 国王の戦闘の図」(戊)
 「No.8. 象狩りの図」(丁)
2. 小コルネリス・マーテリーフ (Cornelis Matelief de Jonge) 提督の1605年・1606年・1607年・1608年における東インドおよびシナ航海記
 「No.3. マラッカ沖で座礁し自船の火口で炎上するガリオン船3艘」(庚)
 「No.5. 1607年のアイボイナ城の図」(甲)
 「No.6. 海側および船上からみたアイボイナ城」(乙)
 「No.10. シナのジャンク船図」(巳)
3. ピーテル・ファン・デン・ブルツケ (Pieter van den Broecke) のカーボベルデ、アンゴラ、ギニアおよび東インド航海記

「No.12. 艦隊図」(辛)

ビルマ（ミャンマー）のペゲー（現在のバゴー）にあった王国に関する「丙」「戊」「丁」3図はフランクフルトのデ・ブリ書店刊『東インド紀行集』第7巻（*Indiae Orientalis pars septima*. Frankfurt, Joh. Th. & Joh. Isr. de Bry, 1606.）所収、ベネチア商人ガスパロ・バルビ（Gasparo Balbi）の1579年ペゲー滞在記が典拠である^(注8)。

「庚」図は、1606年10月31日のマラッカ沖海戦でポルトガル人がオランダ艦隊に自船を捕獲されないように自船を炎上させて退去する図である。「蛮舶洋中ニテ仏狼機ヲ放スル図 小舟モ亦蛮人ノ乗スル所也」との解題は推測による。

「辛」図は1629年12月15日、バタヴィアで東インド総督スペックス（Jacques Specx）から艦隊司令官に任命されたファン・デン・ブルッケが1630年6月6日にオランダ・テッセル島に帰着する図である。

6. 英国王ジェームズ1世肖像図

イギリス東インド会社船グローブ号の司令官ジョン・セーリスは英国王ジェームズ1世の徳川家康宛書簡を携えて、1613年6月11日平戸に入港した。静山は天明8年から翌寛政元年にかけて、朽木昌綱の翻訳『蘭書和解』によって、プレヴォー『旅行記集成』オランダ語版所収のセーリス平戸入津記事のあらましを知ることが出来た。また、天明8年正月に昌綱から、松浦鎮信法印のジェームズ国王あて慶長8年10月6日付け書状の写しを贈られている。しかし、これより早く、静山は英国王ジェームズ1世の銅版手彩色肖像画（図11、額装、本紙縦30.7cm×横18.6cm）を入手し、本木良永にそのラテン語の題字を解題させた。その解題にあたって良永は商館長ティチングの教示を得ているので、静山の肖像画入手はティチングが最終的に離日する1784年11月29日（天明4年10月17日）以前にさかのぼる。

銅版肖像画を納めた杉箱の蓋（横40cm×縦27.8cm）には本木良永が肖像画のラテン語題字とその蘭訳「IACOBVS DEI GRATIA MAGNAE BRITANNI [AE] FRAN / CIAE ET H [IBER]NIAE RE [X], FIDEI DEFENSOR etc. / Jacobus Door gods genade koning van Engeland, vrankrijk en [ie] rl [an] d, beschermen

⁸ Michiel van Groesen, *The Representations of the Overseas World in the De Bry Collection of Voyages (1590-1634)*. Brill, 2012. pp. 424-425. 参照。



図 11 ジェームズ1世肖像画
松浦家蔵



図 12 ジェームズ1世肖像画
額裏

[sic] van't Geloof.」(神の恩寵を受けたイングランド、フランス、アイルランドの王、信仰の庇護者ヤコブス)をペン書きで転写した洋紙が貼られている。肖像画の額裏(図12)には本木良永が題字の釈文を洋紙に墨書して貼り付けている。その翻刻は以下の通り。

フランス語讀音

ヤコブス デイ ガラーシヤア マグナー ブリタンニイ フラン△
IACOBVS DEI GRATIA MAGNÆ BRITANNIÆ FRAN
△シイ エツト ヒベルニイ レキス ヒディ デヘンソル エテー
CLE ET HIBERNIÆ REX, FIDEI DEFENSOR etc.

阿蘭陀語讀音

ヤコブス ドラル ゴツツ ゲナアデ コラニスキ ハン エングラント フランカレイキ
Jacobus Door gods genade Koning van Engeland, vrankrijk
エン イールラント ベシケルメン ハン エツテ ゲロラフ
en Ierland, beschermen van 't Geloof.
イギリス フランス 井、ラント
諸厄利亚。拂狼寮座。喜百利泥亞
アングリア フランシア ヒベリニア
三州ヲ守ルヤユビユスト云國主之像

(額裏釈文の翻刻)

釈文はティチングから教示を受けたラテン語題字の読み方（フランス語読音）とオランダ語訳とその読み方（阿蘭陀語読音）を片仮名で示し、最後に訳文を掲げている。翻訳の際、原文の一部「FIDEI DEFENSOR」（蘭訳 *beschermer van 't Geloof*、「信仰の庇護者」の意）は意図的に訳出しなかったようだ。

7. バタヴィア景観図

銅版2枚続の本図（図13、縦465cm×横980cm）を納める木箱の蓋の側面（図14）には、「[[爪] 哇嶋中咬啣吧國之所属婆娑峒臂耶城市圖」との題名を墨書した貼紙がある。静山自信が編纂した「平戸藩楽歳堂蔵書目録」（京都大学付属図書館所蔵、大正写本）では、本図の原タイトル「Aldus vertoont Hem 't Casteel Ende Stadt Batavia Geleegen op't Eylant Iava Major in't Coninckryck van Iacatra.」の一語一語に阿蘭陀通詞（未詳）が訳語を付け、「ヤカタラ國府城ノ地ヤハマヨル島ニ属ル城及市陌ノ風景ヲ画ル圖」との題名を与えている。

本図の左下角に「Iohannis de Ram Excudit.」（ヨハネス・デ・ラム刊）、右下角に「I. vinckeboons Fn [sic].」（I. フィンケボーンズ刻）、中央下部に「Iulius Müllh: f.」（ユリウス・ミュルファーセル画）の署名が刻まれており、制作年代1619～1680年とされるアムステルダム国立博物館所蔵「バタビア景観図」



図13 バタヴィア景観図 銅版図版2枚続 国立科学博物館蔵



図14 バタヴィア景観図の箱蓋 国立科学博物館蔵

Gezicht op Batavia. Rijksmuseum Amsterdam, RP-P-1975-226) と一致する。

天明期船載のファレンティン『新旧東インド誌』第4巻(F. Valentijn, *Oud en Nieuw Oost-Indiën*. IVde deel. Dordrecht, Amsterdam, 1726.) 233 ページには、「バタビアの眺望」(Batavia in 't verschiet.) と題して本図と同巧の折り込み銅版図版(無署名)がみられる。朽木昌綱はティチング宛天明5年4月20日付の蘭文書簡で、この地図・図版の豊富な東インド全誌を注文しているが入手できたか分からない。天明期に最も早く入手したのは阿蘭陀通詞吉雄幸左衛門であろう。その所蔵本が伝わる。静山はこのヨハネス・デ・ラム刊の本図によって、1619年建設のバタヴィア城の景観を知り、平戸商館時代に思いを馳せたであろう。

8. 異国旗標

静山は天明6年(1786)夏、長崎でこの西洋船旗図集を入手し、卷子仕立てにした。紙本著色、紙高25.5cm、長さ445cmの1巻に、船旗図計202図を収録し、各図の右には国名などの解説文が墨書されている(図15)。

巻頭の自筆の識語によれば、静山は由来不明の「旗標図」を楽歳堂文庫に所蔵していたが、新たなこの「旗標図」と比較すると既収のものは誤りが多く、新収のものがはるかに優れていた。しかし、図が11図不足していたので、これを新収のものに追補したという。実際、この巻子の末尾をみると、冒頭から191図は一連の彩色図であるが、「以下十一図旧蔵ノ本ノ図」と墨書したあと、紙を付け足し、少し異なる色合いで11図が追加されている。静山はこれより先の年に、長崎の阿蘭陀通詞吉雄幸作(幸左衛門)のところで欧人の手になる「諸国旗標ノ図」を見せてもらったが、新収品は幸作のものと同内容かどうか不明であるという。

静山は本報告の始めに指摘したように、入手した貴重蘭書に「西藩之鎮」という蔵書印を押し、藩主として国防の任にあることを自戒していた。この識語におい



図15 異国旗標(部分) 国立科学博物館蔵

ても、「凡藩屏ノ任或犯寇ノ賊アラニ須先此旗標ヲ認得テ外洋何レノ国ト云コトヲ知ルベシ」と自戒の言葉を加えている。静山はオランダ語を読むことはできなかったが、収集した蘭書の図版や挿絵にはよく目を通していたようで、とりわけ十字架の図には強い関心を寄せていた。この「異国旗標」についても、「十字架者ハ皆其国人天主教ヲ奉ル者也」と吉雄幸左衛門の説明を記している。静山の識語全文を以下に翻刻しよう（句読点は引用者）。

一 旗標図旧ヨリ予庫ニ蔵ル者一卷、其得シ
所ハ詳ナラス。今年夏、崎ニユキテ又一
巻ヲ得リ。携婦テ蔵ル所ト比ルニ其図最
勝リ、旧蔵ル所ノ本ハ拙工ノ画ク所ニ
シテ誤謬甚多。然トモ崎ニ得ル所ト校
ルニ、無キ者十一ヲ得リ。因テ其有ル所ノ
者ヲ卷尾ニ補入ル。其図誤謬有ンモ、外
域徴ルニ由ナシ。故ニ一二旧ノ図ニ依
一 凡此旗標、外域絶遠知ル可ラス。故ニ或
ハ吾邦ノ人、虎豹犀象ヲ画ノ類トセン者
有ン。然トモ予先ノ年、崎ニ往テ訳人吉
雄幸作ノ蔵ル所ノ諸国旗標ノ図ヲ視タリ。
即蛮人ノ画ク所。コレニ依レハ今得ル所
ノ図、吉雄力蔵ル所ト同物ナルヲ知サレ
トモ、全是蛮人ノ手ニ出ル所ニシテ贋写
ノ伝シ也。凡藩屏ノ任、或犯寇ノ賊アラ
ンニ須先此旗標ヲ認得テ外洋何レノ国ト
云コトヲ知ルベシ。コレ信ニスル所也。
一 幸作曰シハ、凡此旗ノ章ニ十字アル者ハ
皆其国人天主教ヲ奉ル者也。
天明六年丙午冬十一月源清書（印）（印）

幕末に多くの西洋船旗図集が写本や刊本で流布したが、この「異国旗標」は最も古いものと思われる。典拠となった蘭書は、アラルト『新撰オランダ造船術』（Carel Allard, *Nieuwe Hollandse scheeps-bouw*. Amsterdam, C. Allard, 1695-1705. 8vo. 2 vols.）である。おそらく長崎の絵師が原書の銅版手彩色図版を模写し、阿蘭陀通詞が本文の解説を翻訳して書き入れたものであろう。

おわりに—在外史料の活用—

以上、考察したように、静山の修史観は儒教的な先祖崇拜に基づくもので、修史の目的は資料や記録を文化遺産として子孫・後世に残すことであった。静山が天明期に家史編纂を始めるにあたって、商館長イサーク・ティチングと阿蘭陀通詞吉雄幸左衛門および本木良永は平戸商館時代関係資料収集に大きな役割を果たした。

一方、ティチングは1779年から1784の間に3度にわたって、都合4年近く

日本に滞在し、多数の日本資料をヨーロッパに持ち帰ったが、1812年パリで客死するや、その日本コレクションはヨーロッパ各地に散逸した。ティチングの伝記研究と日本コレクションの書誌的再構成はフランク・レクインの長年の努力によって大成を見た^(注9)が、日本人研究者による、各資料の本格的な調査研究を今後さらに進める必要がある。

⁹ Frank Lequin, *Isaac Titsingh (1745-1812). Een passie voor Japan. Leven en werk van de grondlegger van de Europese japanologie*. Leiden, 2002. Id., *A la recherche du Cabinet Titsingh: its history, contents and dispersal. Catalogue raisonné of the collection of the founder of European Japanology*. Alphen aan den Rijn. 2003.

The VOC archives as a valuable source for the history of early modern Japan

Frederik CRYNS (Nichibunken)
Cynthia VIALLE (Leiden University)

Introduction¹

Relations between Japan and the Netherlands officially began in 1609 when the Dutch East India Company (VOC) received permission to establish a trading factory on Hirado. In 1641 the factory and its personnel were moved to Deshima in the harbour of Nagasaki, where the Dutch remained until 1859. As part of a large trading organization, the Dutch factories both on Hirado and on Deshima were obliged to maintain a regular correspondence with the other settlements in Asia and report to their superiors in Java and the Netherlands. Apart from documenting trade and matters relevant to it, the factories were required to keep track of events and happenings elsewhere in Japan, noting them in *dagregisters* (daily registers, diaries). Consequently, the Japan factory *dagregisters* contain valuable information about Japanese history, society and culture.

The archives of the Hirado and Deshima factories are collectively known as *het archief van de Nederlandse factorij in Japan* (the archive of the Dutch factory in Japan). They are preserved in the Nationaal Archief (the National Archives of the Netherlands) in The Hague. They are kept as a separate archive, although they are part of the larger archive of the VOC, also housed in the Nationaal Archief. The

¹ This article is based on presentations given at the VOC symposium 'Rethinking the Dutch East India Company (VOC): Old genres, new trends in research and analysis' (The Hague, 23 November 2017), and the international symposium 'The International Port City of Hirado and its Interest in Foreign Cultures-Foreign Sources Changing Japanese Historical Research' (Hirado, 9 February 2019).

VOC archive also contains many documents relating to Japan.

The archives of the Japan factory and the VOC are the most important sources for reconstructing the history of the intercourse between Japan and European countries from 1609 until 1853, when Japan was opened to other Western nations. Japanese, Chinese, English, Portuguese and Spanish sources also exist, but VOC sources excel quantitatively.

This article will address differences between Dutch and Japanese sources and also give an overview of how the Dutch sources are used in Japan and the challenges we face in promoting the use of the VOC sources among Japanese historians. Finally, it will discuss the contents and the goal of the Hirado Project to make this part of the VOC archives accessible to the scholarly community.

Differences between Dutch and Japanese record keeping

The VOC was a large trading company and therefore it was of the utmost importance to keep good records of all its business transactions and assets. Six chambers — based in the cities of Amsterdam, Middelburg, Hoorn, Enkhuizen, Rotterdam and Delft — made up the Company. At the top it was governed by a board composed of representatives of the six chambers, the *Heren Zeventien* (Gentlemen Seventeen).

The Company had factories (trading posts) all over Asia whose staff were responsible for conducting trade and maintaining relations with their hosts in each particular country, island, or region. The Governor-General and the Council of the Indies — also called the High Government — represented the VOC in Asia and were in charge of supervising and directing the Company's operations in Asia.

Basically, the Company's archives were well organized. Original documents or copies were sent to the Company's administration in the Netherlands and to the High Government in Java. Each factory kept its own administration as did the Japan factory. Regrettably, large sections of the Company archives have been lost or were wilfully destroyed in past centuries, but we are fortunate that the documents of the Dutch factory in Japan have been well preserved.

What about the situation in Japan? In Japan, the Dutch had to deal with several political entities. At the top stood the Shogun, who, together with his military government, the Bakufu, was the ultimate decision maker in foreign policy. During the Hirado period, the lords of Hirado acted as mediators between the Dutch and the Bakufu. The Nagasaki *bugyō* (governors of Nagasaki) were the officials in charge of foreign relations, and therefore the Dutch also had to deal with them, especially after the factory moved to Nagasaki. During their annual visits to the shogunal court in Edo, the Dutch also had the opportunity to speak to Bakufu officials directly.

There were therefore various entities involved in the relations with the Dutch, and the persons involved in these entities changed regularly. Moreover, there could be one to four Nagasaki *bugyō* serving simultaneously, depending on the period.

There was no centralized archive for the office of the Nagasaki *bugyō*, each individual governor kept his own personal records and these were not shared with the other governors. Only a few records remain from the accounting office.

In Japan an administrative system based on record keeping was only fully developed by the middle of the 18th century, under the rule of the eighth shogun, Yoshimune. In the 17th century the administrative system was still very decentralized. Every official kept his own records and stored them in his own residence. There was no central repository in which all the documents of the Bakufu officials were placed together.

This is one of the reasons we have no equivalent to the VOC archives in Japan, specifically dedicated to international relations. Another cause of the loss of many documents in Japan was fires. The great fire of Meireki of 1657 destroyed the castle of the Shogun in Edo, with all the records which were stored there. In the great fire of 1663, Nagasaki was almost completely destroyed, including the residence of the Nagasaki *bugyō*.

In contrast, during the great fire which consumed the major part of Deshima in 1798, all the Company's records were saved because they were stored in a fire-

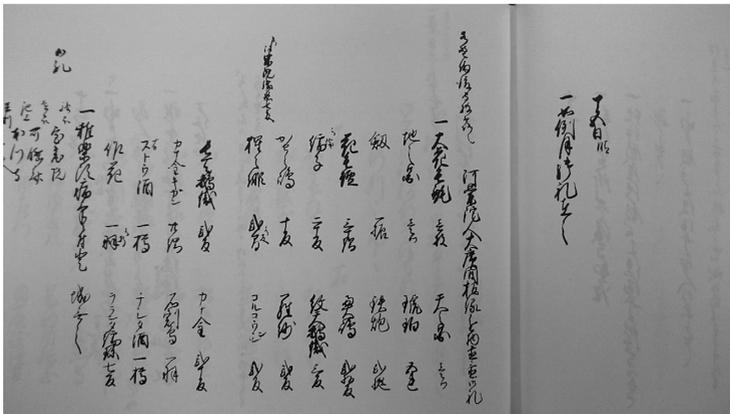
proof warehouse.

Almost no records pertaining to the Hirado fief have been handed down, probably because all documents touching on foreign relations were destroyed in order to hide all evidence of links with Christianity, which might have led to persecution at the beginning of the 17th century.

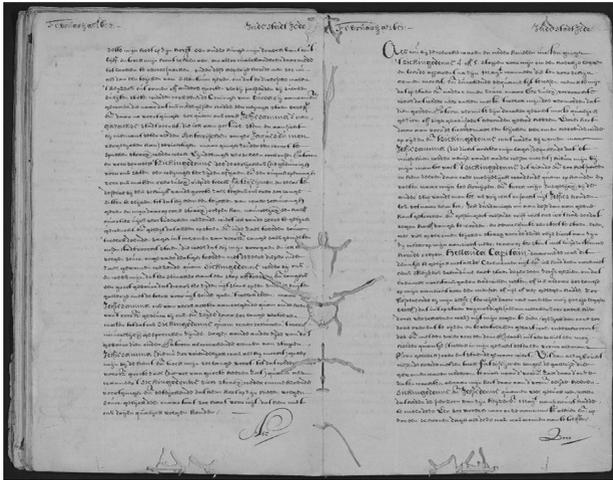
Case studies

Besides the difference in numbers between the Dutch and Japanese sources on the subject of Dutch-Japanese relations, we would like to draw your attention to the difference in style. In the Edo period, Japanese documents developed certain formal patterns in which facts were recorded in a very efficient, compact and factual manner. Conversely, the VOC servants wrote down their observations as they experienced them. We would like to elucidate the differences with a few examples, the first from a Deshima diary and the others from the Hirado correspondence.

The first example concerns the annual audience with the Shogun in Edo Castle. In the Japanese sources, the audience is recorded in a very fixed style. The audience of Zacharias Wagenaer on 27 February 1657 is described as follows in the official Edo Bakufu's Diary (*Edo bakufu nikki*):



阿蘭陀人大広間板縁進物重々御礼



“The Dutch presented the gifts and solemnly paid homage in the wooden gallery of the large hall.” Next follows a list of gifts presented by the Dutch.

Therefore, we have one compact sentence and a list of gifts, and this can be considered a very long sentence. Usually, if a record of the occasion does exist, it is even shorter, just stating “the Shogun has seen the Dutch”.

In contrast, in the VOC sources we find much longer descriptions of this important occasion.

In Zacharias Wagenaer’s diary, there is a description of the same audience. The length of the description is roughly one page (on the right of the illustration), in which Wagenaer describes every single detail of the event.

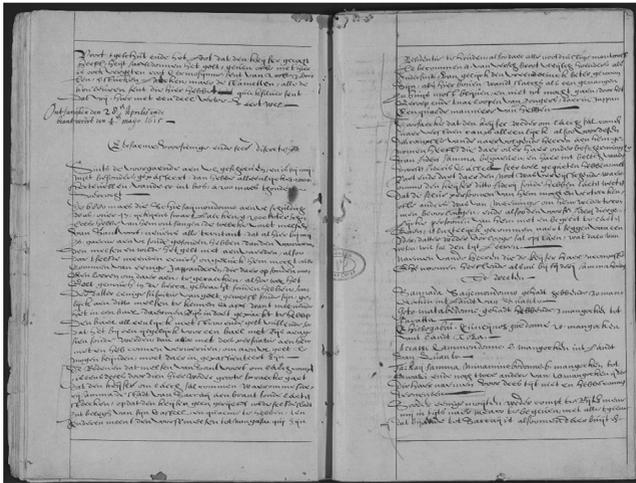
“When we reached him, we had to kneel down and Chikugo-no-kami lay down four or five paces ahead of me around a corner and apparently kept peering to see when His Majesty would appear. He thought the time had come and beckoned me to stand up and approach, but before I could do so, he signalled that I should drop down again. This made me suspect that our good patron had made a mistake be-

cause of his failing eyesight. However, shortly after, I received a second signal and I wanted to rise and go closer to Chikugo-no-kami, but Yohyōe — who was lying close behind me — thought that he might have made another mistake and held on to my coat. Chikugo-no-kami noticed this and seemed to get upset about it. He came creeping towards me on hands and knees and pulled me towards him rather forcefully out of Yohyōe's grip by the other slip of my coat. Thus, I was being tugged on both sides and I was at my wits' end. Dumbfounded, fear started to take hold of me. But then, at the third signal, I fell down on my face and I heard someone call out in a loud voice 'Oranda Kapitan'. This was the end of this song and the end of the ceremony and I had not even seen the shadow of the Shogun, let alone the person himself. Because I wanted to know whether I had lain down on my face for such a long time for a human being or an owl or a monkey, I decided while I had to lie there for a while longer, that when rising, I would look around freely for the reason that I had appeared here. And indeed, when I was ordered to rise and leave, I did so unabashedly and I discerned a fine fellow, who looked more like a woman than a man to me, standing at some distance in a dark spot. This having been done, Hachizaemon and I returned along the same gallery to the hall where our people were waiting. Shortly after, Chikugo-no-kami and Yohyōe came to congratulate me on having beheld the person of His Imperial Majesty, especially because this honour had been bestowed so soon after our arrival here and on such a fine day as today."²

Although some descriptions of the annual audience are more brief, other descriptions take up several pages, giving the reader a vivid overview of everything which happened and was said during the audience. Such extensive descriptions are not to be found in the scarce Japanese sources.

Our second example concerns the Siege of Osaka in 1614-1615. The Siege of Osaka was a very important battle in which the Tokugawa were able to destroy the

² Cynthia Viallé and Leonard Blussé (eds), *The Deshima Dagregisters*, Vol. XII, 1650-1660, Intercontinenta No. 25 (Leiden: Instituut voor de geschiedenis van de Europese expansie, 2005). The reference to "His Imperial Majesty" is to Tokugawa Ietsuna. The Dutch always referred to the Shogun as *keizer*, emperor.



Toyotomi clan and seize the reins of government of the country for the next 250 years. Unlike the scarce documentation available for the foreign relations of the time, for the Siege of Osaka we have at our disposal a myriad of Japanese primary sources in the form of letters, diaries, chronicles and pictorial images. At the time of the siege, a few VOC servants happened to be present in the region, and they wrote down what was going on around them in their letters to the head of the Hirado factory, Jacques Speex.

We have identified more than ten letters which give us information about the situation in Osaka and other cities in the region. The letters poignantly portray the citizens evacuating Osaka, and returning after the winter campaign, only to find that the city was in ruins and those houses which were left, occupied by soldiers who had fought for the Toyotomi clan. Other letters describe the situation in Kyoto, where the people were relieved to see the Tokugawa army take up its positions in and around Kyoto, removing their fears of arson attacks by the Toyotomi army. One of these letters is illustrated above.

Another account is given by Melchior van Santvoort, one of the survivors of the ship the *Liefde* which stranded in Japan in 1600. When the factory was established

on Hirado, he sometimes engaged in trade on behalf of the Dutch. He happened to be in Sakai during the winter campaign of the siege of Osaka. The opening lines of his letter, dated 29 November 1614, read:

“You should know that here in Sakai we are in great turmoil. The reason being that the emperor [Ieyasu] in all his might has encamped his army in Fushimi and its environs, in order to besiege Osaka by force. Those from Osaka are in good spirits, they are expecting the arrival of the emperor. Most of the citizens of Osaka and Sakai have fled hither and thither with their belongings.”³

Elbert Woutersen, a VOC merchant stationed in the Kansai, reported to Jacques Specx about the ruinous condition of Osaka after the winter campaign in a letter of January 29, 1615. Woutersen arrived in Sakai on the 25th and went to Osaka the next day. He was shocked by what he saw: “By order of Hideyori, more than 15,000 houses were burnt, resulting in a wide square, larger than the range of a cannon shot.”⁴

Such eyewitness accounts of the siege of Osaka can be found in letters written by Dutch traders such as Melchior van Santvoort, Elbert Woutersen and Matthijs ten Broecke. Their letters were sent from Sakai, Osaka, Kyoto and Murotsu (present-day Tatsuno City) before and after the battles and transmit what the Dutch saw and heard in those places. In their letters, the fear and panic of the citizens in those turbulent times are clearly recorded. Contrary to most Japanese documents, the majority of which give us the viewpoint of the Tokugawa Bakufu, these letters provide us with rare glimpses of what ordinary citizens went through.

In short, the VOC sources tell us of the movements and experiences of the ordinary townspeople, whereas the contents of the Japanese sources focus more on the actual fighting and the political context. Consequently, by matching the Japanese sources with the VOC sources, it becomes possible to give a multifaceted reconstruction of the situation.

³ Nationaal Archief, The Hague, Nederlandse factorij in Japan, Inv. No 276.

⁴ Nationaal Archief, The Hague, Nederlandse factorij in Japan, Inv. No 276.

Use of the VOC archives by Japanese historians

The examples that we have provided clearly demonstrate that the VOC archives have much to offer Japanese historians. This has been recognized for a long time and efforts have been made to publish Japanese translations of parts of the plentiful documents available.

The most important translation projects and their publications are the following:

永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記 (Nagazumi Yōko (transl.), *Hirado Oranda shōkan no nikki*) [Diaries of the Dutch factory in Hirado], 4 vols (Tokyo: Iwanami Shoten, 1969-1970).

東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料 オランダ商館長日記 (Tōkyō daigaku shiryō hensanjo ed. and transl.), *Nihon Kankei Kaigai Shiryō: Oranda Shōkanchō Nikki*] [Historical documents in foreign languages relating to Japan: Diaries kept by the heads of the Dutch factory in Japan], 1633-1653 (Tokyo: Tokyo University Publishers, 1974-2019).

村上直次郎訳『長崎オランダ商館ノ日記 (Murakami Naojirō (transl.), *Nagasaki Oranda Shōkan no nikki*) [Diaries of the Dutch factory in Nagasaki], 1641-1654, 3 vols (Tokyo: Iwanami Shoten, 1956-1958).

日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』(Nichiran gakkai ed. and transl.), *Nagasaki Oranda Shōkan nikki* [Diaries kept at the Dutch factory in Nagasaki during the early 19th century], 1800-1823 (Tokyo: Yūshodō, 1989-1999).

平戸市史編さん委員会編『平戸オランダ商館の会計帳簿』(Hiradoshishi-hensan-iinkai (ed.), Yukutake Kazuhiro and Kato Eiichi (transl.) *Hirado oranda shōkan no kaikei chōbo* [the ledgers of the Dutch factory], 1635-1641 (Hirado, 1998-2004).

These translations are used by Japanese historians to great effect in their quest to reconstruct Japanese history. In spite of the appreciable efforts made by the scholars who are part of these projects, it is evident that it will take many more years to provide Japanese historians with adequate translations of even the most important sources, especially if we stop to consider that there are few scholars who are able to translate these Dutch sources into Japanese. Regrettably, it is a little known fact among scholars of Japanese history that there is a wealth of information waiting to

be unlocked.

To overcome this problem, many years ago Prof. Leonard Blussé of Leiden University set up a project to translate extensive summaries of the Deshima diaries into English. So far, the publications of this project cover the whole of the eighteenth century and the period 1641 to 1670.⁵

Unfortunately, the existence of these excellent English translations is not well known among Japanese historians. In fact, Japanese historians have a tendency to use only Japanese language sources. Therefore, apart from the need to inform Japanese scholars of the existence of these English translations, the best way to acquaint them with these valuable sources is to continue the efforts to translate the sources into Japanese. One of these efforts is the Hirado Project.

The Hirado Project

Hirado was the first Dutch factory in Japan and the records kept by its staff from 1609 to 1633 form the basis of the Hirado Project, a collaboration between the History Department of Leiden University, Nichibunken (Kyoto) and the Nationaal Archief (The Hague).

Its goal is to make the sources related to the early years of the Dutch factory in Japan available and accessible to the public.

It concerns the correspondence that was carried on between the Hirado factory and its agents in Japan, with the VOC headquarters in Java (Bantam and Batavia), with the *Heren Zeventien* (the board of governors of the VOC) in Amsterdam, and with other VOC posts in East and Southeast Asia from 1609 to 1633.

Why this period?

Transcriptions and Japanese translations of the diaries have been published from 1633 onwards as mentioned above. No diaries were kept before 1633. We do, how-

⁵ Published by the Institute for the History of European Expansion, Leiden University, in the Deshima Dagregisters Series.

ever, have a large amount of correspondence and other documents such as resolutions and bookkeeping ledgers for the years 1609 to 1633. Very little use has been made of these materials.

For Japan, these records contain a wealth of information for research into the history of its international relations at the beginning of the seventeenth century. The period before 1633 can be considered crucial to the development of the Shogun's changing international policy as well as to the establishment of the Dutch presence in Japan. The years cover the rule of the first three Tokugawa Shogun — Ieyasu, Hidetada, and Iemitsu — and are important for gaining deeper insight into the formation and structural strengthening of the military government in Edo, the formation of foreign policy and the development of society and economy during Tokugawa rule.

This is also an important period for the political and cultural development of the Japanese and East Asian early modern society as a whole. Even though the Hirado factory stands at the centre, the contents of the records on which we are working do not deal solely with Japan. The letters were written during the formative years of the VOC in Asia. Therefore, we can also find a rich source of information about VOC exploits in East and Southeast Asia — without Chinese silk no trade was possible in Japan, where silver was the commodity on which the Company had set its sights. Our sources tell us about the Company's attempts to gain a foothold in China, the occupation of the Pescadores (Penghu Islands) and ultimately the colonization of Formosa or Taiwan. The factory in Siam, Ayutthaya, was maintained to provide commodities such as sappanwood and deerskins for Japan. Our letters also describe how the Dutch dealt with their arch-enemies — the Portuguese and Spanish — in Japan, the Moluccas and the Philippines; and how the administrations in Java and the Netherlands set out their policies for the whole area and the responses of the men who were supposed to carry them out.

The Hirado Project is essentially a source publication project which involves three partners, two in the Netherlands and one in Japan.

The basis is, of course, the VOC records that have now been digitized; namely those of the *Nederlandse factorij in Japan* and related ones in the series 'Overge-

komen brieven en papieren [Letters and papers sent to the Netherlands].

Making transcriptions of the documents is the responsibility of the Leiden project headed by Prof. Jos Gommans and is carried out by Cynthia Viallé.

Frederik Cryns is responsible for the Nichibunken side. He and Keiko Cryns are translating all the records that have been transcribed into Japanese.

Each institution will publish the materials one way or other:

The Nationaal Archief will attach the transcriptions to the scans on its website.

For Leiden, the transcriptions will be published by Leiden University Press in the series *Colonial and Global History through Dutch Sources*. Depending on the formatting of course, a rough estimate yields a total number of at least 1,600 pages for the transcriptions alone. Together with annotations, English summaries, glossaries, indexes and an introduction, they will be made up into several volumes. This will be done in a paper version and in open access. By providing English summaries, the texts should become more accessible to international scholars, not only people who read Dutch or Japanese.

Frederik Cryns's translations with the required scholarly apparatus will be published in book form in Japan.

It is clear that a great deal of work lies ahead of us. By editing these sources — not only transcribing them but also translating and annotating them —, we expect that the project will provide historians of Japanese history everywhere with much valuable information about the situation in Japan seen from the standpoint of outsiders, and about the place of Japan in the international world, about its foreign policy, society and the economy.

The project has already received a lot of attention in the Japanese press. A few dozen articles have appeared in newspapers highlighting references to events in early-seventeenth century Japan found in contemporary Dutch sources, creating interest among the general public.

We hope that, when our work is done and the results become available, interest in this fascinating period will spread far beyond Japan.

平戸に伝存する日蘭関係史料について

—史料紹介—

前田秀人

(平戸市文化観光商工部文化交流課)

はじめに

国際日本文化研究センター、フレデリック・クレインズ准教授によって進められている「平戸オランダ商館文書プロジェクト」の一環として、平成31年2月9日、国際シンポジウム「国際海洋都市平戸と異文化へのあこがれ」が、復元された「平戸オランダ商館 1639年築造倉庫」において開催された。

当日は筆者も地元として「平戸オランダ商館会計帳簿について」と題した報告を行った。内容は平戸市が刊行した「平戸市史海外史料編 平戸オランダ商館会計帳簿仕訳帳」の紹介を中心としたものであったが、同プロジェクトの趣旨に鑑み、平戸市に残されている近世初期の日蘭関係史料の一部紹介を織り交ぜた。

小論はシンポジウムにおける概要報告であるが、「会計帳簿仕訳帳」については「平戸市史 海外史料編」において内容を詳述していることもあり、ここでは後半の日蘭関係史料の紹介に焦点を絞っての報告とし、会計帳簿については、最後に要旨を提示することとした。

【おらんだ共御理申上候条々】について（以下、嘆願書）

この史料は、平戸市の（公財）松浦史料博物館に伝存する史料である^(註1)。内容は寛永十年令（いわゆる第一次鎖国令）の条項に対し、平戸オランダ商館に係る条項の撤回を求めたものである。原典は失われているが、町人津上又平次¹の所有であったことが奥書に記されている。

¹ 「敬孝述事」所収 公益財団法人松浦史料博物館所蔵

おらんだ共御理申上候条々

- 一、自今以後、平戸高佐古ニ召置候おらんだ人、随分撰、前角之こへるなとう様成者召置申間敷と、内々堅各相談仕候事、
- 一、こへるなとう儀、あわれ今度被指免帰国被仰付被下様ニ、偏ニ奉願候、本国江指届候共、奉対日本重科之者ニ候間、緩、不仕召籠置可申と、せねらるおらんだ人中も申上候、彼者故数年皆共迷惑仕罷在候事ニ御座候間、少も偽御座有間敷候事、
- 一、高佐古へ日本舟数渡り候へハ、唐人との商売も仕兼候、其上日本よりも程隔候、我々国よりも程も遠御座候、自然無調法之儀も重而仕出し候へハ、又々迷惑仕事ニ候間、高佐古江の日本舟之儀、御分別を以被仰付被下候者、別而可忝候、誠今迄日本舟も渡海仕候所之事ニ候条、高佐古之儀、おらんだ斗にて我儘ニ仕度との御理リニ似、申迷惑ニ候へ共、我々無難様ニと存、御理り申上候事、
- 一、長崎かれうた糸之祢段、不相澄以前者、おらんだ商売之儀仕間敷之旨、被仰付候、何とも迷惑仕候、糸之儀者、尤可奉伺御法式候、其外荷物之儀者、前々のことく相对次第ニ、糸売買無之以前ニ申候様ニ、各様御分別を以被仰付被下様ニ奉願候、左様ニ無御座候へハ、天川ニ違、我々国者程遠候、仕廻難成候条、申上事候、其上手前ニ舟仕廻りても、かれうた出船廿日後ニ出船仕様ニと、被仰付候、迷惑仕候、帰国之儀、時分違候へハ、海上難儀ニ候条、仕廻次第ニ出舟之前後、我々次第ニ被仰付、是非共奉願候事、
- 一、誠ニ御懇忝仕合、此上無御座候所ニ、か様之御理申上候儀、近来迷惑仕候、異国者之儀候間、万事被加御慈悲儀、奉願罷有事候、此段御年寄衆へ被仰上可被下候、

以上

平戸かひたん

にこらすこけはかり（ニコラス・クーケバッケル）

ふらんすかるん（フランソア・カロン）

進上 松浦肥前守様

右之段、唯今肥前守様江戸へ御座候故、御存知なく候間、長崎御奉行衆へ可申上旨、被仰付候条、乍慮外如此候、

今村伝四郎 様

曾我又左衛門 様

第1条と第2条は、いわゆるタイオワン事件の責任者として日本に抑留されていた元タイオワン長官ヌイツの釈放を求めるものであり、第3条は台湾への日本船（朱印船）の渡航に配慮を求めたものである。

この史料の中で特に交易活動に関する嘆願は第4条である。内容は糸割符仕法に伴う商品売買規制の緩和、オランダ船の日本出帆の期日に対する規制の緩和などを求めたもので、寛永十年令の以下の条項の撤回を求めたものである。

【寛永十年令】

(前略)

(第12条)

一、異国船ニつみ来候白糸、直段を立候而、不残五ヶ所へ割符可仕之事、

(第13条)

一、糸之外、諸色之儀、糸之直段極候而之上、相对次第商売可仕之事、
附、荷物之代銀、直段立候而之上、可為廿日切之事、

(第14条)

一、異国船もどり候事、九月廿日切たるべき事、
但、遅来候船ハ、着候而五十日きりたるべき事、

(後略)

このように寛永十年令の第12条から第14条の条項と対比できるものとなっている。寛永十年令の伝達過程については、山本博文氏の論考にもあるが^(註2)、嘆願書の最終的な宛先が長崎奉行である今村伝四郎・曾我又左衛門となっていることから、おそらく長崎奉行より関係条項が平戸藩を經由してオランダ商館に伝達されたと思われる、嘆願書の内容につながっていると想定される。

さて、本史料を提示したのは、同様の内容が「平戸オランダ商館長日記 1633年 11月 11日条」に記録されているからである。先にも述べたように本史料は写本であり、本来であれば二次史料に属するものであるが、一次史料である商館長日記との比較により、史料の信頼性が一次史料に準ずるものとなる。

商館長日記の内容はあえて記述しないが、寛永十年令の伝達経路や、あるいは同令に対するオランダ商館の対応、また、商館の所在地である平戸藩の反応と対

² 山本博文「鎖国令は大名に伝達されたか」『九州史学第107号』1993

処などを検討することが出来る。事実、この嘆願書の取り扱いについては、商館長日記にその過程が記述されている。

このように平戸に残された本史料単独では追うことの出来なかった経過を、オランダに残る史料から確認できるというひとつの事例であり、近世初期のオランダ商館を巡る対外関係の研究において、日蘭双方の史料の比較が重要な役割を担えると言うことができる。

【元和七年 覚】について

次の史料も同じく（公財）松浦史料博物館に伝存する史料である^(註3)。年代的には先の史料より古く、元和七年（1621）発給の史料であり、交易統制に関する内容が記されている。長い目で見れば、いわゆる鎖国令のひとつと捉えることが出来る。

覚

- 一、異国へ男女買取参候儀、堅停止之事、
付売主改可申事
 - 一、異国へ刀脇差惣而武具之類、一切遣間敷事、
 - 一、おらんた、いきりす、日本ちかき海上にをいて、ばはん仕間敷事、
 - 一、於長崎、唐船黒船商売之儀、従此前、相国様被仰付候通、不相替可申付事
 - 一、長崎商人之船、おらんた、いきりす海上にをいて、ばはんいたし候二付而、相尋候へハ、はてれ忒人のせ来候付而、取□セ申しはてれにて候、委敷穿鑿可致申上事
- 五月廿二日

以上のように、売買による日本人の海外渡航の禁止（第1条）、武具の持出し禁止（第2条）、日本近海での海賊行為（ばはん）の禁止（第3条）を中心とする貿易統制に関する史料である。また、第5条はキリスト教宣教師の捕縛に関する内容であり、いわゆる平山常陳事件に端を発するものである。

この時期、オランダはイギリスと連合艦隊を結成し東・東南アジアでのポルトガル船に対する私掠船戦術を押し進めており、平戸は連合艦隊の根拠地でもあつ

³ 「元和七年覚」註1に同じ

た。また、オランダ東インド会社に傭兵として雇われた日本人が東南アジアで活動していた時期であり、幕府にとっては海外の紛争に巻き込まれることが懸念される状況でもあったことが、この禁令の背景にあったものと考えられる。

さて、この通達はこの時期のオランダ商館にとっては非常に重要な禁止事項であり、当然、ヴァタビアの東インド総督へ報告されたものと考えられる。

この点について松井洋子氏の論考によれば^(註4)、商館長であったジャックス・スペックスが、自らの立場を弁明するために解説を交えて報告されており、その内容は、日本人の売買、武具持出しの禁止については再許可を求める、海賊行為の禁止については日本近海の範囲の明確を求め、そこでの海賊行為はオランダ商館の立場を危うくするものである、とのことである。

なお、本史料は松浦隆信より直接、英蘭両商館長に伝達された事、スペックスの弁明書が存在することについては、シンポジウムにおいてクレイスン先生よりご教示いただいている。筆者の勉強不足により、スペックの史料を確認したことはないが、「平戸オランダ商館文書プロジェクト」においてこの史料の和訳が提示され、双方の史料を比較することが出来ればと期待している。

「平戸オランダ商館会計帳簿仕訳帳」について^(註5)

平戸オランダ商館における日蘭貿易は、1609年の商館開設以降、幕府の命令によって商館を長崎（出島）に移転する1641（寛永18）年6月まで、途中の貿易中断（1628年～1632年の期間、タイOWN事件による商館封鎖）を挟んで33年間継続する。この期間平戸オランダ商館では、「東インド政庁」からの指示に従って会計帳簿が作成されていた。この帳簿類は、同商館における日々の取引を詳細に記録したもので、現在ハーグ市のオランダ国立中央文書館に伝存している。

会計帳簿は、『仕訳帳』と『総勘定元帳』の二帳簿を主要簿とし、その他各種の補助簿が作成されている。主要簿の『仕訳帳』は、各会計期間における日々の取引を、その発生順に仕訳の法則に従い、設定された勘定科目をもって仕訳記入した帳簿、『総勘定元帳』は上記の『仕訳帳』からの転記によって、それぞれの

4 松井洋子「一六二二年における日蘭貿易の展望—商館長カンプスの報告書をめぐって—」『東京大学史料編纂所研究紀要第13号』2003年

5 行武和博「平戸オランダ商館の会計帳簿—その記帳形態と簿記研鑽構造—」『平戸市史 海外史料編Ⅲ』より抜粋。1998年

取引を勘定科目ごとに記録集計した帳簿で、1620年以降1641年までの分が伝存する。これらの明細書類は、特定の取引をもとめて記載すると共に、その集計額が上記の主要簿へ転記される補助的帳簿である。

ところで、従来の近世日蘭貿易史研究は、日本側にまとまった計数的貿易史料が伝存しないため、その具体的な貿易実態について十分解明できず、当分野の研究にとって大きな障壁となっていた。このような研究情況に対し、会計帳簿には、平戸および長崎商館におけるオランダ船の輸出入品やその数量・価格をはじめ、彼我両国商人間の取引方法等が詳細に記帳されており、近世日蘭貿易の具体的な実態を明らかにする上で貴重な根本史料を提供しているのである。

ただし、この会計史料を使用してオランダ船貿易を解明しようとする場合、帳簿自体の記帳形式および簿記計算構造についての理解が前提となる。

おわりに

今回紹介した史料は、いわゆる鎖国形成期に係る史料である。既に多くの先学が指摘しているように、この時期は平戸オランダ商館にとっても日本での生き残りをかけ活動を模索していた時期でもあり、幕府の対外政策にも大きな影響を与えた存在でもある。

そうした中、これらの史料は日本側とオランダ側に同じ内容の記録が残されており、内容の比較とその後の展開を確認できること、また、松浦史料博物館に所蔵されている他の日蘭関係史料の信頼性が向上することにもつながるものといえ、貴重な史料群であると考ええる。

特に1609年から1632年の日蘭交流に欠かすことの出来ない時期の史料翻刻に取り組んでいる「平戸オランダ商館文書プロジェクト」にとっても、平戸に伝存する史料の調査・研究は、オランダ側に残る史料群を補完するものとしても、非常に有益な史料であると考ええる。「平戸オランダ商館文書プロジェクト」にて報告されるであろう多くの史料を心待ちにするとともに、日蘭交流史の調査・研究の更なる進展を期待するものである。

また会計帳簿については、日蘭交易の取引の実態解明のみならず、平戸オランダ商館長日記や他の書簡類とともに日蘭交流史研究の根幹をなす史料である。こちらについても、多くの研究に活用されることを期待する。

最後に、拙い報告であるが、小論が日蘭交流史研究に、幾許かでも寄与できるものとなれば幸いである。

追記

シンポジウムでの報告や本報告書への執筆の機会を与您にいただいた、国際日本文化研究センターに対し謝意を申し上げます。

日本人による海外への移動に関する歴史記述を精緻化させる—日系関係在外資料を活用して—

朝日 祥之
(国立国語研究所)

1. はじめに

本稿では、日本人による海外への移動と現地での言語生活史の精緻化を、彼らを対象に作成された資料、ならびに、彼らが自ら作成した資料を活用しながら試みるものである。これまで、海を渡った日本人の移動の歴史、並びに現地での日系移民の言語生活史・社会史は、数多くの研究により、さまざまに記述されている。またこれらの記述により日系移民史をめぐるマスターナラティブも形成された。その形成により、これまでの研究で焦点があまりあてられてこなかったテーマの発掘、研究が行われるようになった。

その一方、近現代史を扱う研究であればどの分野にも当てはまるが、扱う資料は実に膨大である。同じことは研究者が研究活動を通じて形成する資料にも言える。このような資料をどのような基準で評価し、位置付けるのかが必要となる。また、この評価基準は、現実的には特定の研究分野の発想に制約される傾向があるが、一定の水準の汎用性が期待される。

このような状況とは一見無縁であるが、1980年代に始まる人工知能が発展を遂げ、2010年代に第三世代人工知能として登場したのが、IBM ワトソンの普及とディープラーニング（深層学習）と呼ばれる新技術である。機械学習の一種ともいえるディープラーニングは、膨大な学習データをもとにマシンが自動的に認識（特に画像データ）をすることが可能となった。近年、この技術が資料保存のために世界的に活用されるようになった。

本稿は、移民として海を渡った日本人・日系人に関係する資料を事例に、この新技術を活用する試みである。これにより可視化されるテーマを取り上げ、これまで研究における歴史認識との差異を考察する。本稿では、ハワイに生まれ、日本で育った「帰米二世」の比嘉太郎氏が収集した資料を扱う。比嘉太郎の生涯については2節で触れるが、さまざまな活動で比嘉氏により収集された資料は実に

さまざまである。彼を取り上げた研究は森本（2017）などがあるが、まだ明らかにされていない点も多い。また、データの可視化に関しては、オーストリア科学アカデミーのオーストリアデジタル人文学センターとの連携に基づく。

以下では、まず2節で比嘉太郎の生涯と彼の活動を概説する。3節で、日本人の移動史の記述を精緻化させる試みとして、比嘉氏により収集された資料を取り上げ、資料の発掘・整理の方法を述べ、4節でマシンのディープラーニングによる資料を可視化のための手順を説明する。その後、5節でそのシステムを活用した形でのアウトプットを紹介し、最後に6節で本稿のまとめと今後の課題を示す。

2. 比嘉太郎の生涯と活動

本稿が対象とする比嘉太郎資料について述べる前に、比嘉太郎の生涯と活動から述べる。最初に、比嘉太郎の生涯を表1に示す（比嘉1982に基づく）。

表1から、比嘉太郎自身・活動に見られる特徴は以下の6点にまとめられる。

表1 比嘉太郎の生涯

1916年	ハワイ州ホノルルで生まれる
1918年	両親の共稼ぎのため沖縄県中頭郡中城村（現：北中城村）に住む祖父父母に預けられる
1925年	出稼ぎのため大阪へ。岸和田紡績・泉州織物に勤める。その後ハワイへ
1937年	早稲田大学予科で学ぶ
1940年	ハワイに戻る
1941年	アメリカ陸軍に入隊
1943年	第100歩兵大隊の一員としてヨーロッパ戦線に従軍
1944年	負傷し、アメリカに戻る。全米日系人市民協会、戦時転住局、陸軍の認可のもとで在米日系人の啓発・慰労を行う
1945年	沖縄戦のため沖縄に。情報部員・通訳兵として活動。ウチナーグチで投降を呼びかけ、多くの人々の命を救った 沖縄戦災民救援の運動に関わる
1947年	在米日本人の立ち退き損害賠償と日本人への帰化権法案に関わる
1965年	記録映画『ハワイに生きる』の制作
1974年	書籍『移民は生きる』の刊行
1982年	書籍『ある二世の軌』の刊行
1983年	第27回沖縄タイムス賞受賞
1985年	ハワイ州ホノルルで死去

(1) いわゆる「帰米二世」である

比嘉はハワイで生まれるが、2歳で日本に送られ、沖縄県中頭郡中城村に住む祖父母に預けられる。中城村にある小学校（喜舎場尋常高等小学校、現北中城小学校）に通うが、9歳で大阪に出稼ぎのために渡る。一度はハワイに戻るが、早稲田大学予科で勉学に励むなど、日本での学校教育を受けた。1940年以降はアメリカで生活した。

(2) アメリカ陸軍に入隊し、「第100歩兵大隊」でヨーロッパ戦線に参加した

日系アメリカ人で構成される「第100歩兵大隊」の一員としてヨーロッパ戦線に参加した。「帰米二世」たちの間でもこのような形でアメリカに忠誠を誓い、アメリカ兵となったものは少なくない。比嘉はイタリアでの戦闘で二度負傷し、アメリカに戻る。

(3) 「帰米二世」のモデルとしての収容所巡講を行う

在米日系兵士の啓発と慰問のために、全米日系人協会（JAACL）の主催、戦時転住局が後援する形で1944年8月から6ヶ月の間、日系人強制収容所を回った。その範囲は40州、移動距離は約23000マイルにのぼった。この巡講で彼自身は「帰米二世」のモデルとして新聞などで取り上げられた。

(4) 沖縄戦での島民救出に関わる

1945年4月に加わり、情報部員の通訳兵として活動する。英語、日本語に加え、ウチナーグチに流暢であったこともあり、ガマ（壕）に隠れる人々にウチナーグチで投降を呼びかけた。12のガマで投降を呼びかけ、11のガマで救出ができたという（比嘉1982）。

(5) 戦災民救援運動・帰化権獲得の活動を行う

戦後は沖縄戦災民救援運動（衣類や豚、やぎなどの輸送）に関わった。沖縄戦のために沖縄で活動した際、終戦後の活動についての準備も行っていた（比嘉1982）。この他にも日本人の帰化権獲得のための活動を行なった。

(6) 新聞投稿・執筆・映画製作を行う

比嘉は自身の見聞きしたことを活字することに長けていたため、彼自身のヨーロッパ戦線のことなどが多くの新聞記事に掲載される。また書籍『移民は生きる』『ある二世の轍』を刊行したり、記録映画『ハワイに生きる』を製作したりした。

比嘉を対象としたインタビューやテレビ・ラジオ番組（ラジオ放送「ハワイのウチナーンチュ」（1984年）BS1スペシャル「戦場の良心チムグクル：沖縄を救った日系人」（2015年））も存在する。

比嘉はさまざまな活動を生涯かけて精力的に行なったことは明らかである。帰米二世に関する生活の多くの部分については、彼らの口述資料に頼らざるを得ない部分が少なくない。その点で、彼自身がこれらの活動で収集した資料を利用すれば、その一端に迫ることが可能となる。

3. 比嘉太郎の収集した資料について

2節で触れたように、比嘉太郎により収集された資料は実にさまざまである。その資料は、写真、文書、メモ、音声、映像など多岐に渡る。彼自身の活動の意義を考える上でも、資料の全体像を把握することが期待される。著者はこの点からこの資料に関する情報を収集することにした。国内外の図書館や博物館・文化センターなどに所蔵される資料目録や関係者への聞き取り等により、主に以下の機関に資料があることがわかった（2019年12月時点）。

(1) 沖縄県公文書館（比嘉太郎文書）

基本的には、比嘉太郎に関する資料は沖縄県公文書館に所蔵されている。比嘉太郎の長男 Alvin Aisaku Higa 氏により多くの資料が寄贈された。この資料は沖縄県公文書館に所蔵される沖縄関係資料にある個人文書として扱われる。以下は比嘉太郎文書に関する記述である。

故比嘉太郎（生没年 1916年～1984年）の私文書。平成7年11月に、世界ウチナーンチュ大会で来沖した子息のアルビン・比嘉氏より受贈。移民史家として知られる比嘉太郎は、ハワイ生まれの日系2世。第二次世界大戦中は、日系2世部隊の一員としてイタリアを転戦。沖縄戦では通訳兵として志願参加。壕に避難している民間人に対して投降の説得にあたった。戦後は沖縄救済運動に携わっている。また、日系人の権利獲得問題にも大きな関心を寄せていた。文書は比嘉太郎の履歴や関心を反映し、沖縄戦及び戦後の救済運動に関するもの、移民史に関するもの、日系人の権利に関するものなどが多い。資料年代は1900年～1984年。数量は619件である。

（沖縄県公文書館のウェブサイトより）

沖縄県公文書館に所蔵される資料が比嘉太郎の収集した資料の主要な部分を占める。比嘉太郎の活動については沖縄県公文書館に行けば把握することができる。

(2) ハワイ日本文化センター

比嘉太郎をはじめとするさまざまな人物を対象に行なったオーラルヒストリーの映像資料が存在する。その一つが Ichigukai (一隅会) によるものである。同センター・リソースセンターにその映像が残されている。以下の資料はその映像資料の書き起こし資料の一部である(資料は <https://www.jcch.com/tokioka-heritage-resource-center> よりダウンロードできる)。

(3) カリフォルニア大学ロサンゼルス校

同大学の Research Young Research Library の Special Collection に所蔵される JARP (Japanese American Research Project) collection の一つに入っている。

資料1：比嘉太郎のインタビュー映像の書き起こし

ICHIGŪ KAI
ORAL HISTORY INTERVIEW
with
Taro Higa (TH) 比嘉太郎
Interview by: Rev. Ryokan Am (RA) 荒了寛
Interview Date: October 4, 1977

註：[]内は転写者による補足又は英語の言葉の和訳。(?)は聞き取れない又は不明瞭な言葉。太字の英語(例family)は、会話が実際に英語で行われたことを表す。

TH: 今日は1977年10月の4日、こちらは天台宗ハワイ別院の広間において、ハワイ一遇会主催による事業の一環として行われております、“移民の歩み広く記す”の一場面としてここに招待されました。私、自己紹介します。私の両親は沖縄県出身の比嘉タメジロウとカナの両氏で、1916年に私はハワイに生まれ、幼少にして沖縄へ送られ、沖縄で尋常(中等?)の部へ、それからしばらくして大阪やハワイ、日本を転々とし、今、ここで荒先生のインタビューを受ける所です。じゃ、先生何か、自己紹介しましたから。

RA: あのね、私が比嘉さんに一番伺いたいことはね、あのー、これHawaii [1986発行] ってJames A. Michenerですか、この本の中にね、日本兵がイタリア戦線だね、300人ぐらいの白人の兵隊を救うのになつたのは、何百人くらい死んだとか、その情景がね非常に詳しく書いてある一説があるんですね。

TH: はい。

RA: それを見て、日本人は、日系人はあの戦争中どういう生き方をしたのか、それから、そのアメリカと日本が戦ったその中で、どういう気持ちでその戦争に参加していたか、しかも、戦争に出た人たちのおかげで戦後日系人が市民権を獲得する、あるいは参政権を得る為には、選挙権を獲得する為に、非常な力になったという、そういうことで、いつか実際に戦争に言った人たちの話を聞きたいと思っていましたので。あなたは、その他ならぬ比嘉太郎さんが、そういうことでは、大変、数奇な経験を持つとて言うことを伺ったのですね、一度ぜひ聞きたいと思つたんです。比嘉さんの一生を色々観れば長いことになりませうけれども、とりあえず、その、戦争始まってから戦争終るまで、そして戦後どういうことをしたかという、そのアウトラインを伺いたいと思うのです。それなので、比嘉さんが、入ったのは100大隊っていうわけですか?

TH: そうです。

RA: 100大隊って言う軍隊の成り立ちって言うのはどういうことなんですか?

(JCCH ウェブサイトより)

資料2 Denso Encyclopedia の Thomas Taro Higa の項

The screenshot shows the Denso Encyclopedia website. The main content area is titled "Thomas Taro Higa". It includes a "Table of Contents" on the left, a main text block, and a "Contents" section with a numbered list. The "Early Life" section provides biographical details.

Category

Table of Contents

A-Z
By Category

« Previous Article
Midori Kono Thiel

» Next Article
Norman Thomas

Printer-friendly
Cite

Learn more »

Thomas Taro Higa

Print Cite Bookmark and Share

Thomas Taro Higa was a 100th Infantry Battalion veteran who conducted a lecture tour between June 1944 and January 1945 under the sponsorship of the War Relocation Authority (WRA), the Department of the U.S. Army, and the Japanese American Citizens League (JACL) to combat rumors that Japanese American soldiers were being used as human shields.

Contents

- 1 Early Life
- 2 Pearl Harbor Attack and Military Service
- 3 Battle of Okinawa and Return to Hawaii
- 4 For More Information
- 5 Footnotes

Early Life

Thomas Taro Higa was born in Honolulu, Hawaii, to immigrant parents, Kamezo and Kana Higa, on September 22, 1916, the third of twelve children. To relieve the burden of caring for so many children, Higa's mother sent Thomas, his older brother, and older sister to their ancestral home in Shimabukuro, Kitanakagusuku, Nakagami-gun, Okinawa-ken to be raised by his grandparents until he was nine years old. He spent his early teen years in Oosaka before being sent back to live with his parents in Kahala'u, Hawaii, where they had a family farm.

About the Incarceration
Do Words Matter?
Historical Timeline
Map

Name Thomas Taro Higa
Born September 22 1916
Birth Location Honolulu
Generational Identifier

1969年3月収録。同資料は同大学の Special collection で聴くことができる。

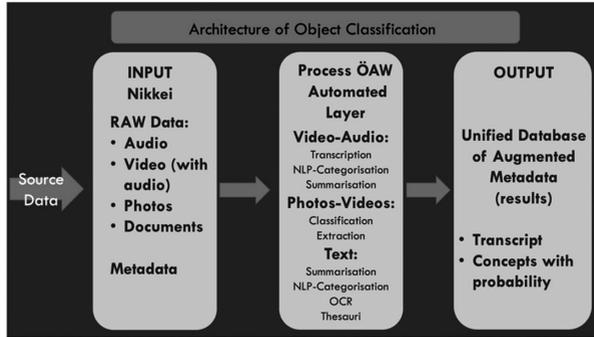
この他にも比嘉太郎に関する情報はウェブサイトにも確認できる。アメリカ・ワシントン州シアトル市に拠点を置く非営利団体 Denso による Denso encyclopedia と Wikipedia である。ここには Denso Encyclopedia のものを資料2として掲載する (Nakamura 2015)。

このように、比嘉太郎に関する資料は実にさまざまな形態のものが存在し、その資料の所在も国内外の機関にまたがって見られることがわかる。以下では、これらの資料をデジタル人文学的な視点で利用した場合に見られる特徴を見ることにする。

4. IBM Watson とディープラーニングによる資料の可視化

本節では、1節で述べた人工知能技術を活用した形での資料の可視化を行う。第3次人工知能として提供されるようになった技術として注目されているのが、IBM Watson とディープラーニングである。IBM Watson はいわゆる質問応答システム、並びに意思決定支援システムのことで、Augmented intelligence (拡張知能) または Cognitive computing system (自然言語を理解・学習し人間の意思決定を支援するシステムのこと) と IBM がよんでいるものである。本プロジェクトでは、オーストリア科学アカデミー・オーストリアデジタル人文学センター (以下、ACDH と称する) との共同態勢で比嘉太郎資料のウェブテキストデータ、

図1 データの処理の方法とアウトプット



(Asahi, et al 2019 より)

映像データ、ならびに写真データを利用した形の可視化を進めているところである（これまでの活動については、Asahi(2017), Asahi, Wandl-Vogt, and Preza Diaz (2018, 2019)などを参照）。

ACDHと共同で進めている作業は図1にまとめられる。この作業の流れとして、(1) 比嘉太郎資料のデータ（ローデータとメタデータ）を入力することから始まり、(2) ACDHの側での自動処理を経て、(3) 概念（concept）と可視化（Superset Visualization）を提示する、というものである。

基本的にはテキストデータ（ウェブテキストも含む）、画像データ、映像データのいずれも自動処理を行なった上で、確率論的な数値に基づいた概念（concept）が提示される。複数の形態の資料（テキスト・写真・音声・映像）を横断的に検索し、その資料の持つ特性を可視化させられるところに本アプローチの大きな特色がある。次節では、ウェブテキスト資料と写真資料を使った可視化のプロセスとアウトプットを示すこととする。

5. テキスト資料と写真資料の可視化

本節では、ウェブテキストと写真資料の自動処理による可視化の事例をそれぞれ見ることにする。

5.1. IBM Watson を利用したテキストの自動処理と可視化

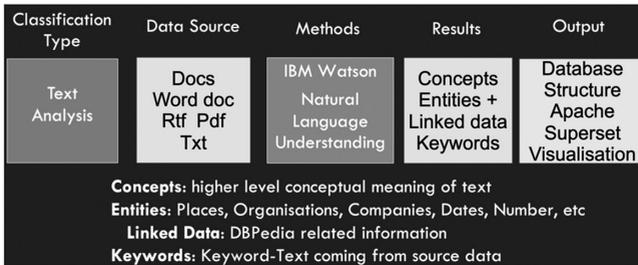
まず、テキストの自動処理による concept の抽出とそれによる可視化の事例を

試みる。ここでは、資料2の Thomas Taro Higa のテキストを事例とする。テキストには以下の手順で進められる（図2）。

図2に示した作業を行うと、文書ソフトやテキストファイル、PDFのデータをIBM Watsonによる自然言語理解を経由する形で、概念化（テキストの意味より抽象度の高いもの）させることができる。その結果が図3に示すような概念である。この資料には20の概念が示される。

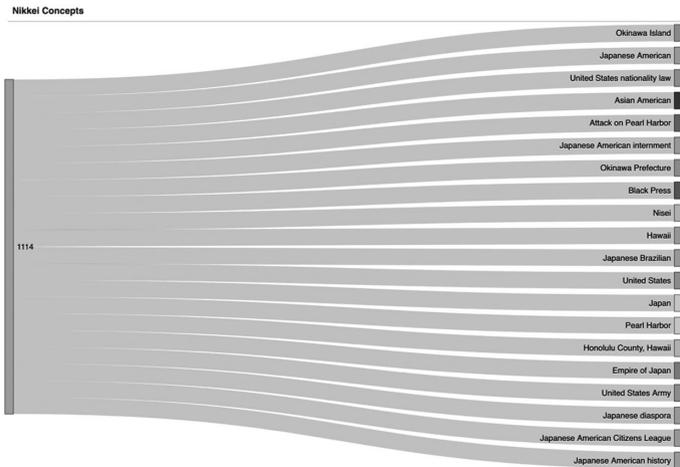
ここからすると、例えば、「nisei」「JACL」「Japanese American internment」などの概念が抽出されていることがわかる。これらは比嘉太郎自身または、彼の

図2 テキスト資料データの自動処理の手順ワークフロー



(Asahi, et al 2019 より)

図3 IBM Watson による 20 の概念



活動に関係するものである。これらは研究者の評価ではなく、IBM Watson による自動処理で抽出されたのである。この他にも、この概念とは別に、上位概念 (Entities) とキーワード (keywords) も自動的に生成される。上位概念として Japan, Hawaii, Okinawa, Hawaii, Thomas Higa, Toshiko Chinen がキーワードとして Speaking tour, battle of Okinawa, Hawaii, Higa が出ている。Toshiko Chinen は比嘉太郎の妻であるが、この他のものが全て比嘉太郎の人生に深く関わっているといえよう。その意味でも、IBM Watson の精度は高いと言える。

5.2. ディープラーニング技術を利用した写真の自動認識と処理による可視化

次に写真資料を処理の方法を取り上げる。この場合の処理の手順は図4に示した方法で進められる。図4によると、写真資料を、Clarifai というソフトを使用することで、画像認識をさせ、その認識プロセスで抽出させた概念を可視化 (Superset visualization) させるものである。図5は比嘉太郎資料の写真の一例である。

図4 写真資料データの自動処理の手順

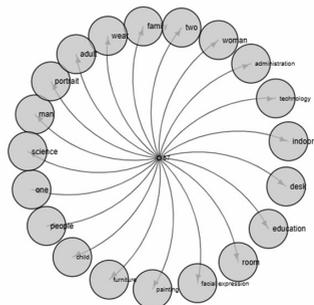
Classification Type	Data Source	Methods	Results	Output
Computer Vision	Pictures	Clarifai Visual Recognition Workflow: General Model	General Concepts	Database Structure Apache Superset Visualisation

(Asahi, et al 2019 より)

図5 画像認識させた写真の例



図6 Clarifai により抽出させた概念



この写真の概念は、Clarifai によって抽出することができる。その概念図を図6に示す。図7にはアウトプットを示す。

図7はその手順によって整理された概念を259枚の写真を自動的に認識させる形で生成されたものである。この写真からは総計約5180もの概念が抽出された。図7 Nikkei CV Network に示した図は、この概念の重なりを示している。図5は一つの写真資料の概念ネットワークであるが、これを259枚分行なったのが図6である。重要な概念であればあるほど、大きな中心に現れ、周辺的な概念であれば、小さな図の周辺に現れる。

concept の中で出現頻度の高い概念を図7に示した。Furniture についてはのちに触れるが、Wear や no person, wood, retro, paper, people などがある上位を占める。これらは衣類を着た人物写真、人物の登場しない写真、木製のもの（または木が撮影されたもの）、書類が入ったものが多いことがわかる。

図7 259枚の写真を用いた可視化アウトプット

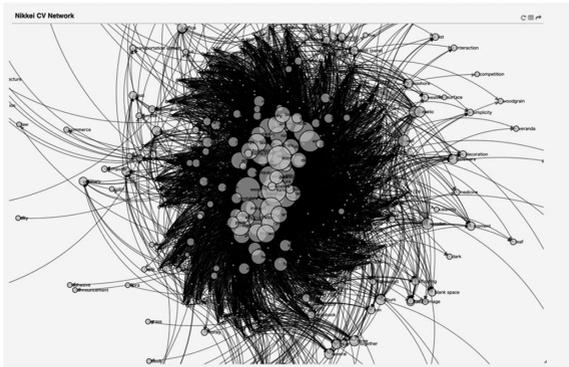
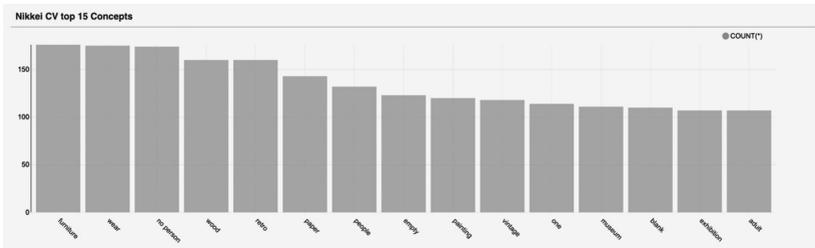


図7 写真資料に高頻度で出現する concept



最も頻度の高かった Furniture については、写真認識システム上生じやすい問題である可能性がある。このシステムの多くがよりどころとする学習データがアメリカ・ヨーロッパなどの地域によるものが多く、日本や日系社会の特徴を把握する上で、clarifai のデータにこれらに十分に対応できるデータがない可能性がある（上田薫 p.c.）。これらは他の画像認識ソフト等を試すなどの対策を講じる予定である。

6. まとめと今後の課題

本稿では、比嘉太郎資料を活用し、近現代資料の評価・選定に関する問題への取り組みの一つとして、または帰米二世たちの言語生活史、社会史などを知る手がかりを得るための試みとして、人工知能として脚光を浴びている新たな技術を援用した自動処理の可能性について考察を試みた。一方で、写真認識などに技術的な問題が残るところもあるが、テキストデータの言語処理による概念生成と既存の移民研究で理解されている部分との共通点を確認できた。

今後は、ACDH との協力関係の中で、より多くの資料の処理を行うことが最初の課題である。今回示したものは、その試行版といってもよい。写真資料については、2000 枚を超える資料の自動認識を行う予定である。前節で述べたような問題がどのような形で継続するのか、その解決に資する方法の開発を含めて、作業を続けていきたい。近年の通信手段の普及により、写真撮影をする機会がより身近なものになった。それだけに、画像認識の技術は向上するはずである。その意味でも本作業が果たす意義は大きい。

【参考文献】

- Asahi, Yoshiyuki (2017) Detecting and mining biographical data from audio/audio-visual magnetic tapes: A case of the Japanese American collections in the US, A paper read at BD2017 (Biographical data in a digital world 2017), Linz, Austria.
- Asahi, Yoshiyuki, Eveline Wandl-Vogt and Jose Luis Preza Diaz (2018) Collaborative approaches to implement science as a service in an open innovation in science framework Japanese diaspora studies on the example of Thomas Taro. A poster presented at Japanese Association of Digital Humanities, Tokyo, Japan.
- Asahi, Yoshiyuki, Eveline Wandl-Vogt and Jose Luis Preza Diaz (2019) Implementation of a Nisei Japanese American Biography and Open Innovation in Science: A Collaborative Approaches, A paper read at BD2019 (Biographical data in a digital world

2019), Varna, Bulgaria.

比嘉太郎 (1974) 『移民は生きる』 日米時報社

比嘉太郎 (1982) 『ある二世の轍 奇形児と称された帰米二世が太平洋戦を中心に辿った数奇の足どり』 ハワイ報知社

森本豊富 (2017) 「比嘉トーマス太郎の「巡講」：戦時下米大陸における講演旅行」 細川周平編 『日系文化を編み直す：歴史・文芸・接触』 ミネルヴァ書房

Nakamura, Kelli (2015). Thomas Taro Higa. *Densho Encyclopedia*. Retrieved on December 30, 2020 from http://encyclopedia.densho.org/Thomas_Taro_Higa/

Thomas Taro Higa (22 October 2018, 05:11 UTC). In *Wikipedia: The Free Encyclopedia*. Retrieved from https://en.wikipedia.org/wiki/Thomas_Taro_Higa

平戸から新世界へ—山縣勇三郎のブラジル雄飛

根川 幸男

(国際日本文化研究センター機関研究員)

はじめに

戦国期から近世における平戸は、日本史のなかでもその国際性において際立った存在であった。近代史、特に移民史に目を転ずると、山縣勇三郎(1860～1924)という平戸出身の人物が注目される。江戸末期の平戸に生れ、主に北海道での事業で活躍した人物だが、1908年に飄然とブラジルに渡っている。ブラジル近代史のなかでは、彼は1920年にブラジル最初の水産学校「フレデリコ・ビラール水産学校」(Escola Industrial de Pesca Frederico Villar)を設立した人物としてわずかに知られる。

山縣の評伝(小説体のもも含む)には、江田(1972～1974)、浦(1983a; 1983b; 1983c)の一連の研究、押本(1972)、前田(1995)がある。いずれも平戸時代から上京、北海道での事業、事業の失敗によるブラジル渡航を描いているが、ブラジルでの事績やその影響については不明な点が多い。江田(1972～1974)がある程度ふみこんで、山縣のブラジルでの足取りを追っているものの、彼の事業を中心とした人材育成とその後の影響については大きな空白となっている。

そこで、小稿では、まず、ブラジル渡航以前の山縣の半生について、上記の江田と浦の著作を参照しながら概略を述べる。次に、ブラジル渡航後の山縣の活動について紹介する。さらに、山縣がかの地で築いた人的ネットワークとそのなか



山縣勇三郎(1860～1924)

で接触したブラジル移民最初期の日本人移民たちの事績について整理し、ブラジル移民史における影響の一端を明らかにしたい。

1. ブラジル渡航以前の山縣勇三郎

山縣勇三郎は、1860（万延元）年2月、肥前平戸藩の勘定奉行の家系、中村弥八郎・トモの四男として生れた。1872年、13歳の時に同藩士・山縣沈雄の養子となる。1879年に上京。陸軍士官学校を受験するも失敗。1881年に北海道に渡り、古物商、ニシン漁場経営、海産物商をはじめ、鉱山経営や海運業に事業を拡大。1891年には根室英語学校（夜学）を開いている。1894年に始まった日清戦争に感発され、事業を弟たちに任せ、「蒙古探検」のため従者2人とともに出発したが、朝鮮・平壤で病に倒れて帰国を余儀なくされたという。ここにも彼の海外雄飛への志が見て取れる。1889年には、弟・精七郎をアメリカ留学に送り出している。

山縣の事業の特徴として、利益の追究だけでなく、何度か教育機関を設立していることが注目される。翌年根室毎日新聞を経営するとともに、1891年に根室英語学校（夜学）、1896年には後進の養成機関として根室実習学校（三年制中学）を設立。さらに牧場経営にも手を広げ、北海道有数の事業家となる。和田村屯田牧場や釧路山林牧場を買い取った時も、従業員のために「学校」を設けたとされている（浦1983a, p.14）。

山縣がいつごろから南米を意識し始めたのかは不明であるが、駐ブラジル弁理公使・杉村濬の「南米ブラジルサンパウロ州移民状況視察復命書」（1905）を読んでブラジル行きを決心したとされている（江田1972, p.12）。同復命書は、移民先としてサンパウロ州の有望を強く訴えるもので、1905年11月には外務省通商局の情報誌『通商彙纂』にまず掲載され、同年末には『大阪朝日新聞』に掲載された。反響は大きく、地方の市町村から外務省に問い合わせが殺到し、同省では、「ブラジル行移民の件は調査中で回答が難しい」という文言の回答を印刷して準備するほどであったという。第1回ブラジル移民を組織した水野龍も、この復命書を読んでただちに外務省と連絡を取り、12月にはブラジル調査に向かったとされている（国立国会図書館2009）。山縣も、1905年から翌年にかけて、腹心の岩永安国、水島信一郎をペルー、ブラジル調査に派遣している。しかし、日露戦争後の反動不況や函館大火で本店消失など不運が続き事業は頓挫。1908年、事業を弟たちに任せ、山縣自身は単身ブラジルに渡航する。

2. 山縣勇三郎のブラジル渡航

山縣は、まずシベリア鉄道経由でヨーロッパへ向かった。1900年代は、日露戦争が起きたこともあって、日本国内でもシベリア鉄道への関心が高まった。1900年代後半の『朝日新聞』のシベリア鉄道記事は423件に達しており、1908年正月にはこの鉄道を利用した東京朝日新聞社主催「世界一周団体旅行」の広告が掲載され、同年3月から約90日間をかけて実施されたという（和田2013, p.20; pp.85-86）。山縣のシベリア鉄道経由ブラジル行きの背景には、こうした同鉄道への関心があったと考えられる。

浦（1983c）によると、山縣は1908年3月30日新橋駅より名古屋、敦賀に至り、「17日モンゴリヤ号にて出国」とある。江田（1972）では、3月31日にロシア義勇艦隊の「モンゴリア号」（1627総トン）で敦賀を出帆したとあるから、時間的にはこちらの方が自然である。敦賀～ウラジオストック間は大阪商船も航路を開設していたが、当時、ロンドンからシベリアを経てウラジオストック、そこから海路で日本や清までの連絡切符を発見できる会社は、ゼーランド会社、フランス郵船、北ドイツ・ロイド、ロシア義勇艦隊などであった（和田2012, p.744）。山縣はロンドンまでの連絡切符の便を求めたのかもしれない。

ウラジオストックに向かう船のなかで、のちに「通訳五人男」と呼ばれる、笠戸丸に先行する第1回ブラジル移民の耕地通訳の青年たちと出会い、シベリア鉄道でモスクワまで同行することになる（江田1972, p.12; 1973, p.5）。彼らは東京外語学校西語学学科の出身者たちであった。こうした偶然は当時の流行を反映していたといえる。山縣の旅の1年前の1907年にジャーナリストの杉村楚人冠がシベリア鉄道経由でヨーロッパへ旅行している。杉村は、山縣と同じくモンゴリア号でウラジオストックに向かい、そこから鉄道を利用しているが、ロシア語ができず、フランス語で用を足したり、復路同室した日本人のドイツ語に助けられたりしている（和田2013, pp.79-85）。山縣はブラジルでの現地コミュニケーションは後述の岩永や安田に頼り切り、日本語で通じたようであるから、語学の素養はなかったとみるべきである。日本語はもとより、英語のガイドブックさえ発行されていなかった当時、シベリア鉄道で旅行するのは容易ではなく、彼が外語学校出身の青年たちと同行できたことは幸運であった。

山縣のシベリア鉄道からロンドン、リオデジャネイロまでの経路は、「ウラジオーモスクワ—ワルシャワ（4・20）—ベルリン（倒産の知せ）—パリ—」「ロンドン5月1日発、リオ着5月18日」（浦1983c, p.33）となっている。ウラジ

オストックに向かう船上で出会った「通訳五人男」は、3月27日に東京発、5月3日にサントス着となっているから（サンパウロ人文科学研究所1996, p.25）、「17日モンゴリヤ号にて出国」とあるのは、4月17日のはずであるが、そうすると、4月20日にワルシャワに着くというのはおかしい。江田（1973, p.5）では、「4月9日モスクワに到着」とある。しかし、3月17日に敦賀発では3月30日横浜駅と矛盾する。ただ、山縣のリオデジャネイロ到着日は、まだを直接知る人びとが存命中であった1933年発行の『伯刺西爾年鑑・下』でも「5月18日」と一致している。これにしたがうと、「ロンドン5月1日発」というのも無理がない。山縣のブラジル行き経路中の東京～敦賀～ウラジオストック～シベリア鉄道の部分については、あらためて精査される必要がある。

しかし、とにかく、山縣は1908年5月18日にブラジルの土を踏んだのである。先にブラジルに派遣していた岩永が出迎えた。日本最初のブラジル集団移民を運ぶ笠戸丸がサントスに到着するひと月前であった。こうして山縣は、1911年8月にマカエ郡のカシヨエイラ農場に移るまでリオデジャネイロ市を拠点とすることになる。

3. 山縣塾の「塾生」たち

山縣がブラジルで行った主な事業は、リオデジャネイロ市での漆器や竹細工商、リオデジャネイロ州マカエ郡におけるカシヨエイラ農場経営（米作、甘蔗栽培、アルコール醸造業を含む）、同州カーボフリオ郡サンベドロに塩田の購入と経営、漁業・海運業への進出と水産学校設立である。ブラジル在住日本人数万人。そのほとんどがサンパウロ州のコーヒー農場の契約労働者であった時期に、日本人移民の主流と異なり、リオデジャネイロ州を基盤にこれらの事業を展開したことは注目に値する。

山縣は生涯多くの人脈を有したが、ブラジルでもさまざまな人物と接している。ここではブラジル移民最初期の若者たちの山縣との接触、その後の事績について述べたい。

山縣が1911年8月に購入・経営し



ブラジル・リオデジャネイロ州マカエ郡

たカシオエイラ農場は、リオデジャネイロ市より北東 180km のマカエ郡にあった¹。ここには弟の中村精七郎をはじめ、星名謙一郎、三浦鑿、金子保三郎、石橋恒四郎、坂元靖、安田良一らが、ブラジル入国初期にこの農場に足をとどめた後、各地に雄飛し、移民社会の指導者に成長していった。したがって、この農場は人材育成のための一種の「山縣塾」であったといえる。この農場で山縣に接し、ブラジル日系社会に影響を与えた「塾生」たちのなかで、星名と三浦については、それぞれ飯田（2009; 2017）、前山（2002）という詳しい評伝が発行されている。一方、他の人物については断片的な資料しか残っていない。したがって、本稿では、カシオエイラ農場を中心とした山縣の人的ネットワークのなかでも、特に金子、石橋、坂元、安田の事績を確認することによって、山縣のブラジル移民史における影響の一端を明らかにしたい。

■金子保三郎（1890 頃?～没年不詳）

金子保三郎については、ブラジル日本移民 50 周年を記念して編纂された『物故先駆者列伝——日系コロニアの礎石として忘れ得ぬ人びと』（1958）にも、『ブラジル邦人名録』（1959）にも記述がない。戦前期の早い時期にブラジルを去った人物であったからであろう。『日本ブラジル交流人名辞典』（1996）には金子についての記述がみられるが、生没年は「不詳」となっている（p.79）。

1916 年、ブラジル最初の日本語新聞とされる週刊『南米』は星名謙一郎（1866～1926）によって創刊される。星名は伊予吉田藩の出身。ブラジル時代、その風貌と性格からジャカレー（Jacaré= 鱷）と呼ばれた。由来はサンタ・クルス時代に鱷を捕食したためと言われる²。『南米』は星野の土地分譲事業の宣伝紙という性格もあり、彼は 1925 年 12 月にアルバレス・マシャード駅頭で射殺されるまで、サンパウロ州内陸部の植民地開発に傾注していく。

星名の週刊『南米』に続いて創刊されたのが『日伯新聞』であり、金子はその創始者の一人とされている。金子がブラジルに来た経緯については、彼とともに『日伯新聞』を創刊した輪湖俊午郎の自伝『流転の跡』（1941）にもっとも詳しい。それによると、金子は愛知県渥美半島の裕福な家庭に生まれ、中学卒業後にシンガポールに渡り、商店に勤めた。ブラジル移民開始後、移民船が同港に寄航するため、何となく有望に思えたので欧州経由でブラジルにやってきたという（輪湖

¹ 浦（1983c）には、リオデジャネイロから 120km と記されている。

² ただ、星野の姻戚に当たる清水尚久によると、星名のあだ名は「ジャカレー」ではなく、「ジャガー」あるいは「ハワイのジャガー」が正しいとのことである。

1941, p.68)。輪湖とも「一、二の差に過ぎなかった」とあるから（同上 p.67）、1890年ごろの生れであったはずである。日露戦争後の海外渡航熱の高まった頃、日本を飛び出た風来坊の一人であろう。

リオデジャネイロに到着した後、山縣商店に入り、花火つくりや扇子貼りなどの手伝いをして食客とも店員ともつかぬ生活をつづけた。彼は輪湖に対して「大将は実に偉い親父だよ」と、山縣を賞賛していたという（同上 p.69）。

輪湖に徳憑された金子は、やがてサンパウロ市に出ることとなる。当時日本人が集住し、日本人街を形成しつつあったコンデ・デ・サルゼーダス通りに部屋を借り、ここに輪湖のほか、鈴木南樹（貞次郎）、三浦鑿ら笠戸丸以前の最初期移民の青年たちがたむろするようになる。その後計画は二点三転するものの、金子は輪湖とともに、1916年10月に『日伯新聞』を創刊することになるのである。

■安田良一（1885～1961）

山縣がブラジル到着後に最初に得た腹心の部下は、安田良一である。1910年、山縣は25歳の安田に農地購入を命じた。安田はリオデジャネイロ州・マカエの郡長を頼り、近郊のカショエイラ、サンフィック、ボンフィンの三耕地約5000町歩購入（4万6000円）の話をまとめた。1911年8月に山縣はリオからマカエに貨車2両を借り切って向かったが、日本の大実業家が来ると、マカエではブラスバンドの演奏付きで歓迎した。ところが、この時山縣は無一文に近く貨車代も払えなかったが、金策は安田の仕事と泰然自若としていたという（浦 1983c, p.34）。

このように、ブラジルでの初期の山縣の事業を助けて奔走した安田は、鹿児島県肝属郡出身。鹿児島県立師範学校を卒業し、小学校訓導となる。ブラジル移民の先駆者の一人隈部三郎がブラジル渡航に際し、鹿児島県知事・千頭清臣に各郡より一人、ブラジル行きの若者の選考を依頼。その一人に選ばれ、1906年5月、ロンドン経由で8月にリオデジャネイロに到着した。サンパウロ市で麦わら帽子製造やレストランで働いた後、リオデジャネイロ州に戻った。この時に山縣と知り合い、その後助手兼通訳のような立場で働いたと考えられる。

『日本ブラジル交流人名辞典』では、1910年、アラゴアス州マセイオの農学校農場主任として3年を過ごすとなっているが、浦「年表」では1911年の天長節に地主・土地有志を前に演説し、安田に通訳を命じたことになっている（浦 1983c, p.34）。どちらにしても、山縣のもとで2～3年を過ごし、マセイオを経てサンパウロ州に行き、モンソン、サンタ・エウドゥシアで農場監督に就任したものらしい。1916年に同州ピндаモンニャガーバのブラジル人農場に入り米栽

培に成功。同地方の米作の先駆者となる。その後、米作の第一人者として、コロポツバ、テテクエーラ、サブカイアの三農場、州政府直営ピンダ農場の支配人などを務める。その後、ピンダモンニャガーバ市郊外で牧場、果樹・蔬菜園を経営する。1954年に同市名誉市民、1958年に日本政府より黄綬褒章受章。

■石橋恒四郎（1884～1964）

北海道根室市出身。東京・暁星学園を経て、東京帝国大学農科大学実科獣医学部卒業。獣医。根室・千島畜産組合技師であったが、山縣の勧めで、1909年8月にマルセイユ経由でブラジル渡航。北海道ブラジル移民第一号とされる。ブラジル到着の当初、山縣農場で働き始めたらしい。

この山縣農場の石橋のもとで、アメリカから転住してきた星名謙一郎も一時期働いていたという（岸本 1958, pp.47-48; 飯田 2009, p.438）。そして1912年頃、石橋は、星名とともに山縣農場を出て、同州サンタクルス耕地で当時のミナス鉱山移民の逃亡者を集めて水田式米作を行ったが、けっきょく労働者側の不平が原因で失敗に終わったという。この記述にしたがうと、石橋は3年ほど山縣のもとで働いたことになる。

1913年には、ブラジルの獣医・畜産技師試験に合格し、マツグロツ・ド・スル州カンボ・グランデ、ゴイヤス州カタランなどの畜産局に勤務。ミナス州ウベラーバのリグランデ河畔で水稻栽培を行い、産業組合を組織したり、日伯新聞に支援をした。この支援は、山縣農場を通じた金子や三浦との縁によるものだったのかもしれない。

■坂元靖（生年不詳～1951）

海軍機関大佐の父・俊一、母政子の次男として東京都に生まれた（本籍鹿児島県）。『日本ブラジル交流人名辞典』（1996）によると、熊本幼年学校を経て、陸軍士官学校（第20期）卒業（p.109）。その経歴から「坂元チンダイ」と呼ばれた。リオ公使館付最初の武官であった、伊丹松雄陸軍大尉が遠縁にあたり、同大尉からブラジル移民事業への転換を勧められ、乃木大将殉死を機に軍籍離脱を決意。1914年4月、若狭丸でブラジル渡航。山縣と知り合っただけで気に入られ、カシオエイラ農場で働くようになったという。『物故先駆者列伝』には、次のように記されている。

大正3年（1914）5月、若狭丸で渡伯し、しばらくリオの山縣勇三郎氏の農場で働らいた。怪傑山縣氏の気に入る「あいつはものになる」と折紙をつ

けられたそうである。大正6年（1917）、ブラジル移民組合に入るに及んで、彼の運命は決定的なものとなつた（日本移民五十年祭委員会 1958）。

同書には、1917年12月、海外興業株式会社（以下、「海興」と略）が創立され、坂元氏も同社の社員となり、「その才腕を思うままにふるうことになつた」とある。移民の配耕は、モジアナ鉄道沿線の旧コーヒー生産地帯が主であったので、海興はその中心地リベロン・プレットに出張所を設け、坂元を主任として送った。続く1920年代、特にその後半から30年代初頭にかけては、海興および日本人ブラジル移民の発展期に当たり、同社は帝国総領事館、有限責任ブラジル拓植組合と並んで、移民社会の「御三家」と呼ばれるようになる。

『物故先駆者列伝』は、続いて次のように記す。

毛並はよし、好男子且つ快男子であつた坂元氏は、昭和14年（1939）まで、モジアナ線一帯の王様となり、珈琲移民の世話役として大いに業績をあげた。明徳梅吉氏の後を承つて、移民事業となり、時に、支店長代理ともなつた。よく飲み、よく利れたので、一般の若い連中からも人気をあつめ「坂元鎮台」と愛称され、コロニア名物男の一人となつた（同上）。

いかにも山縣好みの人物といえる。当時、海興幹部の権威は高く、坂元は「モジアナ線一帯の王様」と呼ばれるほど権勢をきわめたが、人望もあつたようである。

【考 察】

これら山縣塾の出身者たちは、いずれも一騎当千の観があり、ブラジル各地の日系コミュニティで指導力を発揮した。彼らはブラジル到着当初、山縣農場に滞在し、山縣の警咳に接した。毀誉褒貶のある山縣だが、これらの若者たちの人気を集める魅力を持っていたのであろう。金子が伝える山縣の言葉として、「大将は斯う言うて居た。移民会社は下等移民を入れるがよい、俺は高等移民を入れるんだ」（輪湖 1941, p.74）というものがある。つまり、ブラジル移民社会の指導者となるような人材を育成するという意味に理解できよう。金子、三浦、安田、坂元のいずれも日本で中等教育以上の学歴を有する青年たちであり、「高等移民」として山縣の眼鏡にかなった青年たちだったと考えられる。

■金子保三郎とサンパウロ初期の日本語新聞

1916年1月にブラジル最初の日本語新聞・週刊『南米』（謄写版刷り）が星名

によって創刊された。続いて、同年8月、『日伯新聞』（石版刷り）が金子らによって創刊されている。『日伯新聞』は経営が思わしくなく、1919年に三浦鑿に譲渡された。その後、金子は日本に帰国したと言われている。金子も三浦もブラジル渡航直後に山縣のもとで働いた経験があるのは興味深い事実である。日本語新聞発行は、当時の日本人の移民先でさかに行われた事業であり、星名はハワイで、金子とともに『日伯新聞』を発行した輪湖はアメリカで新聞発行にたずさわっていた。したがって、彼らがブラジルでも新聞発行・経営に至ったのはそれぞれの経験によるものもあつたろうが、北海道で新聞発行を行っていた山縣の影響があつたことも否定できない。特に、金子が山縣を崇拜していたのは、輪湖の証言にある通りである。

■安田・石橋の移動線の特異性

安田は、リオデジャネイロ市からサンパウロ市、同州マカエ、一時北東部のマセオ、サンパウロ州モンソンを拠点とするも、1916年以降ピンダモンニャガーバに落ち着くことになる。この移動を考えると、ほぼリオデジャネイロ市～サンパウロ市を中心にブラジル南東部の海岸線を結んだセントラル鉄道沿いに動いていることになる（地図1参照）³。日系人口が集中したサンパウロ州のノロエステ地方（州内陸部）と州都サンパウロ市を結んだノロエステ鉄道、モジアナ鉄道というブラジル日系人の主たる移動経路とは異なる線上を移動したことになる。

石橋もまた、マツグロソ・ド・スル州、ゴイヤス州、ミナスジェライス州と内陸を転々とするが、最後にはセントラル鉄道線上のモジダスクルーゼスに落ち着いている。この点、日本人移民事業に関わっていく星名や坂元の移動とは異なった経歴を有することになった。最初にリオデジャネイロ市、マカエ、カーボ・フリオというようなセントラル鉄道およびその支線上で展開された山縣の事業の影響といえるかもしれない。安田や石橋の行動力は当時の一般的な日本人移民の能力を大きく上回っており、最初期移民の特徴として早期にポルトガル語を習得し、日本の移民会社や日系社会からある程度距離をおきながら、ブラジルにおける自らの生を切り拓いていくことができたのである。これもまた山縣の薫陶の結果であつたかどうかは不明であるが、彼の「高等移民」のイメージには合致して

³ セントラル鉄道は、リオデジャネイロ市セントラル駅とサンパウロ市プラス駅をつなぐ路線であるが、*Pranta Geral da Estrada de Ferro Central do Brasil. Governo do Estado do Rio de Janeiro, 1890.* で確認すると、1890年には、リオ市対岸のニテロイからマカエまで支線が延伸していたことが知られる。



地図1：「セントラル鉄道路線図」(Pranta Geral da Estrada de Ferro Central do Brasil. 1890)。右端あたりにマカエ、左端あたりにダモンニャガーバの地名が見える。

いたのかもしれない。

4. 日本人新聞記者の訪問と晩年の山縣

日本人新聞記者「難波生」は、1922年2月カシヨエイラ農場を訪問し6日間を過ごした。その後、7月から同紙に「海外発展の理想郷」一～六を『大阪毎日新聞』連載し、その第1回に山縣との会見を次のように報じている。

私は二月八日リオ・テ・ジャネイロの対岸ネテロイカリオの北百二十哩のマカエに赴き山県勇三郎氏の耕地を中心に六日間を樹老い草繁る氏の山荘に送った。山県氏は人も知る伯刺西爾移民の先達で明治四十年以来リオの片田舎に住み甘蔗の栽培と塩田の経営をやっている「君国の為め異境の土となるのだ」と豪語し同胞青年の間に憧憬されている老国士である（『大阪毎日新聞』1922年7月15日）

その後、サンパウロを経て、当時のサンパウロ州内コーヒー生産の中心地リベロンプレットへ向かっている。

二十四日珈琲栽培の中心地リベラオプレト市に赴き海外興業会社出張所主任阪元靖氏の案内で八百万本の大耕地を抱擁して珈琲王の名あるシュミッド氏や早尾日本副領事等を歴訪グワタバラの耕地に一泊して親く日本移民の生活状態を研究した（同上）。

ここに「阪元靖氏」とあるのは、上記の坂元靖のことで、山縣農場を出た後、国

山縣勇三郎のブラジル関係略年表

年	出来事	日本	世界
1860(万延元)	平戸に生れる	3月：松田門外の変	
1874	元服し山縣家を相続	2月：佐賀の乱	
1880	上京し陸軍士官学校を受験するも失敗。北海道へ渡る		1月：パナマ運河着工
1881	独立して古物商を始めるが、漁場を購入し、ニシン豊漁で巨利を得る	10月：国会開設の詔	3月：ハワイ国王日本訪問
1891(～92)	根室毎日新聞、根室英語学校開設	5月：大津事件	5月：シベリア鉄道起工
1894	和田屯田兵農場払い下げ	8月：日清戦争開戦	
1895	蒙古探検に出発するも朝鮮で病氣	4月：下関条約	
1904	山縣勇三郎が水嶋峻一郎をブラジルに派遣。山縣商会の名で日本雑貨の販売	2月：日露戦争開戦	
1906	横浜根岸競馬で愛馬アンデス号優勝	11月：満鉄設立	
1908	5月：シベリア鉄道経由でブラジルに到着	6月：日本人移民781名が第1回移民船笠戸丸でブラジル到着	
1909	リオ市開港百年祭に日本代表参加。 星名謙一郎ブラジル到着	10月：伊藤博文暗殺	
1910	6月：第2回移民船旅順丸で婚約者の小林信子らブラジル到着	8月：日韓併合条約調印	
1911	安田良一に命じて、カシヨエイラ農場および隣接地5000haを購入、米作、甘蔗栽培、アルコール醸造業を行う。 星名謙一郎、石橋恒四郎監督のもと、カシヨエイラ農場で働く	2月：関税自主権回復	10月：辛亥革命
1913	中村精七郎夫妻、カシヨエイラ農場を訪問し1ヶ月滞在	2月：第1次護憲運動	1916：『日伯新聞』創刊、のち三浦鑿が買収して経営
1918	一時帰国。日本国内にて移民国策運動。これは実らず、生月の漁師23人をブラジルに同行		第1次世界大戦終戦
1920	リオ州カーボフリオにブラジル最初の水産学校設立	5月：日本最初のメーデー	1月：国際連盟成立
1921	中村精七郎出資で同州カーボフリオ郡サンベドロに塩田を購入しこれを経営		12月：ワシントン会議
1922	2月：大阪毎日新聞記者「難波生」、カシヨエイラ農場を訪問し6日間を過ごす。		
1924	2月25日：治水対策中に毒虫に刺され、丹毒で死去	7月：日本政府により海外移民国策化	5月：アメリカ排日移民法成立
1969	10月：ファビオ安田、ブラジル日系最初の閣僚(商工大臣)となる	1月：東大安田講堂攻防戦	1月：ニクソン米大統領就任

策的移民会社・海外興業会社のリベロンプレット出張所の主任に就任していたことは、前述の通りである。海外興業会社は、1917年に設立された半官半民の国策的移民会社であり、日本の海外移民事業を統括していた。当時日本人移民が集住しコーヒー栽培に従事していたノロエステ地方の中心地・リベロンプレット市に出張所をおいていたのである。難波が坂元を訪ねたのは、おそらく山縣の紹介によるものであろう。

難波がブラジルを訪れた2年後の1924年2月25日、山縣は死去する。その5ヶ月後の7月、大阪毎日新聞社は「東宮御成婚記念事業」として、渡航費全額支給で267人の移民をブラジルに送出している（ブラジル日本移民80年史編纂委員会1991, p.87）。これは難波のブラジル取材が現地情報を提供したものと考えられるが、さらに山縣の性格から難波に対して大いにブラジル移民の可能性を吹聴したものと想像される。山縣はもともとブラジル移民を国策化する素案を抱いており、1918年に一時帰国した際にその案で政府を動かそうとしていたのである。「大毎移民」と呼ばれる1924年のこの移民事業は、ブラジル移民国策化の一つの契機となった。同年7月の帝国経済会議で南米移民の国策化が決定し、翌1925年から渡航費の全額補助が始まり、ブラジル移民急増につながっていくのである。この点、山縣は先見の明があったというべきであろう。

こうした山縣の先見性は、人物の選定でも発揮された。それは半世紀以上先を見通していたというのは言い過ぎであろうか。山縣が安田良一と出会って61年後の1969年10月、安田の長男・安田ファビオ良治（1922～2011）が、ガラスタズ・メディシ大統領によって商工大臣に任命されている。ブラジル最初の日系連邦政府閣僚の誕生であった。安田ファビオは、日本・ブラジル経済合同委員会などを通じ、両国の経済交流を促進した。彼が山縣のことを意識していたかどうかは不明であるが、「高等移民」の子として、まさに山縣が夢見たような日本・ブラジル交流の懸け橋となったのである。

おわりに

2018年に日本人のハワイ移民150周年を迎え、ハワイでも日本でも官約移民以前の日本人渡布について注目が高まった。日本移民学会では、同年6月の年次大会において、ラウンドテーブル「ハワイ元年者150周年を考える」が開かれ、元年者移民の航海、ハワイでの受入れ、元年者移民の子孫たちの動向、当時のハワイの国際的状況について報告と討論が行われた。また、こうした最初期の日本人移民について、ブラジルでは、2007年6月にブラジル日本移民史料館で特別

企画展「笠戸丸以前の渡伯者たち」が開催されている。同年の第14回パンアメリカン日系人大会 & 海外日系人大会 (COPANI) では、ディスカバー・ニッケイのワークショップのなかで「笠戸丸以前の移民小史」が報告されたが⁴、その後継続的にこのテーマに取り組んだ形跡が見られない。

特に、山縣はブラジル渡航前に日本や満洲で事業家として活躍したキャリアを持ち、日本/東アジアとブラジルにわたる広域的な活躍をした人物である。1918年に山縣が一時帰国時に大隈重信に示したとされる「ブラジル対策」の内容は、その後1920年代半ばになって実現した日本政府のブラジル移民政策を先取りするものであった(江田1973, p.488)。

西海の平戸から雄飛し、北海道開拓、満洲渡航、シベリア・ヨーロッパ経由でのブラジル移住という山縣の道程は近代日本の移民史と重なるものであり、その活躍の広域性を考えても、彼の業績は再検討・再評価される必要がある。

参考文献

- 飯田耕二郎「移民の魁・星名謙一郎のブラジル時代」『大阪商業大学論集』第5巻第1号、2009、pp.437-451
- 飯田耕二郎『移民の魁傑・星名謙一郎の生涯——ハワイ・テキサス・ブラジル』不二出版、2017
- 浦恒一「北海道開発の王者で南米移民の父」『平戸史談』第10号、1983a、pp.11-24
- 浦恒一「山縣勇三郎氏の手紙」『平戸史談』第10号、1983b、pp.24-28
- 浦恒一「国士的移民・山縣勇三郎の略歴」『平戸史談』第10号、1983c、pp.28-36
- 江田霞「ある明治人の生涯——山縣勇三郎」1~26『海外移住』第295・296合併号~319号、1972~1974(『海外移住』1972年1月~1974年5月に26回掲載)
- オオイ, セリア・アベ (2007) 「笠戸丸以前の移民小史」、*Discover Nikkei*. <<http://www.discovernikkei.org/en/journal/2007/12/21/copani-knt/?show=ja>> [access:2019/11/22]
- 押本直正「日本人が創設したブラジル最初の水産学校」『海外移住』第295・296合併号、1972、p.2
- 岸本丘陽「先駆移民の巨歩を遺した石橋恒四郎氏」『曠野の星』第49号、1958、pp.47-48
- 国立国会図書館編「皇国植民会社による第1回移民送出」「ブラジル移民の100年」、2009: <https://www.ndl.go.jp/brasil/s2/s2_1.html> [access:2019/12/14]
- 進藤憲吉・山下寛人編『ブラジル邦人名録』1959
- 難波生「海外発展の理想郷」『大阪毎日新聞』1922(大正11)年7月15日、神戸大学

⁴ オオイ (2007)

附属図書館

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi [access:2019/12/07]

日本移民五十年祭委員会編『物故先駆者列伝——日系コロニアの礎石として忘れ得ぬ人びと』1958

パウリスタ新聞社編『日本ブラジル交流人名辞典』五月書房、1996

伯刺西爾時報社編『伯刺西爾年鑑・下』1933

日本移民八十年史編纂委員会編『ブラジル日本移民八十年史』移民80年祭典委員会、1991

前田康『火焰樹の蔭——風雲児山県勇三郎伝』近代文芸社、1995

前山隆『風狂の記者——ブラジルの新聞人三浦鏗の生涯』御茶の水書房、2002

輪湖俊午郎『流転の跡』（私家版）、1941

和田博文編『コレクション・モダン都市文化81——シベリア鉄道』ゆまに書房2012

和田博文『シベリア鉄道紀行史——アジアとヨーロッパを結ぶ旅』筑摩書房、2013

GIESBRECHT, Ralph Mennucci. *Estação Ferroviária do Brasil*. 1996-: <http://www.estacoesferroviarias.com.br/index.html> [access: 2019/12/13]

Governo do Estado do Rio de Janeiro. *Pranta Geral da Estrada de Ferro Central do Brasil*. Rio de Janeiro, 1890.

“Fábio Yassuda, o contador de “causos”. *Jornal Nippo Brasil*”. 2008/12/02: <http://www.nippobrasil.com.br/2.semanal.entrevistas/333.shtml> [access: 2019/02/04]

Prefeitura Municipal: Macaé.: <http://www.macaerj.gov.br/> [access: 2019/02/04]

Macaé no Rio de Janeiro.: <http://turismo.culturamix.com/nacionais/sudeste/macaer-no-rio-de-janeiro> [access: 2019/02/04]

【レポート】

国際シンポジウム「国際海洋都市平戸と異文化への あこがれ—在外資料が変える日本研究—」

光平 有希

(国際日本文化研究センター)

2019年2月9日、1640年頃に建設されたオランダ商館の復元建物「平戸オランダ商館」を会場に、国際シンポジウム「国際海洋都市平戸と異文化へのあこがれ—在外資料が変える日本研究—」は開催されました。(主催：人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用事業」プロジェクト間連携による研究成果活用/共催：平戸市、松浦史料博物館、平戸オランダ商館)

本シンポジウムは、人間文化研究機構の岸上伸啓副センター長と松浦史料博物館の岡山芳治館長による開会挨拶、そして国際日本文化研究センター(以下、日文研と略す)稲賀繁美教授の趣旨説明で開幕。続く基調講演「松浦静山と平戸商館時代」では、京都大学の松田清名誉教授が、好学の平戸藩9代藩主・松浦静山が家史を編纂(修史)するために収集した西洋史料をもとに、静山の目を通して浮かび上がった平戸商館時代像について臨場感あふれる話を展開しました。

その後の第一部では、まず日文研のフレデリック・クレインズ准教授とライデン大学のシンティア・フィアレ研究員が、平戸オランダ商館関連文書の調査・研究状況に関する概要説明と、平戸オランダ商館初期の活動実態を報告しました。続いて、平戸市文化観光商工部の前田秀人氏がオランダ商館の会計帳簿について、さらに国立歴史民俗博物館の福岡万里子准教授は、シーボルト晩年の「日本博物館」構想に焦点を当てた報告を行い、在外一次資料を主軸とした魅力あふれる報告に会場は湧きたちました。

第二部では、京都外国語大学のシルヴィオ・ヴィータ教授が、昭和戦前期に大分でキリシタン資料を収集したイタリア人宣教師マレガ神父の活動や収集史料を通じてみる昭和期キリシタン研究の様相を紹介。また、国立国語研究所の朝日祥之准教授は、デジタル人文学という手法を駆使し、ハワイ出身の婦米二世・比嘉太郎が収集した資料を整理する過程と研究の新たな可能性について言及しました。最後に、日文研の根川幸男機関研究員が、平戸からブラジルへ渡った山縣勇三郎の足跡をたどる発表を行い、全ての報告は盛況のうちに終了しました。

総合討論・質疑応答では、フロアからも多くの質問が投げかけられ、合計113

名に及ぶ参加者の下、シンポジウムは盛会裡のうちに幕を閉じました。

平戸国際シンポジウム

(2019年2月9日、平戸オランダ商館)

プログラム

開 場：12:30 開 会：13:00

挨拶：岸上 伸啓 (人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・副センター長)

岡山 芳治 (松浦史料博物館・館長)

趣旨説明：稲賀 繁美 (国際日本文化研究センター・教授)

総合司会：光平 有希 (国際日本文化研究センター・機関研究員)

基調講演 13:20~14:20

「松浦静山と平戸商館時代」松田 清 (京都大学・名誉教授)

国際シンポジウム 14:20~17:50

発表 第1部

- 14:20 「初期の平戸オランダ商館 (1609~1621)」
▼ フレデリック・クレインス (国際日本文化研究センター・准教授)
14:45 シンティア・フィアレ (ライデン大学・研究員)
- 14:45 「平戸オランダ商館会計帳簿について」
▼ 15:10 前田 秀人 (平戸市文化観光商工部文化交流課)
- 15:10 「シーボルトの日本博物館—最後の構想をめぐる謎解き」
▼ 15:35 福岡 万里子 (国立歴史民俗博物館・准教授)

休 憩

発表 第2部

- 15:50 「昭和戦前期のイタリア人宣教師と豊後キリシタン
▼ マリオ・マレガ神父 (1902-1978) 収集活動の歴史的位置付け」
16:15 シルヴィオ・ヴィータ (京都外国語大学・教授)
- 16:15 「海外への人の移動史の精緻化を目指して—在外資料がもたらしたもの」
▼ 16:40 朝日 祥之 (国立国語研究所・准教授)
- 16:40 「平戸から新世界へ—山縣勇三郎のブラジル雄飛」
▼ 17:05 根川 幸男 (国際日本文化研究センター・機関研究員)
- 17:10 講演者・パネリストによる総合討論及び質疑応答
▼ 17:50 司会：小川 仁 (関西大学・博士研究員)、総括：稲賀 繁美

17:50 開 会



シンポジウムの会場となった平戸オランダ商館



岸上伸啓・人間文化研究機構理事の開会挨拶（右隣は岡山芳治・松浦史料博物館館長）



フレデリック・クレインス・国際日本文化研究センター准教授と
シンティア・フィアレ・ライデン大学研究員の発表



前田秀人・平戸市文化観光商工部文化交流課文化遺産班班員の発表



福岡万里子・国立歴史民俗博物館准教授の発表



シルヴィオ・ヴィータ・京都外国語大学教授の発表



朝日祥之・国立国語研究所准教授の発表



パネリストによる討論・質疑応答の様子



会場に現れた山縣勇三郎の縁者の方々



現地切支丹関係遺跡踏査（前田秀人・平戸市文化遺産班班員（右端）の説明を聴くシンポ参加者）



現地切支丹関係遺跡踏査（根獅子の浜にて）



平戸市側協力者の方々（久家孝史・松浦史料博物館学芸員（左）と出口洋平・平戸オランダ商館学芸員（右））

第 II 部 : ICLA 編

XXII. International Comparative Literature Association in Macau SAR, China, 2019

July. 29-Aug. 02 2019

Panel: Marine Vessel and Road
as a Socializing Vehicle: Enroute Experiences,
Transnational Encounters and Exchanges

Marine Vessel and Road as a Socializing Vehicle: Enroute Experiences, Transnational Encounters and Exchanges

HASHIMOTO Yorimitsu

Maritime ship, whether mercantile or military, have been considered as a metaphor or miniature of a society. Multi-layered and multi-cultural passengers, even if nearly segregated according to the economic status or tracking system, are supposed to form a community bound together by common destiny or destination. In the literature, films and paintings, a marine vessel has been represented as a positive example of meritocracy: no matter how diversified it looks, it is to be hierarchically integrated and organized by a chain of command. Otherwise it would be turned out to be the ship of fools. It is hardly surprising, therefore, the stories concerning warship and civilian ship has increased with the rise of the nation-state and the national consciousness.

Meanwhile its socializing process on board have been nearly ignored although a number of travelogues has described the unexpected encounters, experiences and troubles on the maritime road. Cabins are strictly classified but the passenger's identities would not be static and its category system of the ship usually would mold, cross and re-draw the borders of race, class and gender of his or her own society after they left behind. It is not uncommon that impoverished workers or farmers would develop the class and national consciousness including racism after they travelled in international steerage. Ports of call also formed and revised the traveler's view of the world. Many Japanese tourists, on their way to Europe and America for study or business, had been impressed by the culture and people of the port of call. Their impression of China often depends on the observations in Shanghai and Hong Kong, and their image of India was exclusively based on their brief stay in Colombo. So the following four papers are going to emphasize the importance

of enroute experiences of the marine road, transnational encounters and exchanges on the vessel.

Firstly, Hashimoto's "On the Marine Road: Anglo-Japanese Encounters and Exchanges in Modern Maritime Culture" discusses how Japanese maritime culture has almost been designed to overwrite or rewrite British maritime legacy. The sea (and sea routes) as a multilayered contact and conflict zone is sharply articulated by Yanagi Yukinori's art work "Pacific-Shattered Blue" (1997), a collage of debris-like fragments of photographs dimly showing ships sunk during the Pacific War on an upside-down map of the Pacific Ocean (see this paper for details of the map). Maritime maps and maritime literature have also been open to revision. For example, Japan's sea lanes have literally been laid out to reverse or avoid the British maritime travel routes. These sea courses, including the ports of call, unconsciously colored the worldview of first-class passengers and immigrants alike, leaving behind numerous travelogues and novels. Aspiring writers attempted to create a *Treasure Island*-like national novel but failed to produce popular shipboard romances. Taking an overview of Japanese trials and errors in bootlegging British maritime culture, this paper suggests that the social conditions tended to limit Japan's maritime literature.

Secondly Inaga's "Under the Shadow of Apartheid: Maritime Road of Transnational Communication" uncovers the unexpected encounter with the background of racial discrimination in Cape Town. William Plomer (1903-1973) and Laurens Van der Post (1906-1996) came to Japan in 1929 via maritime route, crossing the Arabic and Indian Ocean under the command of Captain Mori Katsue (1890-1989) of the Osaka Commercial Line. Not only the way they encountered Mori in Durban, under the heavy burden of Apartheid, but also their stay and experience in Pre-War Japan are rich in relevant anecdotes in cross cultural mutual understanding between Africa and East Asia. To the two topics interests in comparative literary studies, the paper also adds two others factors. One is the experience of the ship navigation crossing the Oceans. The other is the byproduct of their discovery. While William Plomer took interest in Japanese mediaeval theater Noh and collaborated with Benjamin Britten (1913-1976), Van der Post's learning of the Japanese language and his familiarity with the mentality helped him survive in the camp of the Prisoners

of War in Java. By referring mainly to *Yet Being Someone Other* (1982), the paper will investigate into the significance of transnational navigation touching upon the maritime imagination.

Thirdly Negawa's "Crossing "Manchukuo" and Brazil: Immigration Ships as Contact zones" examines the exchange between "Manchukuo", a kind of Japanese version of British Commonwealth, and Brazil. Negawa also considers an immigration ship's networking of the countries / regions globally as a contact zone where people, goods, animals and plants cross over. In this paper, he focuses on the exchanges of animals and plants among Japan, Manchuria and Brazil via Japanese immigration ships to Brazil. Flora and fauna exchanges, Japanese cherry, for instance, Manchurian animals and Brazilian orchids, emerged around 1940. Closely analyzing materials in Japanese in the period just before the Pacific War would clarify the political background and meaning of the crossing between Imperial Japan and Brazil.

Finally, Garasino's "Navigating Between the West and the Rest: East Asia's modern Experience in the Works of Enrique Gomez Carrillo (1904-1907)" gives another perspective from South America, examining how South American people looked and experienced at the same maritime road. This paper discusses the writings of the literary critic, journalist and travel literature author Enrique Gomez Carrillo (1873-1927) on East Asia and Japan at the closing and the aftermath of the Russo-Japanese War (1905-1907). Focusing on maritime travel, both as a narrative resource and as an actual means of mobility in transnational intellectual encounters, this paper illustrates one example of the impact of Japan's modern experience on the Latin American intellectual sphere at the beginning of the twentieth century. In doing so, it will analyze how Carrillo attempted to challenge and decenter hierarchical divisions of West and East.

With the following papers, we aim to emphasize the importance of marine vessel and road as a socializing vehicle. It would lead to rediscovery of nearly forgotten travel writing as a maritime literature and reinterpretation of the novels apparently describing maritime ship as a metaphor of a society.

On the Marine Road: Anglo-Japanese Encounters and Exchanges in Modern Maritime Culture

HASHIMOTO Yorimitsu

Osaka University

Introduction: The Rise and Rule of Britannia's Maritime Culture

It is no exaggeration to say that Britain has created the prototype for a maritime culture. Stories about embarking across the seas for opportunities not found on land and the growth and success that could be achieved through these voyages have been repeatedly written and read about in Britain.¹ This archetype began with a privateer licensed by Queen Elizabeth in the 16th century who justified an attack on a Spanish ship full of looted gold in opposition to the Black Legend of Spain, which conquered South America. British historical romance, then, began to idealize such pirates as if they were pioneers. Later, both merchant ships and warships became icons, representing Britannia as a free and democratic multicultural community.

The maritime culture of Britannia "ruling the wave" has flourished globally since the late 20th century, even after Britain lost its global hegemony and, perhaps, its obsessive interest in the sea. Ships following the British tradition are widely portrayed as ideal class societies, whereas open organizations harmonizing freedom and discipline are also often modeled after ships. One example text is Robert Louis Stevenson's *Treasure Island* (1883), which became the classic example of the *bildungsroman* wherein the sea and the ship bring the treasure of growth to boys. Inspired by other examples of British maritime literature, the French author Jules

¹ See, for instance, Myron J. Smith, Jr. and Robert C. Weller, *Sea Fiction Guide* (Metuchen, N.J.: Scarecrow Press, 1976).

Verne circulated another prototype of the ship around the globe in *Twenty Thousand Leagues Under the Sea* (1870, published in English in 1872). Captain Nemo of the submarine Nautilus worries about the skirmishes that occur between powers from the perspective of a “global marine road,” which in turn can be said to be one of the pioneers of “the spaceship earth” that was coined by American architect Buckminster Fuller in the 1960s. Since the advent of Stevenson’s *Treasure Island*, the pirate ship has come to be associated with an open community, accepting even crude men and underprivileged boys. The distant echo of this idea can still be found in today’s global popular culture. One such example can be found in Han Solo’s spaceship, which welcomes Luke Skywalker in the *Star Wars* series (1977-). *The Pirates of the Caribbean* series (2003-2017) offers another perspective on British maritime culture in terms of the shipmates representing a multicultural group, even though the Royal Navy is frequently represented as a class-dominated, authoritarian, and homosocial organization.

Despite Japan being a separate island nation, her maritime culture actually owes much to Britain and British influence. Oda Eiichiro’s manga, *One Piece* (1997-), is the most successful pirate story in and beyond Japan in this medium. It was also the first internationally popular instance in history of the Japanese appropriation of British maritime literature. The shipmate of the boy named Luffy and the pirate king together represent a community that is open and diverse in terms of gender and culture and is not restricted to human species. As the late pirate king Gol D. Roger apparently alludes to gold under the Jolly Roger, the chief mate of the Roger Pirates, dandy Silvers Rayleigh, appears to be a combination of Long John Silver from *Treasure Island* and the notable Elizabethan Privateer Sir Walter Raleigh. *One Piece* thus inherits many different elements from British maritime culture. Although this culture, class, and gender have been exchanged and reorganized in maritime literature created in Britain, as on the marine road, their importance has so far been left unexplored.² In this article, I would like to provide an overview of how the maritime culture and literature from Britain were transplanted to Japan, in terms of both its successes and failures.

² Daniel Finamore and Ghislaine Wood (eds.), *Ocean Liners: Glamour, Speed and Style* (London: V&A Publishing, 2017) is an exceptional study, although the transnational exchanges have been nearly ignored.

1. The Smuggling and Transplanting of British Maritime Literature

From *Beowulf* to Virginia Woolf, English literature has been intimately connected with the sea. The oldest hero in English literature defeats a monster while going across the sea, whereas Woolf's first novel *Voyage Out* (1915) is all about a trip to South America aboard an ocean liner. Richard Hakluyt's *The Principal Navigations, Voyages, and Discoveries of the English Nation* (1589) provide the ultimate milestone in English marine literature, locating, emphasizing, and propagating the role of Britain as a seafaring nation. Hakluyt archived and published the records of many voyages, especially in the form of manuscripts, which became the main source of inspiration for much of the maritime literature that followed, from *Gulliver's Travels* (1723) to *Treasure Island*. The Hakluyt Society, founded in 1846 to honor and promote his mission, continues to compile and publish explorers' records with the intent of exploring the historical relationship between the British people and the sea. As both Hakluyt himself and the eponymous society that takes his name envisioned, the River Thames has been widely considered as a waterway capable of connecting London to all five continents. The British people have commonly estimated that the sea was not the moat around the island and provided the main stage for the history and literature of the British Isles. The patriotic lyrics of "Rule, Britannia!" (1740), which have been sung independently from the masque pageant *Alfred*, almost became a reality in the 19th century. Britain literally "rule[d] waves" with its military control of the seven seas and its worldwide network of routes for British merchant ships. It is therefore unsurprising that, alongside the Navy, the P&O merchant ship has been considered as one of the two wheels of the British Empire, expanding the fortunes of the British in both the economic and political spheres. As mentioned at the beginning of Joseph Conrad's short story "Youth" (1898), "England, where men and sea interpenetrate," became self-evident at the end of the 19th century.³

Japan's treaty ports were forcibly opened in the 1850s and became incorporated into the maritime roads and logistics of Britain and other powers. As the narrator of

³ Joseph Conrad, *Youth* (London: Dent, 1967), p. 3.

Conrad's "Youth" recounts: "I had faced the silence of the East." The arrival of both steamboats and gunboats overwhelmed the feudal Japanese and left them speechless. Meanwhile, "they were looking at me."⁴ In the midst of severe economic disparity and following the example of the British Royal Navy, the Japanese modern government established their own Navy in 1872 and, although most of the battleships and merchant ships were made in Britain, founded Osaka Shosen Kaisha (1884-) and Nippon Yusen Kaisha (1885-) as Japanese P&Os. By the 1890s, merchant shipping and government colonization, not as migrant workers but as settlers, flourished. In 1893, the Shokumin Kyokai [Society for Promoting Colonizing Immigration] was founded, considering Latin America as one of the main candidates for colonization due to the fact that it was relatively free of conflict with European settlers or inhabitants. Tsuneya Seihuku, who worked at the core of the colonizing business on research and public relations, published *Kaigai Shokumin ron* [*Overseas Colonization*] in 1891, highlighting on an upside down map that Japan was to be the gateway to Asia and the Americas beyond the Pacific Ocean (Fig. 1). At the

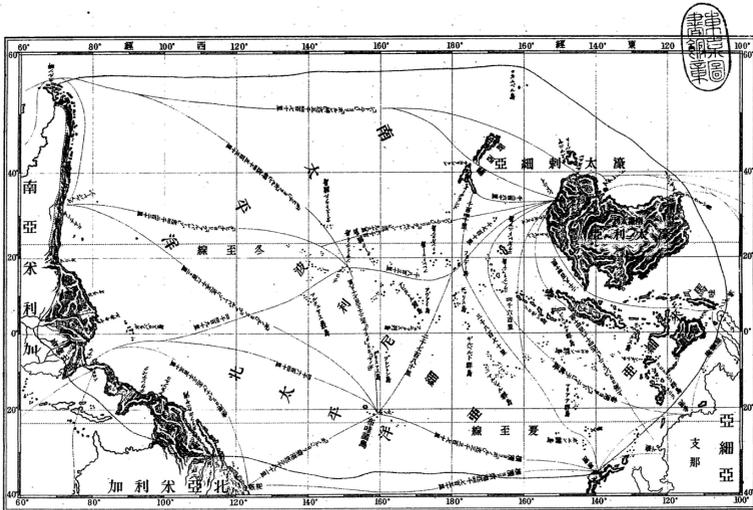


Fig.1 Upside Down Map of Japan and the Pacific from Tsuneya Seihuku, *Kaigai Shokumin Ron* [*Overseas Colonization*], 1891.

⁴ Conrad, *Youth*, p.40.

same time, naval augmentation and merchant logistics promoted and reinforced Japanese imperialism in the Sino-Japanese War (1894-1895) and the Russo-Japanese War (1904-1905). In 1896, Nippon Yusen Kaisha was permitted to open a shipping route to Europe, essentially reversing the British Eastern route, while Osaka Shosen Kaisha opened a maritime route to the newly colonized Taiwan, mainland China, and the Korean peninsula. In the 1910s, the company extended to the subcontinent of India, then to Africa in the 1920s.

With the development of its maritime routes, Japan, like Britannia, had tried to cultivate its own self-image as a country that dominated the sea. Maritime routes and the shipping business were promoted as imperial causes, while the national maritime culture was essentially invented and reorganized with the intent of making it worthy of the name of Britain in the East. For example, when a maritime magazine called *Umi* (which means Sea) was launched with the backing of the Japanese Navy, author Koda Rohan contributed an essay entitled "The Sea and Japanese Literature" (1900) that lamented the lack of maritime literature in Japan. According to Rohan, the underlying reason for this is not in the temperament of the society but its social structure. In Medieval times, writers and readers were mostly courtly aristocrats who lived in the inland capital, thus secluding themselves from the sea. In the early modern period, the *Edo Shogunate* placed a ban on the seas. The sea was therefore depicted in Japan as an outrageous sphere that was plagued by monsters and ghosts swallowing ships.⁵ Emphasizing that the sea had often appeared in ancient poetry when maritime exchanges were common and indispensable, however, Rohan argued that maritime literature was possible and would be necessary to the future development and defense of the islands of Japan. Rohan's assertion was exactly what the Japanese government needed in the age of imperialism, and the article was included in a Japanese government-authorized textbook

⁵ Kraken-like octopus is one of the monsters. Ironically its stories and images inspired by Hokusai were circulated in the English speaking world. See Yorimistu Hashimoto, "Pirates, Piracy and Octopus: From Multi-Armed Monster to Model Minority?" in Inaga Shigemi (ed.), *A Pirate's View of World History: A Reversed Perception of the Order of Things From a Global Perspective* (Kyoto: International Research Center for Japanese Studies, 2017) and introduction to Yorimitsu Hashimoto (ed.), *Caricatures and Cartoons 1890-1905* (Tokyo: Edition Synapse, 2015).

from 1904 to 1940.

This inclusion indicated that any masterpieces of Japanese maritime literature for the textbook were not available, and Rohan's claims had to be repeated often until the outbreak of World War II. Rohan himself had already completed *Isanatori* [*A Story of a Whaler*] (1892), a retrospective story of a former sailor that finds parallels with *Treasure Island*. With an enthusiasm for writing or reviving Japan's authentic maritime literature, Rohan began serializing a novel, *Sora Utsu Nami* [*Waves Striking the Sky*] in 1903. It is obvious that Rohan had set out to emulate with British maritime literature, because just after he began to write the novel, he sent a friend who was familiar with English literature a letter asking him to recommend several works by Clark Russell, a popular British author of maritime literature in the 19th century.⁶ *Sora Utsu Nami*, however, was stranded, and Rohan found it difficult to write. Possibly to encourage and inspire his fishing companion's ambition, Ishii Kendo, a learned author, compiled unpublished records of drifting Japanese sailors in early modern times as *Hyoryu Kidan Zenshu* [*Strange Stories of the Shipwrecked*] (1908). Although he enjoyed reading and reviewing this Japanese counterpart to Hakluyt's library books of the marooned, Rohan was unable to complete the novel after the publication of the third volume in 1907.

Ambitious and nationalistic writers had also embarked on attempts to naturalize maritime literature, especially after science fiction writer Oshikawa Shunro appropriated Verne's Nautilus in the *Kaitei Gunkan* [*Undersea Warships*] of 1900. Among writers of children's literature, there were several attempts to circulate pirate novels based on or inspired by *Treasure Island*. They referred to *Wako* [Japanese pirates] who allegedly sailed across the Eastern China Sea, sometimes attacking the coasts of the continents and islands, but none of these novels were successful. The same applies to paintings of beaches and the sea, inspired by Gustave Courbet, Eugène Boudin, and the Impressionists. Based on the seascape paintings from J. M. W. Turner, paintings of fishing boats and ferryboats had been created by Antonio Fontanesi, the artist responsible for introducing European oil

⁶ Hahsimoto Yorimitsu, "Oani Matagaru Rohan" [Appropriation or Emulation? Koda Rohan's Essays and Their English Originals], *Osaka Daigaku Daigakuin Bungaku Kenkyuka Kiyō* [*Memoirs of the Graduate School of Letter, Osaka University*], 59 (2019), p.72.

paintings to Japan.⁷ No masterpiece, however, could compare to Hokusai's *Big Wave*, and very few paintings of life onboard ship were drawn. The necessity of and for maritime literature for the Japanese seafaring Empire was a point regularly made until the 1940s. For example, the writer Yoshie Takamatsu said in 1940 that maritime literature is "a literature that should naturally grow with the development of the nation and national power, and that we must grow at all costs."⁸

The most prevalent example of maritime literature in Japan may have been a travelogue in the form of a report on studying or working abroad in the West.⁹ Wasuji Tetsuro, one of Japan's representative philosophers, published a bestselling book entitled *Fudo [Climate and Culture]* (1935) that classified the world's civilizations by climate based on his own observations at and around British ports such as Hong Kong, Singapore, Colombo and Port Said when he was traveling on Nippon Yusen's ocean liner in the 1920s. Watsuji, who laid the foundation for modern Japanese ethics, was asked by the Navy to give a lecture at the Naval War College in 1943. In the lecture entitled "Nippon no Shindo" [Code of Japanese Emperor's Subjects], Watsuji emphasized the ways that the ordinary Japanese were brave and desperate by referring to the death of the British explorer John Davis in the 17th century. The explorer, whose name was used for the Davis Strait in Greenland, left for Patani off the coast of Sumatra and captured a Japanese pirate ship. While inspecting a load of rice, he was attacked by prisoners of war and fell by "sixe [sic] or seven mortall [sic] wounds." Regarding the pirates, the recorder states that: "in all this conflict they never would desire their lives, though they were hopeless to escape: such was the desperateness of these Japonians [sic]"¹⁰. Considering the pirates to be Samurai warriors, Watsuji quotes this passage and presents the whole

⁷ See the exhibition catalogue of *Tasogare no Kaigatachi [Twilight Paintings]* (Shimane Art Museum, 2019).

⁸ Yoshie Takamatsu, "Maritime Literature" in Tokyo Nichi-Nichi Shimbun, Osaka Mainichi Shimbun (eds.), *Kaiyogaku Tokuhon [Introduction to the Ocean Studies]* (Tokyo Nichi-Nichi Shimbun, 1940), p.195.

⁹ For details, see Hashimoto Yorimitsu and Suzuki Sadahiro (eds.), *Oshu Koro no Bunkashi [A Cultural History of Japanese Ocean Liners]* (Tokyo: Seikyusha, 2017).

¹⁰ Albert Hastings Markham (ed.), *The Voyages and Works of John Davis, the Navigator* (London: Printed for the Hakluyt Society, 1880), p.181.

episode as a kind of code for naval officers, who would have launched the infamous suicidal Kamikaze Squadron a year later, to follow. Though it might have been expected that Watsuji would use this opportunity to emphasize the historical continuity of the naval spirit, he primarily discussed the ways that European powers colonized the continents when crossing the ocean and made it clear that Japan lacked a maritime culture of its own.

Interestingly, his main source of reference for the lecture seems to have been the Hakluyt library, which formed a part of the 70,000 books donated by Britain after the fire at the Tokyo Imperial University during the Great Kanto Earthquake of 1923. After the war, possibly using the same materials, Watsuji expounded a different criticism against Japanese insularity in his next bestselling book, *Sakoku: Nihon no Higeiki* [*Chained Country: Japan's Tragedy*] (1950). In the introduction, Watsuji mentions the Hakluyt series in his contrast of the way that Europe was continuing to expand its colonies with the help of technology, while Japan lacked their spirit of science. Keeping the seclusion order that forbade the Japanese from traveling outside of their country had, according to him, led to the ferment of chauvinism and ultimately the defeat of Japan. Watsuji's 1950 work can therefore be read as a declaration of defeat; unlike in Britain, in Japan, insularism was just too strong to foster a maritime culture, literature, and empire.

2. Romance or Reality: Modernizing a Melodrama of Tristan and Isolde

It is similarly natural that Japanese literature also lacked the category of the romance aboard ship. Its origins may be traced back to the story of Tristan and Isolde in English-speaking countries. Although shipboard romance became common in the 19th century, the recurring theme of a woman falling in love with a man on a boat as she goes to meet her fiancé was almost inherited as the archetype. The popularity of this kind of romance in the English-speaking world was largely due to the fact that safe and inexpensive travel across the Atlantic was so abundantly available that unescorted women were permitted on ocean liners. As is often seen in the "international novels" of Henry James and W. D. Howells, this kind of romance became popular because it explored the amusing contrast between the naïve open-minded American society (female) and the conservative European or Bosto-

nian society (male). One classic example is Howells' *The Lady of the Aroostook* (1879), wherein a Massachusetts-grown daughter, after losing her parents, embarks on a voyage to visit her family in Italy. During the journey, she falls in love with a brilliant and sophisticated young man from Boston. After overcoming certain barriers and misunderstandings, the couple gets married and departs for California, a new world for both of them. The new setting of the Ocean liner proved to be very convenient for romance. In the few weeks it took to cross the Atlantic, the huge enclosed space of the ship enabled bourgeois men and women, who might have never normally met or interacted with each other, to get to know one another and work past their first impressions and misunderstandings.

Painters also seized upon the chance to portray romance and exploit the curious gaze of contemporaries on American women who were traveling alone. Howells' *The Lady of The Aroostook* (1879) was published at the same time as a series of transatlantic paintings by the popular American painter Henry Bacon.¹¹ Bacon repeatedly portrayed the female solo traveler on board ship in "Flirtation on Ship-board" (1880) and "Romantic Observations" (1880). It should be noted from his paintings, however, that it is mainly the male crew, not other passengers, who court these women traveling from America. These less desirable rendezvous between the customers and staff aboard ship were noticed and drawn by the artists on the other side of the Atlantic, for instance, the French painter James Tissot, who was active and very popular in England. Following the Victorian tradition of narrative painting, "The Last Evening" (1873) can thus be read as a sentimental short story. A woman sitting in a deck chair with blank eyes is in the process of being passionately persuaded by a sailor into accepting his courtship. Meanwhile, two men who probably represent her father and the sailor's boss are glaring at the potential couple as they listen to another passenger's complaint. This morganatic love story inevitably ends in tragedy before the end of the voyage, although her expressionless face makes it impossible to know if a romance actually existed between them. In this case, the personal history of Kathleen Newton, Tissot's muse, model, and mistress, would provide a useful footnote. Newton fell in love with a captain on her voyage to meet her unseen fiancé, a civil servant in India, and was sentenced to di-

¹¹ Judy Bullington, "Henry Bacon's Imaging of Transatlantic Travel in the Gilded Age," *Nineteenth Century Studies*, vol.14 (2000), pp.75-79.

voiced before she met Tissot.¹²

A similar incident happened in Japan in 1887 when Kuki Ryuichi, who was at the center of Japanese art administration, asked art historian Okakura Kakuzo, well known as author of *the Ideals of the East* (1903) and *the Book of Teas* (1906), to take care of his sick wife from the United States. The two of them, like Tristan and Isolde, fell in love while on board, and their relationship, after landing in Japan, became a scandal. Another case is still more famous. In 1901, a woman named Sasaki Nobuko was on a Nippon Yusen ocean liner bound for America to marry her unseen fiancé, similar to Newton. However, she became attracted to another purser on board ship, though he was married. She finally decided to return to Japan without setting foot in the United States, though she was ostracized, and her marriage was seen as a disgrace. Sasaki's story inspired the novelist Arishima Takeo, who had crossed the Pacific *via* ocean liner to study in America, to write a novel modeled on her entitled *Aru Onna* [*A Certain Woman*] (1911). Arishima depicts the heroine as a queen in a male-dominated salon on the ship's deck, swaying weakly with both seasickness and passion. Like Henry James's *Daisy Miller* (1879), "a certain woman" is shunned from the Victorian-dominated high society and eventually dies of uterine disease. As the novel suggests, female travelers from Japan were very few and far between on the first- or second-class passengers' deck before the war. The majority of travelers were male, students, office workers, and bureaucrats like Arishima, and few could afford to travel with their families. The female passengers from Japan, therefore, were exposed to the curiosity and imagination of the male tourists they met on board ship. Tanizaki Junichiro's short story "Secret" (1911) would provide a typical example. The narrator happens to see a fellow female passenger again on the street and repeats secret meetings with her, years after they had met on a boat bound for Shanghai. It becomes clear that he had a relationship with the woman on the ship because he ponders whether she was a "professional" or ordinary woman.

The frustrated or phantasm-like imagination of the male traveler toward his female counterparts seems to have made the boundaries between cash nexus and romantic relationships less visible since the 1920s, when Victorian ideals fell out of favor. Suspicious gazes like those of the narrator of "Secret" seem to have circulat-

¹² Bullington, p.89, n. 14.

ed a rumor of the existence of a “poisonous bird,” a semi-professional “woman who sails from steamer to steamer and preys on men”.¹³ According to her memoir-like essay “Smuggler and Poisonous Bird” (1929), Matsumoto recalls that Japanese male passengers would gossip and were highly suspect of a Caucasian couple made up of a young sophisticated woman and an elderly new rich man aboard a boat to England. Meanwhile, Takizawa Keiichi offers an account of this urban legend-like woman from a French perspective. Takizawa married a French woman and compared Nippon Yusen Kaisha with French Mail. One of the main differences, he said, was the existence of romance or love among the passengers. Takizawa had become aware of a couple’s whispering voices on deck when they had seen a certain kind of woman who intended to comfort French passengers and officers.¹⁴ It should be taken into account that women, especially those from America, may have felt liberated but were often criticized at this time. These stories were often exaggerated in fiction, such as the flappers who openly hunt for the millionaire on board in Anita Loos’ *Gentlemen Prefer Blondes: The Intimate Diary of a Professional Lady* (1925) and a lady thief who searches for her prey while cruising the deck in Laurel and Hardy’s short film, *Sailors, Beware!* (1927). *Love Affair* (1939) is yet another noteworthy film that indicates the changing theme of the shipboard romance and its consumers since the days of Howells and Tissot. As in the previous cases, what they are experiencing is forbidden love on the Transatlantic Ocean Liners. The difference is that both the man and the woman are going to see their respective fiancés in America and that their love actually achieved great popularity as a romantic film.

By contrast, influenced by the economic gap and stagnation of the 1920s, the main focus of Japanese writers moved on to life below deck. Except for Shimazaki Toson’s *Umi He [To the Sea]* (1918) or Yokomitsu Riichi’s *Ryosyu [Ennui on a Journey]* (1937), few novelists deal with the kind of talk that goes on in the first-class passenger’s smoking room. Proletarian literature, such as Hayama Yoshiki’s *Umi ni Ikuru Hitobito [Those Who Live on the Sea]* (1926) and Kobayashi Takiji’s

¹³ Matsumoto Keiko, *Matsumoto Keiko Tantei Shosetsu Sen [Selected Detective Prose of Matsumoto Keiko]* (Tokyo: Ronsosha, 2004), p.301

¹⁴ Takizawa Keiichi, *Furansu Tsushin[News from France]* (Tokyo: Iwanami Shoten, 1937), p.56.

Kanikosen [*The Crab Cannery Ship*] (1929), vividly and seriously described the lives and adventures of junior seafarers who worked at the bottom of the ship and the harsh laborers of the Cargo Ship. Another variation, the immigrants of the steerage deck, also attracted attention. Based on his own experience, Maedako Hiroichiro writes about his voyage to America in *Santo Senkyaku* [*Third Class Passengers*] (1922), whereas Ishikawa Tatsuzo, reflecting his own observations, records the realistic intentions and reasons of the immigration to Brazil in *Sobo* [*the Common People*] (1935). At the time Tsuneya promoted migration to Latin America in *Kaigai Shokumin Ron* (1891), a majority of the voyage routes were managed by foreign steamships. By the 1930s, Osaka Shosen opened its own maritime route and promoted immigration to Brazil. In 1938, Osaka Shosen euphemistically called its own worldwide route “A Unique Round-the-World Service” (Fig. 2) that was not dependent on British passages except in Singapore (Kobe-Singapore-Durban-Santos-Buenos Aires-Panama-Yokohama). Despite its charming publicity, it is unsurprising that the narratives surrounding these immigration ships had



Fig.2 Osaka Shosen Kaisha's advertisement of 'A Unique Round-the-World Service', *Umi* [*Sea*], vol.8 (1938 May),

none of the elements of a shipboard romance. For example, in *Sobo*, a woman is raped by an immigration supervisor during her stay in a quarantine camp in Kobe. This part was removed at the time due to censorship, but it became clear that romance was impossible in the harsh reality of life aboard ship.

Giant ships may have been considered in Japan as a symbol of oppressive militaristic social institutions responsible for bringing the miserable to a new outlet across the sea. The negative image of the ocean liner still remained in the post-war era, for instance, in Fusen Tetsu's oil painting "Haisen" [*An Abandoned Ship*] (c1969) (Fig. 3). Fusen, a fisherman in his youth, had painted the seas and beach scenes since the 1920s. His work was re-



Fig.3 Fusen Tetsu, Haisen [an Abandoned Ship], c1969

cently reevaluated. With the uncommon word “Haisen,” associated with “defeat in war,” replacing the more usual word with the same pronunciation, this huge abandoned ship might be read as merchant ship that could be converted into a battleship, both of which had been built and botched in the naval arms race at the expense of the common people. Interestingly, the contrast between the huge modern building and the humble houses of the oppressed people can be traced back to Tsuda Seifu’s “Burujiyowa Gikai to Minsyu no Seikatsu” [Bourgeois Parliament and the Life of the People] (1931), the title of which was changed to the “new parliament” under duress from the authorities. Tsuda, however, privately and more harshly repeated the same criticism in the famous “Giseisha” [Victim] (1933), contrasting the tortured and hanged dead body of Kobayashi Takiji (the author of *Kanikosen*) with the parliament as seen through a prison window. This kind of nightmarish memory could, perhaps, be another reason why maritime literature did not flourish in Japan, even after the war had ended.

Conclusion: Diffusion or Dilution of British Maritime Culture?

After World War II, the system of ocean liners restarted across the world, fueled by nostalgia for the Jazz Age. American movies drove the re-creation of the good old days on board ship. In 1953, *Gentlemen Prefer Blondes* (1953) became very popular, and *Love Affair* (1957), a remake of *An Affair to Remember*, gained classi-

cal status. The glory of Britannia, who once ruled the sea, became a thing of the past. In its place, a twisted and somewhat bitter nostalgia was found, for instance, in Richard Gordon's popular novel *Doctor At Sea* (1953). Embarking on a British cargo ship for South America, a doctor finds several crewmembers that once worked on ocean liners like P&O and sadly realizes that such elegant days will never return. A dance on the cargo ship "tied up by a meat works", for instance, reminds him of "Tissot's painting" and "the majestic ensigns of half a dozen now forgotten empires."¹⁵ In an eponymous movie made in Britain in 1955, the doctor falls in love with a French Singer played by Brigitte Bardot at a port in South America, but the scene is filmed as a parody of a shipboard romance. Filled with clichés, "a ship's rail, calm sea, moonlight, you, me, the end of the voyage," the doctor tells her, "we're playing a very traditional scene."

For the defeated nation, such tired romances were still a long way off. From 1950, a few students began to leave for Europe or America to study. One of them, Endo Shusaku, began his career with "Aden Made" [Up to Aden] (1954), a retrospective view of a fourth-class passenger room that was inspired by his dark days of alienation in France. Following Osaka Shosen's reopening of Brazilian migration routes, Ito Einosuke published a novel entitled *Nanbei Koro [En Route to South America]* (1957) to emphasize its existence as a hopeful gateway for the new generation to a new era, unlike that which was abandoned in *Sobo*. The story is an update of *Aru Onna*, wherein a young female passenger is flirted with by a crewmember but rejects him before embarking on a new life in Brazil with a young immigrant man. Though a story similar to Howells' *The Lady of the Aroostook* (1879) might finally have been possible in Japan, the framework was long out of date.

The 1950s were to be the last glory days of the ocean liner, a development that was foreshadowed by the arrival of the airplane. It is unfortunate for Japan's maritime culture that the ocean liner had become a thing of the past by 1964, when overseas travel was finally liberalized. The heyday of the ships had ended before maritime culture could be fully opened up and enjoyed by the common people in Japan. Maritime culture might therefore have been absorbed into one of the nostalgic historical or scientific romances, whereas cruise ship culture today has become more or less a relic of the nostalgic past for the rich and leisured classes. In Japan's

¹⁵ Richard Gordon, *Doctor At Sea* (Cornwall: House of Stratus, 2001), p.119

popular culture, the ocean liner continues to be chosen as a giant enclosed space that is convenient for romance and mystery novels. This kind of dilution of British maritime culture, however, may be shared by the English-speaking world and even by Britain herself if they chose to act as an island fortress protected and cloistered by the silver sea. In these circumstances, relatively similar distant memories of the glory days of pirates and passenger ships are felt in Britain and Japan, *One Piece* was born into a Japan that had imported British maritime culture for over 100 years.

Under the Shadow of Apartheid: Maritime Paths of Transnational Communication

INAGA Shigemi

International Research Center for Japanese Studies, Kyoto
Post-Graduate University for Advanced Studies, Hayama, Japan

Introduction

Unexpected cross-cultural encounters sometimes took place, even against the backdrop of racial discrimination in Cape Town, South Africa. William Plomer (1903-1973) and Laurens Van der Post (1906-1996) met Captain Mori Katsue (1890-1989) of the Osaka Commercial Line and came to Japan in 1926 by ship, crossing the Arabian Sea and the Indian Ocean. The story of the way they encountered Mori in Durban, despite the barriers of apartheid, and of what they saw and experienced in prewar Japan is rich with relevant anecdotes of cross-cultural mutual understanding between Africa and East Asia. This panel addressed two topics in this story of particular interest in comparative literary studies. One topic is the experience of traveling by ship across the oceans. The other is what followed from their discovery of Japan. William Plomer took an interest in the Noh performing arts and went on to collaborate with Benjamin Britten (1913-1976) in the creation of *Curlew River* (1964). Van der Post learned the Japanese language and his familiarity with the thinking of the Japanese would help him and his team survive their experience as prisoners of war in Java during World War II. Referring to Post's account, *Yet Being Someone Other* (1982) and other records, the study investigates the world of transnational navigation, touching upon the maritime imagination.

Birth in South Africa, then a British dominion, and the experience of visiting Japan

in 1926 were defining elements of Laurens van der Post's eventful life (1906-1996). Yet the voyage crossing the oceans connecting the two was perhaps his most decisive experience. That journey was key in the discovery of another self in him; it was the sea that revealed to him the hidden bonds of human destiny and nature. The fact that it was, moreover, a Japanese ship, and that he was one of only two non-Japanese passengers, together with William Plomer (1903-1973), turned out to provide him with an irreplaceable initiation to Japan, about which he knew nothing at the time. It was, in fact, only in his late 70s that the full meaning of that trip to Japan would finally reveal itself to van der Post. The enigmatic, half-hidden message, "destinies working themselves out behind the storms and calms" (*Listener*¹) takes shape as the fulfillment of revelations an exceptional life allowed him to behold.

I

Japanese captain Mori Katsue 森勝衛 (1890-1989) was 36 and on a mission of opening up a maritime route between South Africa and Japan when he met Laurens van der Post (then 20), and William Plomer (23). They were two young journalists who had just lost their jobs because of their outspoken, anti-apartheid writing. The Japanese captain, taking note of their circumstances, found in them ideal candidates in his search for good journalists or writers capable of reporting on Japan and its inhabitants to the African Continent, which was then dominated by the White settlers. He thus invited them to board his cargo-passenger ship, the *Canada Maru*, traveling from the port of Natal to Japan.

1. The "Lion's Roar": Shipboard Initiation to Japan

The two white passengers' initiation to Japan begins with their astonishment at hearing a roar just as they were taking after-dinner tea in their cabin, next to the Captain's bathroom.

¹ Printed on the back of the paperback edition, Laurens Van der Post, *Yet Being Someone Other*, Penguin Books, 1984. The following quotations are from the same edition, unless otherwise mentioned.

... when a sound almost like a roar of pain from a trapped lion came from the bathroom next door. Plomer looked at me with some consternation and exclaimed: "My God, what's happened? Murder in the first degree, I presume!"

But this outburst of sound then produced a pattern of tone and rhythm which, strange as it was to us, made it clear that Captain Mori was singing in the bath. This singing went on for nearly forty-five minutes. Soon after it ended, Mori, changed into his most formal of uniforms, appeared at our cabin entrance to invite us to have a cocktail with him on deck and watch the sun go down. And, he went on to ask, how had we liked his singing? (*Yet Being Someone Other*, pp. 122-123)

In February 1980, we heard Captain Mori's impressive voice when he welcomed Laurens van der Post at the University of Tokyo Komaba campus on one evening. His strong bass boomed out over all the students gathered there and I noticed immediately that van der Post was well accustomed to Mori's inimitable way of speaking English. The passage quoted above reminds us that Lafcadio Hearn, too, had a very keen ear: upon his arrival at Yokohama, and then at his first awakening in Matsue, he was deeply moved by the strange and unfamiliar sounds (wooden shoes and merchants' voices) in the town. Likewise, Laurens keenly reacts to this strange song by the Captain:

No off-stage accompaniment would have better suited this world of the *Canada Maru* to my mind and, had it been absent, I now feel it would have impoverished the atmosphere of our voyage.

...

The "world" of the *Canada Maru* was exactly what it was: a microcosm of the macrocosm of Japan, a sort of Bonsai tree of the spirit transplanted into this miniature pot of its culture afloat on a foreign sea. International and contemporary as the ship was, everything in it was totally Japanese. Apart from Plomer and myself, there were no foreign ingredients to subvert an essentially Japanese version of the modern world. Few of the officers and none of the crew spoke even the most elementary English. They were insulated from any distortion of their own national pattern which contact with the wider world might otherwise have caused. (*Yet Being Someone Other*, p. 123)

2. The Sound of the Shakuhachi: Second Initiation

The next phase of the initiation comes with their exposure to a Japanese musical instrument.

[U]nder my feet, a strange music rose fountain-wise into the sky. It soared with singular lucidity and a noble purity as if inviolate and sheer from the same source as this personal sense of release into the freedom of movement of the universe that I had just experienced. It was, in fact, my first experience of Shakuhachi, the bamboo flute which participates even more profoundly in the symbolism that informs the spirit of one of the few peoples left who still lead a symbolic life, than it does in the almost countless practical needs of their existence. Since the bamboo itself rose out of the earth, as the music to which I was listening soared out of the silence, there was total reciprocity between the fashioning of the flute and the fountain of sound that came to me. That sound was spare and devout in its obedience to its own law of expression which commanded that it should convey all that was possible with clarity and simplicity.

I was to discover that the music itself was about some seabirds combing a secluded beach of yellow sand by the Inland Sea which, like a great lagoon locked out of the swing of the storms of the ocean, holds a vision of calm on the far frontier of a volcanic people's tumultuous history. As a result it was charged with nostalgia; a nostalgia just as much mine as it was Japanese. At once I was glad I had come so unprepared to this new experience. Books would have come between my natural reactions and Japan. For the first time I was unconditioned to let what had to happen come to me unimpeded and be received in my own natural way. (*Yet Being Someone Other*, pp. 124-25)

The anecdote recalls the story of the reed flute in the Islamic mystical tradition. Rumi (1207 -1273), in his Book of the *Masanavi* famously talks about the flute made of reed: being cut off from the waterbed, the plant has become a musical instrument; but it sings nothing but a song of separation from its birthplace, nostalgia to the Origin which he aspires. The *shakuhachi* piece that van der Post and Plomer heard must in reality have been the modern work, *Hamachidori*, 浜千鳥 (Plovers on the Shore), composed eight years earlier in 1918 by Kikutake Shôtei 菊武祥庭

(1884-1954). The waka poem upon which the song was based had been recited by the Emperor Meiji, the sovereign who presided over the emergence of modern Japan, who had passed away six years before in 1911.

潮風を 翼にかけて 冬の夜の 長浜伝い 千鳥啼くなり
Shiokaze-wo tsubasa- ni kake-te fuyu-no yo-no Nagahama tsutai chidori na-
kunari
 磯浜の 波間の月の 影落ちて 暁寒く 千鳥啼くなり
Isohama-no namima-no tsuki-no kage ochi-te akatsuki samuku chidori na-
kunari

Incidentally, the song describes the small seabirds (*chidori*) singing (*nakunari*) on a shore reflecting the light of the waning moon (*namima-no tsuki*) shortly before dawn (*akatsuki*). We will come back to this later.

3. The Forest of Chinese Characters: The Third Initiation

The third initiation is Laurens's learning of the language.

On the very next day, as Plomer and Mori started their translation of *Turbott Wolfe*, I began my studies of Japanese with the purser. The first character he taught me was that of a tree, perhaps feeling prompted to establish that what was about to happen between us was to be not an act of will and mind so much as a growth from roots deep in the dark and mysterious earth.

For instance, in writing “tree” [木], divested of any phonetic obligations, one drew, in fact, a simplified picture of a tree and in the process the imagination was enriched with all the associations it had with trees, in a way that is not possible by just saying the word. The “sky” [空], as something higher than the trees, was represented by another simplified picture of a tree and a line above it; “heaven” [天], as something beyond the sky, was yet another line above the line representing the sky. Tree, sky and heaven, therefore, were joined in a vision of organic unity from the earth wherein it was rooted, to the heaven at which all that grew from it was aimed. The East [東] for which we were bound, was not just a cardinal on a compass but was shown like an outline of one of those ancient stone lanterns that light the way to some shrine in Japan:

as the lamp of the rising sun [日] shining behind a tree [木] from the direction along which light and life were renewed out of darkness and death. And so the process went on and on, to be orchestrated into a great symphony of more and more complex relations of forms as, for instance, in characters like that for “rest” [休] which is a picture of a man [人] underneath a tree [木]; or “anxiety” [思? 心配?], which was an immediate favourite, i.e., a heart [心] at an open window [窓?]. (*Yet Being Someone Other*, pp. 128-29; the Chinese characters in brackets are added.)

The explanation of the Chinese pictograms as the writer understood them, reveals how the young South African approached the forest of letters “orchestrating” “a great symphony” by the combination of their roots. The explanation of the character “window” 窓 certainly contains some confusion; yet the fact that the open hole 穴 composing a window allows communication of the heart 心 is more than suggestive. In particular, the composition of the letter “East” 東, i.e., the Sun 日 seen through a tree 木, not only accounts for the author’s orientation, but also anticipates another anecdote on the Japanese worship of the Sun goddess, *Amaterasu*.

II

4. The Moon and the Primitive Mind

The moon is the opposite of the sun. At their first encounter with the full moon at sea, van der Post notices that the Japanese he was discovering are as sensitive and as easily “haunted” by the moon as the South Africans he knew well.

Fortunately, after many days there came an evening that Plomer was to enjoy as totally and as actively as I did. It came on the night of our first full moon at sea. Although the goddess who ruled the Japanese from the beginning, and is also the source of authority for them, is the sun, yet their love is for the moon which makes light in the darkness that haunts their spirit, day and night, below the horizon of their doing and being. Even as they bowed to the sun that morning, they did so with a slight abruptness in order quickly to be able to turn their minds to the imminence of a full moon. Part of this concept of Li [礼] is that all should be received with courtesy and ceremonial in order to create a

state of grace in the presence of the reality. (*Yet Being Someone Other*, p. 155)

This observation leads him to develop an idea of contrast between the “civilized” Europeans and other “autochthone” people still exonerated from modern “distortion,” or “the divide between them and us” namely between Oriental or “native” African minds and Occidental “civilized” Westerners:

[W]e were born in love with the sunset, they with the moonrise. I was to remain astonished throughout my life by the role of the moon in their lives and temperament. Perhaps it is all best left to the symbols that inform us of meaning which take over on the frontier where articulation fails. And there was one such symbolic statement of which my sensei told me that was to stand me in good stead. Appropriately it is contained in a piece of that noble and ancient order of the theatre of Japan which is called “Noh.” (*Yet Being Someone Other*, p. 156)

And this further invites him to the classical Noh theater.

This particular play is as spare, simple and yet full, as is demanded of all that is best in this spartan discipline of theatre. It was about an anonymous woman, in the grip of tragedy too great to be named, standing at the rim of a deep, dark well. The moon rises behind her as she stares into this black pit until it is high enough for her to see its reflection at the bottom of the pit . . . That is all, not because there is no more that can be brought to it but because it is enough; and enough for a humble spirit, like that of this woman in her anonymous lot, is almost too much. (*Yet Being Someone Other*, p. 156)

5. Moon Shadow or Reflection of the Mind

The piece he heard of from his “teacher” or “sensei” i.e., purser of the ship, must be identified as *Izutsu* (The Well Head) 井筒, a Noh play composed by the fifteenth-century Noh master, Zeami 世阿弥 (1363?-1443). A woman looks into the well, contemplating the moon reflected on the water’s surface. One modern English translation goes: “The pure and clear water in the pail reflects the moon. While looking at the moon in the water, I feel that my heart also becomes pure and

clean.”² The Japanese original is as follows:

Akatsuki goto-no aka-no-mizu (refrain), *tsuki-mo kokoro-ya sumasuran*
 暁ごとの 関伽の水、暁ごとの 関伽の水、月も心や 澄ますらん。³

van der Post associates this with a Zulu saying:

I thought of a Zulu saying “Patience is an egg that hatches great birds: even the sun is such an egg.” Little did the Zulus know, I told myself, that the moon too is another such egg. So while we ate and turned over poems in our minds, the moon rose through the level of its over-flowing *Momiji*-red self, into a more precise yellow self, followed by the lucid silver manifestation which was once enshrined almost to perfection in the quietude and seclusion of the *Gep-parō*, “The-Waves-by-Moonlight” pavilion in Kyoto. Finally it became a calm unwavering illumination of what was left of the night, until it enfolded our ship with a tender feminine authority in a soft shawl of light. It left the sea with swift impressionistic transcriptions of its unhurried climb to the summit of our glowing world, attended only by a single star whose companions had all been lost on the way in moonlight, as other things are lost in darkness. No sooner had it moved into this final phase of its ascent than the poem of the evening appeared. (*Yet Being Someone Other*, p. 159)

The African sun is replaced here by the moon in the Far East as its equivalent, and symbolically enough, this mental association was established at night on the Arabian Sea, sailing between Africa and Japan. The term “pattern” or “self” here is witness to van der Post’s unmistakable affinity with Karl Gustav Jung (1875-1961), with whom he would be acquainted in his later years; the self is reflected in the moon and its color changes dramatically in its progress over the vast ocean. The-Wave-by-Moonlight pavilion refers obviously to one of the wooden huts at Katsura

² See the-noh.com, checked on July 26, 2019.

³ *Yōkyokushū* [Collected Noh Chants]. Vol. 33 of *Nihon koten bungaku zenshū* [Collected Works of Classical Japanese Literature]. Tokyo: Shōgakusan, 1973, p. 273. [『謡曲集』日本古典文学全集、小学館、1973年、273頁]。

Imperial Detached Palace, in the outskirts of Kyoto, built by a member of the imperial family in the seventeenth century, so as to meditate the full moon over a pond. The South African author is also invited by the ship's crew at that moment to the ceremony of composing poems in praise of the moon, a kind of ritual for Japanese.

6. Conrad or a Venture to the Interior

Here Joseph Conrad (1857-1924) comes to his mind.

Conrad possessed for my own immature self then, more than any writer of a time dangerously deprived of instinct and intuition, what an inspired French observer of primitive man called a capacity for *participation mystique* in the world around him. (*Yet Being Someone Other*, p. 163)

The primitive capacity for "participation" here is what the French ethnologist, Lévy Bruhl (1857-1939) had developed. For Laurens van der Post, the "mystical participation" is not superstitious; rather, intuition and instinct play decisive roles in every critical phase of his life facing death. Here he evokes King Lear's famous utterance and gives an original interpretation to it:

It referred to that sombre moment in *Lear* when the doomed King at last finds rough comfort like a rock in the sea of deception and the unreality of a world of worldly and self-seeking men, with the conclusion addressed to his soul, his daughter; "We shall take upon ourselves the mystery of things and be God's spies," Conrad, for me, had been such a spy in many a world beyond the established range of the arrogant and narrowly focused European awareness of his own day. He had been such a one even in the heart of darkness of my own native Africa, and forced a whole new world of unknown earth, being and human considerations upon our slanted and inadequate reckoning. But nowhere had this sense of participation in the strange, antagonistic and totally forbidden been more marked for me than in his discovery of this world the *Canada Maru* was now approaching. (*Yet Being Someone Other*, p. 163)

The Heart of Darkness takes here a special shape thanks to the voyage with the

Japanese ship. What does the “spy” mean here? Laurens van der Post explains it as follows:

The conscious explanation was inadequate and in a sense superfluous, because it was all in the story to be known only as through the profound sense of participation which forced Conrad to report on him. He could, in the end, say little more to put his readers on a course which passed the understanding of his day, than that Tuan Jim had come to him “like a cloud” and, when his own truth finally came to his side in the tangled jungle that was its temple, “veiled like an oriental bride,” went on to vanish “inscrutable as a cloud.” (*Yet Being Someone Other*, p. 164)

While “the inscrutable cloud” is the protagonist in the seascape illuminated by the moonlight, it is also a metaphor for the mental state of the observer in constant metamorphosis. Somebody like “Tuan Jim” for Conrad also suddenly appears as if a “visitation” (in biblical term) to Laurens van der Post, at the very moment when the life and death is at stake. This instinctive inner voice announces there the presence of “yet being someone other,” one line from *Little Gidding* by T. S. Eliot (1888-1965), from which the title of this autobiography is taken. At this moment a curious upside-down happens and death marks its triumph, in token of a final victory, as is the case with King Lear facing his tragic end:

Indeed the effect of the scarlet cloud ahead just then was almost a repeat of Conrad’s image of the crimson crack as of doom itself in the final cumulus formation which crowd around the end of his *Victory* leading with classic inevitability, as in *Lear*, to a death that is nonetheless a triumph and vindication of life. Accordingly, this moment in the *Canada Maru* was to live with me through the long, strange, dangerous and random years which were to follow, as one of personal revelation and intimation, no less intense for me than for Tuan Jim. It began with the lesson of learning how pursuit of my own craft and this experience of the sea, with a thrust of my own to the East, was also a search for my own truth. That alone is why I have had to record it at such length. (*Yet Being Someone Other*, p. 164)

7. Anticipation, or the “Future antérieur” in an Autobiography

We all know that this “moment of truth” will constitute the leitmotiv of van der Post’s war novel *The Seed and the Sower* (1964), based on his experience in the prisoners of war camp in Java.⁴ Obviously, the author here is hinting at his future, though the young Laurens on his way to Japan in 1926 could not have the least notion of what destiny secretly awaits him, 13 years later. Only in retrospective reflection at the end of his life, was van der Post convinced that the voyage to Japan had helped him to uncover his own, yet unknown self; and without this revelation (he calls it “eruption”) he could not have survived the Japanese imprisonment in Java. The evocation of Johor in the passage below is not innocent, as it predicts the author’s destiny there under the Pacific War, but its meaning would not yet have been revealed when he passed through the Johor strait at the age of 20:

I dwell on this abbreviation of the intangible that were coming like thunderclouds over the horizon of my mind, as I did in the resumé of the quickening awareness produced in me by Conrad, because this was the real voyage on which the *Canada Maru* was taking me. I realized this, that Johore noon-day, with a start that was a stab of an awakening heart and mind and that made travelling into a new external world in the *Canada Maru* mean so much to me because it was helping me to go thereby into a great undiscovered country of my own imagination, which I could not have entered any other day. For William, I knew the voyage was an interruption and important only as a means of getting from Africa to Japan. Japan would mend the lines of communication for him again, but the journey between it and the severed significance of Africa had no special meaning for him. For me, however, the journey in between was even more important than our point of departure and arrival. The eruption of an immense potential of new meaning in life caused thereby was so great in my mind that I remained silent on our way back to the ship [at their final port of call, Singapore, facing the Johor Strait].

For once William’s keenness of observation and great gift of wit did not really reach me. I hardly heard him or looked further around me because the

⁴ See Inaga Shigemi, “Mediators, Sacrifice and Forgiveness: Laurens van der Post’s Vision of Japan in the P.O.W. Camp,” *Japan Review*, No. 13, 2001, pp. 129-43.

sound of music of gratitude to Mori who had made all this possible filled my senses. (*Yet Being Someone Other*, p. 171)

III

8. Final Challenge: In Front of a Typhoon

The final challenge in the voyage was announced by an approaching typhoon. Van der Post, a trained seaman, meticulously describes the emergency preparations made by the Japanese sailors on board, and with amazement he remarks:

What the officers and crew were carrying out was not merely an appropriate exercise of seamanship but an observance also of Li at its most profound level: an observance of good manners in the sense that manners are good when appropriate and that man had to preserve his manners and be on his best behaviour especially against the anger of nature and its storm of wind and water, not just as a matter of survival but the more urgent one of bringing himself, his ship and storm into harmonious relationship again with the law of the universe. The dignity and the rhythm this realization induced for me in the behaviour of all from that moment on was almost like a prayer in action. (*Yet Being Someone Other*, pp. 174-75)

Here the notion of Li (Jp. *ri* 理) is understood as the human effort to establish a harmony with nature. In fact *ri* means propensities inherent in Nature, as manifested through the traces which the human being observes by following it, as if making “a prayer in action” by human deeds with insightful reason and wise calculations. Li (Jp. *rei* 礼), precisely the same pronunciation in Chinese, means ritual, on which van Der Post also develops his reflection: Through the experience of the Typhoon and the way each Japanese crew member conducted oneself under the captain’s command convinced Post of the meaning of the “observance of ritual” in Asia:

It was clear that the ship, the observance of the rituals demanded of it, its Captain and crew, were vindicated. The realization brought tears to my eyes; not of relief, I am certain, but because it had all been like some sort of transcendent metaphor in action of a meaning to all, however enigmatic and obscure,

even in the utmost of storm. I went below [from the bridge] then like someone leaving a theatre in which an authentic piece of life pitted against anti-life had achieved its catharsis. (*Yet Being Someone Other*, p. 182)

The challenge of the typhoon, natural calamities, and even the menacing threat of death is understood as “the law-abiding necessities” by Orientals. This understanding led him to a “catharsis” about what lay beyond the question of Life or Death. Let us finish with the next and last quote: It is certain that the psalm of “Abide with me” was sounding in his ears at the sight of this mystical ritual of working in harmony with the thunderstorm under the tropical hurricane.

The storm was part of the great law-abiding necessities which demand, for instance, that even the practiced round of seasons cannot serve the change of one into another without storms to aid them. Certainly what was beyond speculation on the second morning after the typhoon first came to examine our credentials for crossing the frontier, was the clarity with which a new ocean and world and time was now open to us. (*Yet Being Someone Other*, p. 182)



Figure 1. *Canada Maru* passing through the Panama Canal, 1911



Figure 2 Captain Mori Katsue in 1926



て以上船員だなか
(左で右)氏トスガ、央中長船航(右で右)氏一マローブ

Figure 3. Lauren van der Post and William Plomer with Captain Mori, on the board of *Canada-maru*, 1926. *Umi* monthly magazine, no. 12, Aug. 1927.



Figure 4. Laurens Van der Post and Captain Mori Katsue, with Mrs. Mori Kimie (middle), in Tokyo in October, 1987.

Brazil on 322 voyages in the pre-Pacific War era.² The Japanese had taken no longer voyage at any time in their history (cf. Figure 1). On their return voyages to Japan, they brought with them large quantities of Brazilian coffee and also the café culture. Today, Japan is one of the world's leading coffee importers, and the café culture brought to Japan by migrant vessels has taken firm root. These vessels were thus a global medium through which people, goods, and culture came into contact.

This presentation examines the functions and historical meaning of migrant vessels as a form of global media. I shall refer to the 1940 case of two migrant vessels that brought Japanese cherry trees and Manchurian animals to Brazil and Brazilian plants to Japan and Manchuria.

Animal and Plant by Japanese Migrant Ships

An article appeared in *Brasil jihō* (Noticias do Brasil), a Japanese newspaper published in São Paulo, dated January 27, 1940, referring to the donation of animals and plants (No. 2091).

Aromatic “Orchid” Ambassador:

From Manchukuo to Brazil; Badger Plays his Part

We wish to exchange beautiful flowers and rare animals, and so contribute to goodwill between Brazil and Manchukuo.³

Such was the proposal made to the Kobe Japan-Brazil Association (Kobe Nippaku Kyōkai) by Mr. Mitsushi Nakamata, the head of the Zoological and Botanical Gardens in Xinjing (Shinkyō Dōshokubutsuen), capital of the puppet-state of Manchukuo established by the Japanese Guandong Army after its conquest of Manchuria. The Kobe Japan-Brazil Association thought that a people's diplomacy of “flowers and animals” was an interesting idea at a time when Japan and Brazil were in opposition to one another. Association Chairman Hara, familiar to Brazil-resident Japanese, dispatched a communication to the National Zoological and Botanical Gar-

² Yōsuke Tanaka. *Senzen imin kōkai monogatari* [The Story of Prewar Migrant Voyages]. São Paulo: Centro de Estudos Nipo-Brasileiros, 2010.

³ *Brasil jihō* (Noticias do Brasil), No. 2091, January 27, 1940.

dens of Rio de Janeiro that very day. The first consignment of gifts was entrusted to the 5,425-ton *Brisbane-Maru*, owned by the Osaka Shosen Kaisha shipping company (OSK). The ship set sail from Kobe on November 29, 1939. The animals they sent from Manchukuo were two Amur lions, a pair of Usley eagles, and two horned owls, together with six and a half-month’s worth of special feed for each animal. They also sent several species of orchids, the national flower of Manchukuo, by the *Brasil-Maru* (cf. Figure 2), which set sail for Brasil on November 17 (*Brasil jihō*, No. 2091, January 27, 1940).

Construction of the Xinjing Zoo and Botanical Gardens, the largest zoo in Asia, had begun in 1938 in Xinjing Special City, the capital of Manchukuo. The zoo was planned with many innovative features such as an orientation to ecological display that combined a zoo and a botanical garden; the complete adoption of an open farm system for animal exhibitions; the acclimatization of animals to life in the north, leadership in education and research; de-emphasis on entertainment, and industrial applications.⁴ Nakamata, who had proposed the exchange of plants and animals with Brazil as a goodwill gesture, had been assigned to Xinjing from his previous position at the Sendai Zoo. After World War II, he became director of Maruyama Zoo in Sapporo and Asahiyama Zoo in Asahikawa, both in Hokkaido. At that time, Manchukuo, Japan’s puppet state, had become the object of international criticism, did not have diplomatic relations with Brazil. An unofficial relationship had been established through the mediation of the Kobe Japan-Brazil Association in cooperation with the Osaka Shosen Kaisha. This was a pioneering project that marked the beginning of the kind of “flora and fauna diplomacy” that continues in the present day with “panda diplomacy.”

What is noteworthy about the exchange of plants is the transplanting of cherry trees, which is considered one of the symbols of Japan. At the same time the “ambassadors of animals and plants,” cherry trees and “more than 20 garden trees” were donated to Rio de Janeiro, the capital city of Brazil. Consider this:

“The Avenue Between Japan and Brazil: Coming Soon to Rio de Janeiro”

⁴ Yasuhiro Inuzuka, “Shinkyō Dōshokubutsuen kō” [A Study of the Xinjing Zoo and Botanical Gardens], *Chiba Daigaku Jinbun Shakai Kagaku Kenkyū*, no. 18, May, 2009 pp. 15-25.

In addition to the aforementioned “Flower Animal Mission,” 20 kinds of garden trees were sent by the Japanese government to the Brazilian government on the *Brasil-Maru*. The Brazilian government planted the trees on the Tijuca main street in Rio de Janeiro as a sign of long-lasting friendship with Japan.⁵

In return for the donation of the cherry tree saplings, Rio de Janeiro City donates “310 saplings of 20 species of Brazilian trees” to Tokyo Prefecture and Osaka City, respectively, along with a letter of appreciation from Mayor Henrique Dodsworth to Shōzō Murata, president of the Osaka Shōsen Kaisha and a member of Japan’s House of Peers.⁶

This is one example of the occasional exchange of animals and plants facilitated by Japanese migrant ships during the pre-Pacific War period. The exchange of animals and plants between Japan, Manchukuo, and Brazil is thought to have played a significant role in Japan’s “animal and plant diplomacy.” At that time, Japan and Manchukuo, which had become increasingly isolated in the international community, hoped to expand their connections in South America through the development of triangular trade interests for mutual benefit. It is probable that this effort took place against the backdrop of restrictions Brazil placed on Japanese immigrant numbers under the “New Immigration Act” of 1934. The act was linked to the Japanese invasion of China and the establishment of the puppet state of Manchukuo.

Related Considerations

It seems likely that three motivations lay behind the exchange of animals and plants between Japan/Manchukuo and Brazil which were facilitated by the migrant vessels:

- 1) Japan and the Kobe Japan-Brazil Associação: The pioneering of new projects prompted by the reduction in numbers of migrants to Brazil and the expansion of Japan and the association’s presence in Brazil through the exchange of plants and animals;

⁵ *Brasil jihō* (Noticias do Brasil), No. 2091, January 27, 1940.

⁶ *Umi*, vol. 106, Osaka Shōsen kaisha, July, 1940, p. 36.

- 2) Manchukuo and the Xinjing Zoo and Botanical Gardens: The enrichment of the botanical gardens through the receipt of animals and plants from Brazil, and recognition and friendship between countries that did not have official diplomatic relations;
- 3) Brazil and the Rio de Janeiro Zoo and Botanical Gardens: The enrichment of botanical gardens through the receipt of rare animals and plants from East Asia and the promotion of friendship with countries that did not have official diplomatic relations such as Manchukuo.⁷

One can presume that behind this exchange of animals and plants between Japan, Manchukuo, and Brazil was the agenda of the Japanese and Manchukuo authorities seeking to expand trade between Brazil and Manchukuo in order to secure resources, even as the embargo imposed by the United States and the Allied powers was expanded. It is noteworthy that migrant vessels were engaged in this exchange of people, goods, and culture between East Asia and South America in the midst of a tense political climate with migrant vessels prioritizing economic effects.

We historians of migration should pay more attention to the process of migration and its functions not only at its destination but also on board the migrant-carrying vessels.

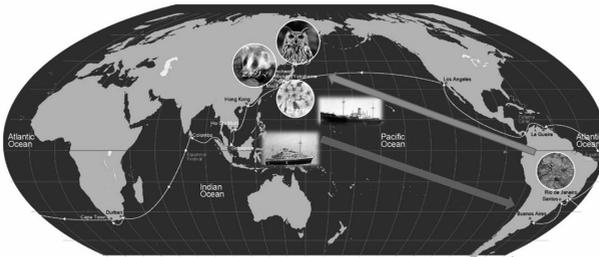


Figure 2. “Fauna and Flora Diplomacy” between Japan, Manchuria and Brazil in 1940

⁷ Sachio Negawa, “Kyokutō to Nambei no sesshoku kaimen: Iminsen ni yoru dō-shokubutsu no ‘utsushi’” [Worlds of Contact between the Far East and South America: The “Movement” of Animals and Plants by Migrant Ships via Migrant Ships]. In Inaga Shigemi, eds. *Utsushi to utsuroi: Bunka denpa no utsuwa to shokuhēn no jissō* [Metempsychosis and Passage: Recipients of Transcultural Migration and Haptic Transfigurations]. Tokyo: Kachōsha, 2019, p. 513.

Navigating Between the West and the Rest: East Asia's modern Experience in the Works of Enrique Gomez Carrillo (1904-1907)¹

Facundo GARASINO

Osaka University, Graduate School of Letters

Introduction

This presentation focuses on the writings of the Guatemalan literary critic, journalist and travel literature author Enrique Gomez Carrillo on East Asia and Japan at the closing and the aftermath of the Russo-Japanese War, between 1905 and 1907. This presentation will illustrate one example of Japan's modern experience on the Latin American intellectual sphere, by analyzing how Carrillo attempted to challenge hierarchical divisions of West and East.

Born in Guatemala in 1873, he left for Madrid in 1891 and settled in Paris soon after. From there, Carrillo authored a vast array of articles for newspapers and magazines of Latin America and Spain, and published dozens of books. His writings were celebrated for presenting rare landscapes and literatures of Europe, Africa and Asia, and for the poetic power of his prose in bringing aesthetic renovation to Hispanophone literature.

Categories of East and West, as the particular temporal and spatial order of Western modernity for mapping the World, have been central to defining political identities, boundaries and agencies in transnational intellectual, literary and cultural encounters (Konishi 2013 : 14). The following discussion will focus on Carrillo's maritime travel through Asia at the closing of the Russo-Japanese War,

¹ This paper is an abridged version of a paper published in *New Ideas in East Asian Studies*, Special Edition for 2017. See Garasino, F., 2017. "Writing East Asia and Japan from Latin America: Literature, Nationalism and Critique in the Works of Enrique Gómez Carrillo". *New Ideas in East Asian Studies*, Special Edition for 2017, pp. 40-47.

both as a literary perspective and as an actual means of mobility in transnational intellectual encounters. By doing this, it will explore how authors writing from a position oscillating between East and the West can challenge the claimed division between the West and the rest, thus complicating and disrupting the structures creating peripherality among cultures and literatures.

The first part will analyze Carrillo's critical interpretations of world literature as independent and mutually equal entities. It will demonstrate how his nation-centered conception of the world literary field destabilized the epistemological divide between the West and the Rest.

Second, I will consider Carrillo's explorations of non-Western literature through his encounter with East Asia during his maritime travel through East Asia at the closing of the Russo-Japanese War. I will suggest that maritime travel provided a literary locus for redefine his nation-centered idea of world literature as an anti-colonial endeavor that challenged the legitimacy of imperialist competition over the influence over Korea.

Finally, I will describe how Carrillo's maritime travel provided an actual means of mobility for attaining an intellectual encounter with modern Japan. I will make clear that Carrillo re-interpreted the Orientalist imagery about Japan through his nation-centered conception of world literature, thus praising Japan's nationalism as a model for modernization while criticizing its emerging imperialism.

1. Carrillo's critical interpretations of world literature:

Carrillo appears in literary circles by introducing the latest aesthetic trends in French literature, eager to cooperate with fellow young Latin American writers in constructing aesthetic modernity. This endeavor can be identified with *modernismo*, the first manifestation of a distinctively American voice in Spanish literature, and the first aesthetic response to Latin America's uneven modernization (Miller 2008 : 12-14). In this context, Carrillo opposed the symbolism of Paul Verlaine, Jean Moréas and others to Spanish poetic tradition and its prevailing naturalism.

In broadening the scope of Spanish literature to shape modern aesthetics, he would venture out the Western Europe-centered transatlantic literary field. Essays on Russian author Alexander Pushkin, contemporary Greek Literature, and the

Egyptian-Jewish author Yaqub Sanu, among several non-Western European authors, were pioneering in rendering visible new literatures for Hispanophone readers. These literary travels opened a non-Eurocentric literary field, envisioning a space to connect the literary and intellectual production of Asia with that of Latin America. In doing this, Carrillo regarded the nation as the primal unit for organizing the world. Or rather, by navigating national literatures the world itself appears as a unity composed of interconnected literatures, as expressed in the below commentary on Chinese Tang poetry read through French translations.

What provoked for me the greatest admiration when I first read Pavie's book, was the multiple similitudes existent between the Chinese poets of the seventh century and our contemporary poets. "Li-Bai", I said to myself, "is a precursor of Baudelaire, a grandfather of Wyzewa, a master of Ruben Dario" (Carrillo 1895 : 98).

Carrillo reads the poetry of Li Bai to reveal an interconnected network of national literatures, which makes possible to connect Tang Chinese aesthetics not only with the symbolism of Charles Baudelaire and Téodor de Wyzewa, but also with the contemporary Latin American modernist poetry of Ruben Dario. This inter-connectedness and mutual resonance of world literatures disrupts colonial patterns of influences permeating from the West to the Rest, suggesting that aesthetic influences could go the other way. This scope will allow Carrillo to subvert a-priori hierarchical divides between literatures written in the West and those of the Rest. Carrillo thus defined the nation as the prime agency for participating in the world literary field, expressing literarily the nineteenth century ideal of the nation as the requirement for defining an autonomous identity in the world.

2. Carrillo's literary explorations through maritime travel

Carrillo would reframe his aesthetic principle of equality and commensurability amongst national literatures (Lyon 1994 : 230), crossing from the literary into the political sphere thus challenging the colonial divide in East Asia at the closing of the Russo-Japanese War. In late June 1905, Carrillo boarded the "Sydney" from the French navy company *Messageries Maritimes* at Marseille, sent by

the influential *La Nación* of Buenos Aires and *El Liberal* of Madrid. His mission was to report on the social, political and intellectual situation of the country's struggle with Russia. Until his return on October, he published numerous articles in both newspapers, later compiled in three books, *From Marseille to Tokyo* (1906), *The Japanese Soul* (1907), and *Heroic and Gallant Japan* (1912).

He called at Port Said, Djibouti, Colombo, Singapore, Saigon, Hong Kong and Shanghai before landing in Yokohama. Carrillo moved among the colonial networks of British and French empires at their height and the emerging Japanese Empire. He would leave a testimony of the colonial situation in East Asia as he navigated through the Korean Strait by introducing the classic *Chunhyangjeon*, which he read in the joint French version by Hong Jong-u and Léon de Rosny. Making a comparison between the international notoriety of Japanese literature and arts with the invisibility of Korean works, Carrillo emphasized the meaning of studying Korean literature in the context of an inter-imperialist war:

At these moments, when two great predator nations are disputing the dominance over the gentle country of the Morning Calm, nothing is more interesting than analyzing this unique novel. (Carrillo 1906 : 126)

At a time when Korea's sovereignty was at stake, Carrillo's reading of *Chunhyangjeon* affirmed the legitimacy of Korean literature to participate in the world literary field against its precarious political condition between two empires. Carrillo projected his notion of the nation as the core agency for partaking in the world literary field into a political agency, challenging the divide between sovereign nations and the subjects denied that right. The author emphasized the universality of *Chunhyangjeon*, a story of two lovers that overcome familiar and societal obstacles until a happy conclusion of dramatic reunion (Kwon 2015 : 101-102). Its artistic value and dramatic impact positioned the Korean classic among the most sophisticated European novels. Carrillo's assertion of the autonomy of Korean literature challenged not only the alleged inferiority of non-Western cultures against the West, but also the illegitimacy of imperialist policies towards a nation with its own autonomous culture. Traveling across the networks of imperialism in Asia and Africa, Carrillo's world literary readings denaturalized the colonial divide, and provided a scope for engaging critically with Japan's modern experience.

3. Carrillo's intellectual encounters with modern Japan

Since the 1870's, diplomats, scientists and government officials from Mexico, Brazil, and Argentina focused on Japan's advancement in public health, education, military and industrial development. Having gained independence through the first two decades of the nineteenth century, Latin American countries followed a technocratic model for modernization (Miller 2008 : 16). Meiji Japan seemed a model for transforming a pre-modern non-European people into a modern nation capable of embodying Western civilization, attaining political stability, national unity and economic progress (Gasquet 2007). Therefore, travelogues and other reports on Japan's modern development held a high public value and found easily their way into the press.

Upon arriving to Yokohama, Carrillo followed the editorial line of accounting Meiji Japan as an exemplary case for the modernization of Latin American societies. Moreover, he did so through reinterpreting the Orientalist motifs of A.B. Mitford, Pierre Loti and Lafcadio Hearn through his political understanding of national literature. In doing so, he envisioned Japan as a successful model of nation-state, encompassing both distinctive and sophisticated cultural traditions and political autonomy. According to him, Japanese cultural traditions as supplying the values for nurturing national subject's morality.

The nationalist sentiment takes advantage of all the warlike legends. The learned one's account for more than one hundred poems and up to two hundred plays inspired in the veridical story of the forty-seven Ronin [...]. Today, the Japanese worship these heroes as their holiest saints, and their forty-seven tombs [...] compose an altar in where every good subject of the Mikado swears to emulate the sublime conduct of the Ronin if someday circumstances oblige him to do so (Carrillo 1907: 44-46).

Nevertheless, Carrillo's conviction on the mutual equality of nations would be at odds with attempts of one nation-state to conquer or colonize the others. In traveling to Japan, he gained access to local influential publications such as *Kokumin Shinbun* and *Taiyō*. Mediated by the selection and Spanish translation of

a Japanese collaborator related with diplomatic circles, he was able to read about the discussions over the postwar policies towards Korea at the close of the Russo-Japanese War:

As the intellectuals argue, the bureaucrats and the military are acting. And to act, between the Japanese who today engage with the colonization or conquest of Korea, means to abuse, to tyrannize, to humiliate. (Carrillo 1907: 222)

Japan's success as a nation did not grant rights for colonial tutelage against Korea. Carrillo's re-readings of canonical Orientalist imagery encompassed an ambivalent movement of aligning with Japan's nationalism whereas rejecting its imperialism. His re-reading of Orientalist narratives as an expression of a robust national tradition supporting Japan's political autonomy was incompatible with self-celebrating exceptionalism over other national cultures.

4. Concluding remarks:

Carrillo was convinced of the equality among national literatures, and thus questioned prejudices about the aesthetic value of literary works based on their origin. In this context, maritime travel provided him a new literary perspective to reframe his national-based model of world literature into a political expression of anti-imperialism. Through traveling physically to Japan, and textually to Korea, at the closing of the Russo-Japanese War, Carrillo projected his notion of the nation as the core agency composing the world literary field into the international political field, denaturalizing the colonial divide between the West and the Rest.

In addition, as a means of mobility, maritime travel mediated Carrillo's intellectual encounter with modern Japan, allowing him to portrait Japan as a model of harmony between national traditions and successful modernization, yet at the same time openly criticizing its crescent imperialism. This complex picture made him stand out from prevailing attitudes among nineteenth century English-speaking writers that favored the Japanese over other Asians who supposedly were incapable of awaking themselves from their "Oriental lethargy", and from other Latin American commentators that applauded it uncritically as an example of patriotism, politi-

cal efficiency, and the *modernista* aesthetic ideal of “living among beauty”.

References

- Aydin, C., 2007. *The Politics of antiwesternism in Asia: Visions of world order in pan-Islamic and pan-Asian thought*. New York: Columbia University Press.
- Gómez Carrillo, E., 1895. *Literatura extranjera: Estudios cosmopolitas*. Paris: Garnier Hermanos.
- 1905. “En el Japón: ¡Orgullo!;Orgullo!”, *El Liberal*, Madrid, October 3.
- 1906. *De Marsella a Tokyo: Sensaciones de Egipto, La India, La China y el Japón*. Paris: Garnier Hermanos.
- 1907. *El Alma Japonesa*. Paris: Casa Editorial Garnier Hermanos.
- 1912. *El Japón Heróico y Galante*. Madrid: Renacimiento.
- 1919. *En Plena Bohemia*. Madrid: Mundo Latino.
- Colombi, B., 2004. *Viaje intelectual: Migraciones y desplazamientos en América Latina (1880-1915)*. Rosario: Beatriz Viterbo.
- Damrosch, D., 2003. *What is World Literature?* Princeton: Princeton University Press
- Gasquet, A., 2007. *Oriente al Sur: El orientalismo literario Argentino de Estevan Echeverría a Roberto Arlt*. Buenos Aires: Eudeba.
- Konishi, S., 2013. *Anarchist modernity: Cooperatism and Japanese-Russian intellectual relations in Modern Japan*. Cambridge: Harvard University Press.
- Kowner, R., ed., 2007. *The impact of the Russo- Japanese War*. London: Routledge.
- Kwon, N. A., 2015. *Intimate empire: Collaboration and colonial modernity in Korea and Japan*. Durham: Duke University Press.
- Lyon, J. M., 1994. “The Herder syndrome: A comparative study of cultural nationalism”. *Ethnic and Racial Studies*, 17 (2), 224-237.
- Miller, N., 2008. *Reinventing modernity in Latin America: Intellectuals imagine the future, 1900-1930*. New York: Palgrave Macmillan.
- Siskind, M., 2014. *Cosmopolitan desires: Global modernity and world literature in Latin America*. Evanston, Illinois: Northwestern University Press.
- Starrs, R., 2006. “Lafcadio Hearn as Japanese nationalist”. *Japan Review* (18), 181-213
- La Nación. 1905. ““La Nación” en el Imperio del Sol Naciente. Nuestro enviado especial en viaje”, *La Nación*, Buenos Aires, June 20.

第 22 回国際比較文学大会 ICLA

(2019 年 7 月 29 日～8 月 2 日、マカオ大学)



ICLA 大会会場となったマカオ大学



ICLA 大会レセプション (Grand Ballroom Studio City, Macau, 2019 年 7 月 29 日)



ICLA 会場「劉少榮樓」と大会参加者



ICLA において報告する稲賀繁美教授（マカオ大学、2019年7月31日）



ICLA において報告する根川幸男機関研究員 (マカオ大学、2019 年 7 月 31 日)



ICLA において報告する橋本順光教授 (マカオ大学、2019 年 7 月 31 日)



マカオ海事博物館



マカオ海事博物館調査（「中華及東南亞諸島地図」、「東印度水路誌」1596年）



マカオ調査 (澳門内港)



マカオ調査 (媽祖廟)

次世代の国際共同日本研究・研究協力への模索

稲賀繁美

日文研は第3期中期計画で、人間文化研究機構から、「日本関連在外資料調査研究・活用」事業の「プロジェクト間連携による研究成果活用」という総括業務を委託された。またその傍らでは、機能強化の一環として「大衆文化研究プロジェクト」の推進と、「国際日本研究」コンソーシアムの運営を求められた。もとより教授定員15名（発足時）の零細企業には荷の過ぎた任務だが、並外れた力量の構成員によってかろうじてその責めを塞いだ。

筆者は、「在外」推進室の責任者を務めた。もとよりひとり日文研のみで達成できる業務ではない。だが資料や人材活用において、世界との network 形成を不断に更新する必要性を痛感した。平戸市との協力関係からは、500年の世界史を踏まえた移民文化交流が具体化した。リスボンでの EAJIS（欧州日本研究会）やマカオでの ICLA（国際比較文学会）でその成果を発信し、従来の国際日本研究からの脱皮の可能性を体験した。双方向・多国籍の学術協力網、特定の専門分野を横断した学際的研究系の必然性、が次なる研究目標を具体的に浮上させる。

行財政状況の悪化を見越して、これらをどう実現するか。ひとつには30年間の資料の蓄積と internet の発達を活用する virtual 研究会の募集と運営。経費節減と国際的な協働を一挙に実現する方策である。ふたつには海外から雇用する客員研究員を共同研究の中核に位置付ける積極策。日文研の共同研究は、おしなべて「国際」を旨とするのが当然だろう。3つめに、共同研究刷新の足場として、国内の国際日本研究諸機関と国外の日本研究者網との多角的な交流の consortium 運営基盤への脱皮と国際的統廃合。競争資金を含む複数財源を組み合わせ、海外の研究機関や教育施設をも巻き込みつつ、次期中期6年計画に先鞭をつける企画を提唱できるか否かが、将来の明暗を分かす。香港や珠海、澳門や新嘉坡にも目配せしつつ、行政指導の後追いではなく、2050年を視野に、「海洋アジア」の多国籍的展望を、環太平洋に広がる学術移民交易網によって実現できるか否かが、日文研の将来を決することだろう。

Exploring International Team Research and Collaboration for Next-generation Scholars in Japanese Studies Overseas

INAGA Shigemi

Under its Third Mid-Term Plan (2016-2021) the National Institutes for the Humanities (NIHU) has placed Nichibunken in charge of “Coordination between Projects to Make Effective Use of Research Results” of the Network-based Projects : Japan-related Documents and Artifacts held Overseas. As part of efforts for functional enhancement of the project, Nichibunken has also been assigned to promote the Japanese Popular Culture Research Project and serve as secretariat for the Consortium for Global Japanese Studies. These tasks seemed a bit too heavy for a small organization of “fifteen professors” (at the time of Nichibunken’s founding) but the extraordinarily capable staff has proved capable of fulfilling the tasks.

I took charge of the “Overseas” promotion office. This work is not of the sort that can be fulfilled by Nichibunken alone. I felt keenly the necessity to continually update the network in various parts of the world for best utilization of documents and human resources. Our collaboration with the city of Hirado, for instance, has produced a migration and cultural exchange program based on its history of 500 years. We reported on the results of the program at the 2017 meeting in Lisbon of the European Association for Japanese Studies and the XXII Congress in Macau of the International Comparative Literature Association, and saw the possibility for achieving a new break-through in the conventions of global Japanese studies. The experience brought into clear focus the increasing importance of interactive and cross-cultural networks of academic cooperation and systems for inter-disciplinary study in order to carry out further objectives of research.

In view of the likely further tightening of the government fiscal situation, how should we achieve those objectives? First, we need to organize team research meetings on line that will utilize the advances of the Internet as well as the resources

Nichibunken has accumulated over the last three decades. This will allow both cost reduction and enhanced international cooperation. Second, an active policy should be adopted to place Nichibunken-hired researchers from overseas at the core of team research. Nichibunken's team research projects as a whole should be first and foremost international. Third, we propose that, as a springboard for team research reforms, a consortium be formed for multifaceted exchange between global Japanese studies institutes in Japan and networks of researchers of Japanese studies overseas, as well as for international organizational consolidation.

The prospect for the future rests upon whether we can propose feasible plans that, combining several sources of funding (including competitive funds) and involving overseas researchers and educational institutes, will lead to the next six-year mid-term plan. Nichibunken's future will be determined by whether we, while watching Hong Kong, Zhuhai, Macau, and Singapore and with a view to the year 2050, will be able to present a bright multinational intellectual outlook of "Maritime Asia" through Trans-Pacific academic migration networks—this we should do instead of only following in the path of government-issued administrative guidance.

from *NICHIBUNKEN NEWSLETTER*, No. 100 Dec. 2019

* The title is modified for the present purpose.

平戸シンポ & ICLA 報告書執筆者者紹介 (掲載順)

稲賀 繁美 INAGA Shigemi

国際日本文化研究センター・教授

研究分野：比較文学比較文化、文化交流史

主な著作：『映しと移ろい 文化伝播の器と蝕変の実相』（花鳥社、2019）（編著）、『海賊史観からみた世界史の構築—交易と情報流通の現在を問直す』（思文閣出版、2017）（編著）、『接触造形論—触れあう魂、紡がれる形』（名古屋大学出版会、2016）、『絵画の東方—オリエンタリズムからジャポニズムへ』（名古屋大学出版会、1999）など多数。

松田 清 MATSUDA Kiyoshi

京都大学・名誉教授、神田外語大学日本研究所・客員教授。

研究分野：日本洋学史、日欧知識交流史、書誌学、近世京都学。

主な著作：『洋学の書誌的研究』（臨川書店、1998）、『国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録—1900年以前刊行分—』（国際日本文化研究センター、1998）（共編）、『佐賀鍋島家「洋書目録」所収原書復元目録』（2006）、『京の学塾 まなびや 山本読書室の世界』（京都新聞出版センター、2019）など多数。

フレデリック・クレインス Frederik CRYNS

国際日本文化研究センター・准教授

研究分野：日欧交渉史

主な著作：『オランダ商館長が見た江戸の災害』（講談社現代新書、2019）、『戦乱と民衆』（講談社現代新書、2018）（共著）、『日蘭関係史をよみとく—（下巻）運ばれる情報と物 臨川書店、2015）（編著）、『十七世紀のオランダ人が見た日本』（臨川書店、2010）、『江戸時代における機械論的身体観の受容』（臨川書店、2006）など多数。

シンティア・フィアレ Cynthia VIALLE

ライデン大学・研究員

研究分野：アジアを中心としたヨーロッパ拡張の歴史

主な著作：『*The Deshima Dagregisters (Institute for the History of European Expansion Leiden, 1780-1790 [1996]; 1790-1800 [1997]; 1641-1650 [2001];*

1650-1660 [2005], 1660-1670 [2010]), *The Deshima Diaries Marginalia 1740-1800* (The Japan-Netherlands Institute, 2004), 「江戸時代にアジアとヨーロッパへ輸出された日本製品」フレデリック・クレインス編『日蘭関係史をよみとく— (下巻) 運ばれる情報と物』(臨川書店、2015) 他。

前田 秀人 MAEDA Hideto

平戸市文化観光商工部文化交流課・職員

研究分野：近世初期の日蘭関係

主な著作：「オランダ商館をめぐる平戸班と幕府」(『平戸市史研究』創刊号、1995)、「オランダとの技術交流」(『出島以前』ろうきんブックレット8、1999) 他。

朝日 祥之 ASAHI Yoshiyuki

国立国語研究所・准教授

研究分野：言語学、日本語学

主な著作：「北海道方言の録音資料の資源化と課題—北見市常呂町調査を事例に—」(『北海道方言研究会会報』94 32-38, 2018)、「サハリン島における言語関係史—日本語を中心に」(Arctic Circle 98 4-9, 2016), “Interface between regional and social dialects in Hokkaido: The case of the small town of Tokoro” (Multilingual Perspectives in Geolinguistics 62-68, 2015) 他。

根川 幸男 NEGAWA Sachio

国際日本文化研究センター・機関研究員

研究分野：移民史・文化研究

主な著作：『「海」復刻版』第1巻～第14巻(柏書房、2018)(監修・解説)、『ブラジル日系移民の教育史』(みすず書房、2016)、『越境と運動の日系移民教育史—複数文化体験の視座』(ミネルヴァ書房、2016)(共編著)、*Cinquentenário da Presença Nipo-Brasileira em Brasília* (FEANBRA, 2008)(共著) 他。

光平 有希 MITSUHIRA Yuki

人間文化研究機構総合情報発信センター・研究員／国際日本文化研究センター・特任助教

研究分野：音楽療法史・医療文化史

主な著作：『「いやし」としての音楽—江戸期・明治期の日本音楽療法思想史—』（臨川書店、2018）、〔共著〕『国際日本文化研究センター所蔵 日本関係欧文図書目録』第4巻（臨川書店、2018）他。本シンポジウムでは、総合司会を務めた。

橋本順光 HASHIMOTO Yorimitsu

大阪大学大学院文学研究科・教授

研究分野：比較文学

主な著作：『欧州航路の文化誌：寄港地を読み解く』（青弓社、2017）（共編著）、『天空のミステリー』（青弓社、2012）（共編著）、*Yellow Peril, Collection of Historical Sources (Primary Sources on Yellow Peril) (Pt. II)* (Edition Synapse, 2007)（編著）他。

ファクンド・ガラシーノ Facundo GARASINO

大阪大学大学院文学研究科 博士後期課程

研究分野：日本研究

主な著作：“Writing East Asia and Japan from Latin America: Literature, Nationalism and Critique in the Works of Enrique Gomez Carrillo” (*New Ideas in East Asian Studies*, Special Edition: Critique in/of Japanese Studies, 2017)、「ラテンアメリカから帝国を宣伝する：ひとりのアルゼンチン日本移民が語る西洋・オリエント・新世界」（『日本学報』35号、2016年）。

異文化へのあこがれ—国際海洋都市 平戸とマカオを舞台に
—在外資料が変える日本研究—
2020年度 オンライン版

Yearning for Foreign Cultures
An International Symposium in Hirado and A Panel in Macau
New Aspects of Japanese Studies based on Overseas Documents
online edition (2020)

稲賀繁美 編 推進会議・総括責任者
国際日本文化研究センター教授
Ed. by INAGA Shigemi, Professor, IRCJS
根川幸男 編集実務担当
国際日本文化研究センター・機関研究員
With the assistance of NEGAWA Sachio, Research Fellow, IRCJS

International Research Center for Japanese Studies
Head and Researcher of the Project Coordination Meeting—Suishinkaigi

Printed in Japan, March 2021
Printed by Uno Printing Co. Ltd., Kyoto
600-8357 京都市下京区黒門通五条入ル Tel. 075-801-6391



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国際日本文化研究センター
International Research Center for Japanese Studies